特別史跡　西都原古墳群発掘調査報告書　第５集

西都原（さいとばる）１７１号墳

（第２分冊）

平成16年３月

宮崎県教育委員会

特別史跡　西都原古墳群発掘調査報告書　第５集

西都原（さいとばる）１７１号墳

（第２分冊）

２００４年３月

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会では、平成７年度から、文化庁の「地方拠点史跡等総合整備事業（歴史ロマン再生事業）」による助成を得て、西都原古墳群の新たな整備を進めております。

171号墳については、平成10年度から12年度にかけて発掘調査を行い、整備の基礎となる貴重な資料を得ることができました。本書は、同調査によって得られた様々な成果について報告するものです。

この報告書が、学術研究においてはもちろん、学校教育や生涯学習の場においても活用され、遺跡や文化財に関する理解を深める一助となることを期待いたします。

本事業を進めるにあたり、御理解・御協力を賜った地元住民の方々をはじめ、指導委員会の先生方や各関係の皆様に対し、衷心よりお礼申し上げます。

平成16年３月

宮崎県教育委員会教育長
岩　切　正　憲

例　言

1　本書は、文化庁の「地方拠点史跡等総合整備事業（歴史ロマン再生事業）」による助成を得て、平成10年度から平成12年度にかけて発掘調査を実施した西都原171号墳の発掘調査報告書の第２分冊である。本書では、171号墳から出土した遺物を中心に報告する。なお、大正時代の調査と遺構については、第１分冊第で既に報告しているので、そちらを参照いただきたい。

2　発掘調査は宮崎県教育委員会文化課が行い、整理作業については宮崎県埋蔵文化財センターにおいて実施した。整理作業全般に協力を得た作業員は以下のとおり（敬称略、50音順）

池田香代	稲元久美子	伊藤明子	稲元光恵	井野貞代
上田寿美子	榎木和代	榎木啓子	大坪智子	大平尚代
岡　智恵	押川保子	小田原由美	梶山朋子	金丸琴路
河野シゲ子	菊池ひろみ	岸下真未	木津節子	久保三恵
新開三千代	新森奈緒子	高橋茂子	田原辰子	田村とし子
時任純代	富田素子	戸高詳子	外山真由美	外山美香
鳥井幸代	中山美菓	長谷川恵美子	長谷川恵子	浜砂妙子
日高司奈子	日高比佐代	富士本智子	古谷昭子	松川羊子
松田綾子	森美智子	山崎千恵美	吉村ゆり	脇坂公仁子

3　現地調査における図面作成は、松林豊樹、高橋誠、大原一彦、小守容子が主に行い、一部（有）ジパングサーベイに委託した。

4　現地調査における写真撮影は、松林豊樹、高橋誠、東憲章が行い、空中写真撮影は、(株)スカイ・サーベイ、(株)九州航空に委託した。

5　本書に使用した方位は磁北及び座標北である。

6　本書に使用した図面の製図は、主に松林豊樹が行い、池田香代、榎木和代、菊池ひろみ、戸高詳子の協力を得た。

7　本書に使用した遺物写真は松林豊樹が撮影したほか、図版１～３に使用した写真の掲載については、小学館及び久我秀樹氏（久我写真事務所）の協力を得た。

8　本書の執筆、編集は松林豊樹が行った。

9　調査に伴って作成した図面・写真等の記録類及び出土遺物は、県立西都原考古博物館及び宮崎県埋蔵文化財センター神宮分館で保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章 はじめに
　第１節　調査に至る経緯
　第２節　調査組織
　第３節　調査の概要
第Ⅱ章 西都原古墳群の概要
　第１節　日向地方の古墳分布状況
　第２節　宮崎平野部の古墳分布状況
　第３節　西都原古墳群の概要
第Ⅲ章 大正年間の調査
　第１節　大正年間の西都原古墳群調査概要
　第２節　171号（旧112号）墳の調査
第Ⅳ章 墳丘と周溝
　第１節　墳丘の形状
　第２節　葺石
　第３節　周溝

－以上第１分冊－

第Ⅴ章　遺物
　第１節　円筒埴輪 …… 1
　第２節　器財埴輪 …… 42
　　（１）家形埴輪 …… 42
　　（２）短甲形埴輪 …… 45
　　（３）蓋形埴輪 …… 50
　　（４）壺形埴輪 …… 57
　第３節 その他の遺物 …… 60
第Ⅵ章　おわりに
　第１節　墳丘について …… 66
　第２節　埴輪について …… 69
　第３節　まとめ …… 74

－以上本書－

挿　図　目　次

第 1 図　墳頂部円筒埴輪列基底部検出位置図（S＝1／250）…… 3～4
第 2 図　1段目テラス円筒埴輪列基底部検出位置図①（S＝1／250）…… 5～6
第 3 図　1段目テラス円筒埴輪列基底部検出位置図②（S＝1／250）…… 7～8
第 4 図　1段目テラス円筒埴輪列基底部検出位置図③（S＝1／250）…… 9～10
第 5 図　円筒埴輪出土位置図（S＝1／250）…… 11～12
第 6 図　円筒埴輪各部名称と口縁部及び突帯分類 …… 13
第 7 図　円筒埴輪実測図①（S＝1／6）…… 20
第 8 図　円筒埴輪実測図②（S＝1／6）…… 21
第 9 図　円筒埴輪実測図③（S＝1／6）…… 22
第10図　円筒埴輪実測図④（S＝1／6）…… 23
第11図　円筒埴輪実測図⑤（S＝1／6）…… 24
第12図　円筒埴輪実測図⑥（S＝1／6）…… 25
第13図　円筒埴輪実測図⑦（S＝1／6）…… 26
第14図　円筒埴輪実測図⑧（S＝1／6）…… 27
第15図　円筒埴輪実測図⑨（S＝1／6）…… 28
第16図　円筒埴輪実測図⑩（S＝1／6）…… 29
第17図　円筒埴輪実測図⑪（S＝1／6）…… 30
第18図　円筒埴輪実測図⑫（S＝1／6）…… 31
第19図　円筒埴輪実測図⑬（S＝1／6）…… 32
第20図　円筒埴輪実測図⑭（S＝1／6）…… 33
第21図　家形埴輪出土状況（S＝1／250）…… 43
第22図　家形埴輪実測図（S＝1／4）…… 44
第23図　短甲形埴輪出土状況①（S＝1／250）…… 47
第24図　短甲形埴輪出土状況②（S＝1／40）…… 48
第25図　短甲形埴輪実測図（S＝1／4、但し217・224はS＝1／6）…… 49
第26図　蓋形埴輪出土状況（S＝1／250）…… 51～52
第27図　蓋形埴輪実測図①（S＝1／4）…… 53
第28図　蓋形埴輪実測図②（S＝1／4）…… 55
第29図　蓋形埴輪実測図③（S＝1／4）…… 56
第30図　蓋形埴輪実測図④（S＝1／4）…… 58
第31図　蓋形埴輪実測図⑤（S＝1／4）…… 59
第32図　壺形埴輪出土状況①（S＝1／250）…… 61～62
第33図　壺形埴輪出土状況②（S＝1／10）…… 63
第34図　壺形埴輪実測図①（S＝1／6）…… 64
第35図　壺形埴輪実測図②（S＝1／6）及び土器実測図（S＝1／4）…… 65

第36図　171号墳墳丘復元想定図（S＝1／200）…… 67～68
第37図　家形埴輪復元模式図（S＝1／10）…… 71
第38図　宮崎県内の埴輪出土古墳分布図 …… 73

表　目　次

第 1 表　大正及び今回の調査における各埴輪列の検出埴輪個数…… 1
第 2 表　器面調整の分類…… 17
第 3 表　器面調整と個体数…… 18
第 4 表　口径と個体数…… 19
第 5 表　突帯間の高さと個体数…… 19
第 6 表　底部径と個体数…… 19
第 7 表　底部高と個体数…… 19
第 8 表　胎土混入物色調分類と個体数 …… 19
第 9 表　器面色調分類と個体数 …… 19
第10表　西都原171号墳出土円筒埴輪観察表① …… 34～35
第11表　西都原171号墳出土円筒埴輪観察表② …… 36～37
第12表　西都原171号墳出土円筒埴輪観察表③ …… 38～39
第13表　西都原171号墳出土円筒埴輪観察表④ …… 40～41
第14表　宮崎県内の埴輪出土古墳 …… 72

図　版　目　次

図版 1　円筒埴輪①～③、壺形埴輪…… 75
図版 2　蓋形埴輪①～③ …… 76
図版 3　蓋形埴輪④～⑥、家形埴輪、短甲形埴輪①、② …… 77
図版 4　１段目テラス円筒埴輪列検出状況①（南東列・北東から）…… 78
図版 5　１段目テラス円筒埴輪列検出状況②（東コーナー付近・東から）…… 79
　　１段目テラス円筒埴輪列検出状況③（北東列・東から）…… 79
図版 6　１段目テラス円筒埴輪列検出状況④（北西列・北から）…… 80
　　大正攪乱内石碑埋設状況 …… 80
図版 7　墳頂部円筒埴輪列検出状況①（上空から）…… 81
　　墳頂部円筒埴輪列検出状況②（北東から）…… 81

図版 8　墳頂部円筒埴輪列検出状況③（北東列北半）…… 82
墳頂部円筒埴輪列検出状況④（北西列西半）…… 82
図版 9　蓋形埴輪（227）出土状況①…… 83
蓋形埴輪（227）出土状況②…… 83
図版 10　蓋形埴輪（238）出土状況①…… 84
蓋形埴輪（238）出土状況②…… 84
図版 11　壺形埴輪（260）出土状況①…… 85
壺形埴輪（260）出土状況②…… 85
図版 12　壺形埴輪（262）出土状況①（北東から）…… 86
壺形埴輪（262）出土状況②（上から）…… 86
図版 13　円筒埴輪（1～19）…… 87
図版 14　円筒埴輪（20～34－1）…… 88
図版 15　円筒埴輪（34－2～46）…… 89
図版 16　円筒埴輪（47～60）…… 90
図版 17　円筒埴輪（61～76）…… 91
図版 18　円筒埴輪（77～91－1）…… 92
図版 19　円筒埴輪（91－2～109）…… 93
図版 20　円筒埴輪（110～129）…… 94
図版 21　円筒埴輪（130～149、151、152、154）…… 95
図版 22　円筒埴輪（150、153、155～179、181）…… 96
図版 23　円筒埴輪（180、182～192）、器財埴輪（193～200）…… 97
図版 24　器財埴輪（201～219、223）…… 98
図版 25　器財埴輪（220～222、224～229）…… 99
図版 26　器財埴輪（230～245）…… 100
図版 27　器財埴輪（246～257）…… 101
図版 28　器財埴輪（258～267－1）…… 102
図版 29　器財埴輪（267－2～279）、土器（280～282）…… 103
図版 30　整備後の171号墳（南東上空から）…… 104
整備後の171号墳（南から）…… 104

第Ⅴ章　遺　　物

本古墳から出土した遺物のほとんどは埴輪である。埴輪の大部分は円筒埴輪で、一部家形、短甲形、蓋形、壺形といった器財埴輪が含まれている。以下、円筒埴輪、器財埴輪、その他の遺物として、その出土状況と遺物の特徴を報告する。

第１節　円筒埴輪

出土状況

大正時代の調査[1]では、墳頂部及び１段目テラス（報告書では基底部付近とされている）に並ぶ円筒埴輪列が確認されている。今回の調査でも、同様の地点から埴輪列が検出されたが、出土した埴輪の本数がやや異なる。第１表は、大正及び今回の調査における各埴輪列を構成する円筒埴輪数を比較したものである。

第１表　大正及び今回の調査における各埴輪列の検出埴輪個数

	墳頂部検出埴輪数		１段目テラス検出埴輪数	
	大正調査	今回調査	大正調査	今回調査
南東側	１７個	２個	２７個	３７個
北東側	１７個	１５個	４６個	３８個
北西側	１１個	１３個	２５個	１８個
南西側	４個	０個	０個	０個
合　計	４９個	３０個	９８個	９３個

墳頂部では、南東側で15個、北東側で２個、南西側で４個が減少し、特に南東側における減少が著しい。北西側では２個増加しているが、今回調査の検出埴輪数の中には基底部が樹立していない状態で検出された３個体も含んでいるので、実際は１個減少したと捉えるべきかもしれない。

１段目テラスでは、北東側で８本、北西側で７本が減少している。南東側で10個が増加しているが、基底部が樹立していない状態で検出されたのは４本であり、大正調査時に個数の誤認があった可能性が考えられる。南西側については、第１分冊で報告したように墳丘自体が大正調査以前に削平を受けていたとみられるため、両調査ともに埴輪列は確認されていない。しかし、墳丘南西側周溝埋土中からは多数の円筒埴輪片が出土しており、本来は南西側墳頂部及び１段目テラスにも円筒埴輪列が存在したと考えられる。

第１図は墳頂平坦面から検出された円筒埴輪基底部の位置図である。墳頂部の円筒埴輪列を構成する円筒埴輪基底部は、全て平坦面肩部を方形に廻る大正調査時の攪乱溝内から検出された。円筒埴輪を樹立するための穴や溝といった遺構は確認できなかったことから、大正時代の調査によって既に破壊されていたと考えられる。各列における検出本数は第１表のとおりで、北西、北東側の残存状況が比較的良好であった。大正の調査成果等から、本来は１辺約９ｍの方形に廻る埴輪列であっ

たとみられ、その樹立本数は94本前後と想定される。また、円筒埴輪自体は、１段目～２段目下位付近までしか復元できないものがほとんどで、１段目テラスの円筒埴輪よりも破片の遺存状態が悪かった。

第２～４図は１段目テラスから検出された円筒埴輪基底部の位置図である。１段目テラス円筒埴輪列では、墳頂部ほど明確な攪乱溝は検出されなかったが、当時の写真等からみても大規模な掘削がおこなわれたのは明らかであり、埴輪樹立に伴う遺構は既に破壊されていたと判断された。各列における検出本数は第１表のとおりで、南東、北東側の残存状況が比較的良好であった。南西側の列を完全に欠くが、本来は１辺22m前後の方形に廻る埴輪列であったとみられ、その樹立本数は216本前後と想定される。

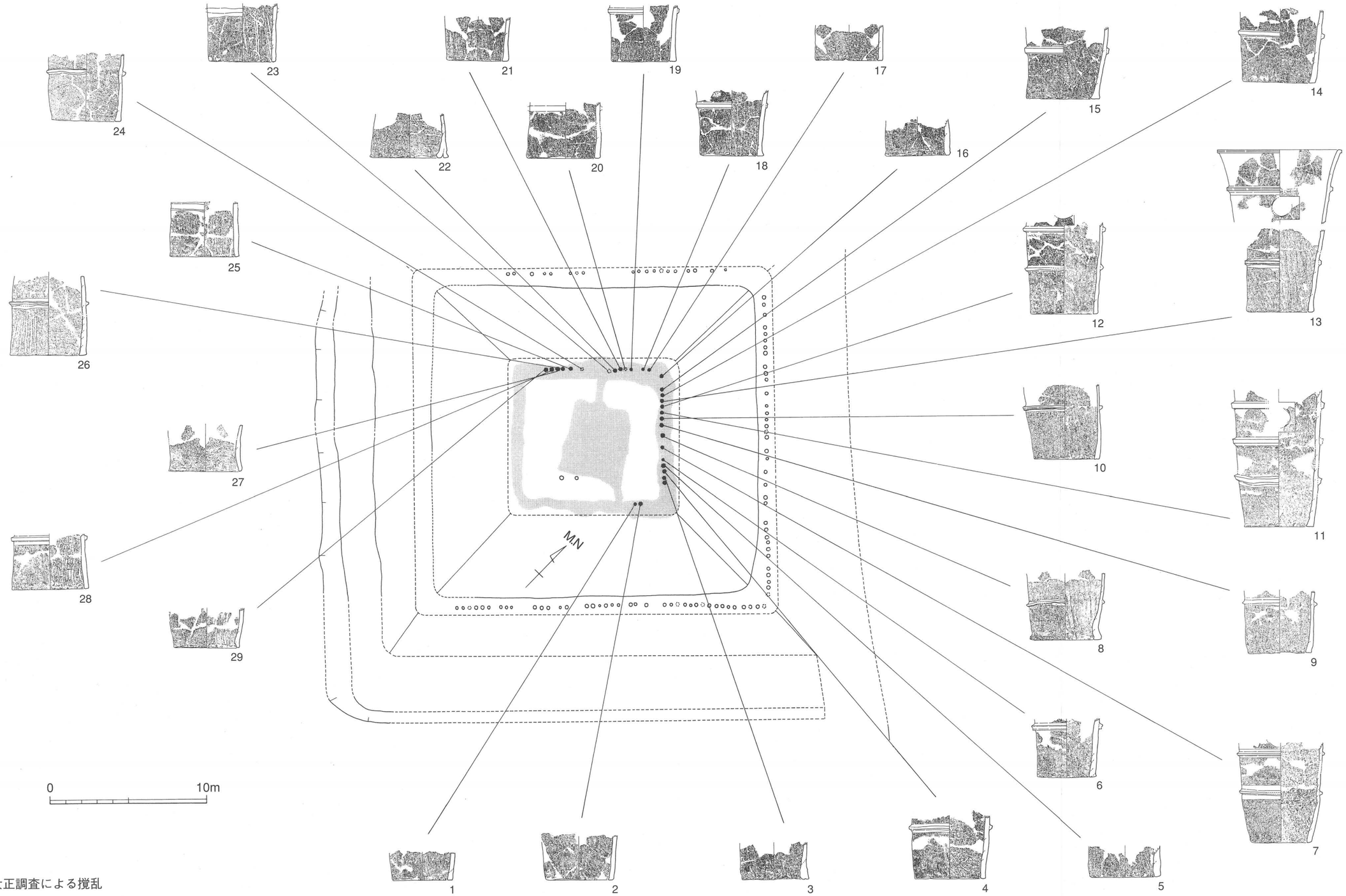
大正時代の調査報告の中で、各埴輪列の中央付近には大型の円筒埴輪が樹立されていたとの記述がみられるが、今回の調査では、特段そのような状況は確認できなかった。しかし、ほとんどの列で中央付近の埴輪が欠落していることや整理報告にみられる大型円筒埴輪の存在から、樹立位置に応じた埴輪の使い分けがなされていた可能性は否定できない(2)。

第５図は本書に掲載した円筒埴輪片の中で出土地点は明確だが樹立位置の認定が困難なものの出土位置図である。今回出土した埴輪（器財埴輪を含む）を整理する中で、かなり離れた地点から同一個体とみられる破片が出土したり、接合するといった不自然な状況がみられた。このような状況が生じた原因として、大正調査後の墳丘復旧時に、掘削土が正しく元位置に戻されなかったため、結果的に土砂に含まれた埴輪片が移動したことが考えられる。したがって、樹立状態で検出された基底部以外の破片は二次的な移動を考慮する必要があり、同一個体の認定や樹立原位置を検討する際に注意を要する。

円筒埴輪の特徴

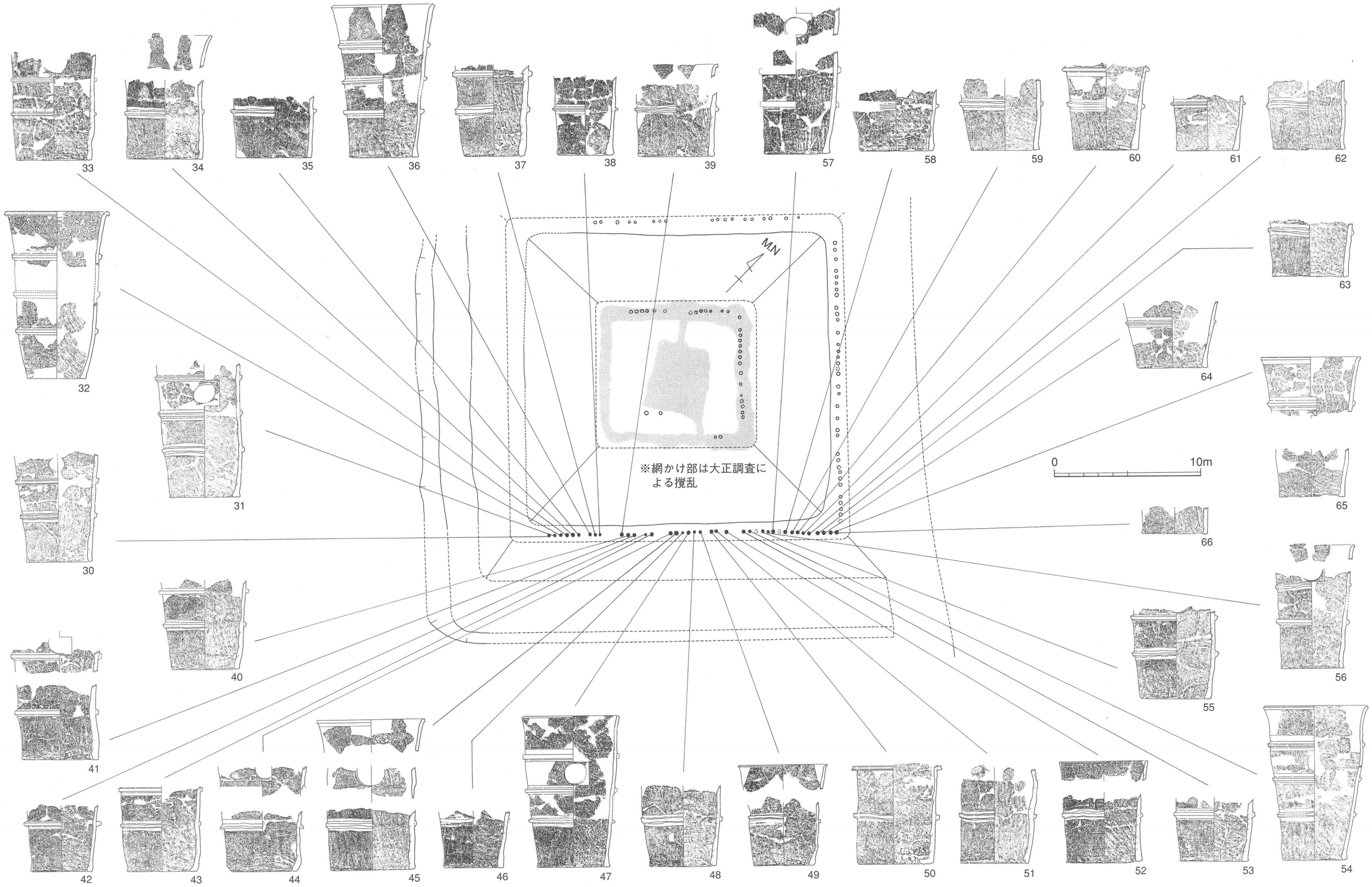
本古墳から出土した遺物は、大小のコンテナを併せて225箱を数え、その内、178箱（約80％）が円筒埴輪である。本古墳に樹立されていた円筒埴輪は300個体以上と考えられるが、本書に掲載したものは192点に過ぎない。なお、京都大学に所蔵されている大正時代の調査資料では円筒埴輪は非常に少なく、限定的な取り上げが行われたとみられる(3)。また、前述のように同一個体の認定が困難な状況であったため、同一個体を別個体と誤認して掲載している可能性がある。

１～119については、基底部がほぼ樹立された原位置に近い状態で確認されたもので、付近から出土した破片で同一個体と判断されるものは図化して復元を試みた。120～192は原位置の特定は難しいが、比較的残存状態が良好な破片もしくは特徴的な破片を掲載した。第７～20図に掲載した円筒埴輪は器形を実測し、拓本によって内外面の調整を表現してある。拓本は器壁の残存状況が良い部分を選んで採拓しているため、内外面で位置が異なる場合がある。今回出土した円筒埴輪では、確実に３条突帯４段を超える段構成を有する円筒埴輪を確認できなかったことから、以下、円筒埴輪について記述するにあたり、各部位を第６図のように呼称する。また、ここでは各部位の形状や法量等について、その特徴や傾向を述べるに留め、個体毎の詳細については、円筒埴輪観察表（第10～13表）を参照いただきたい。

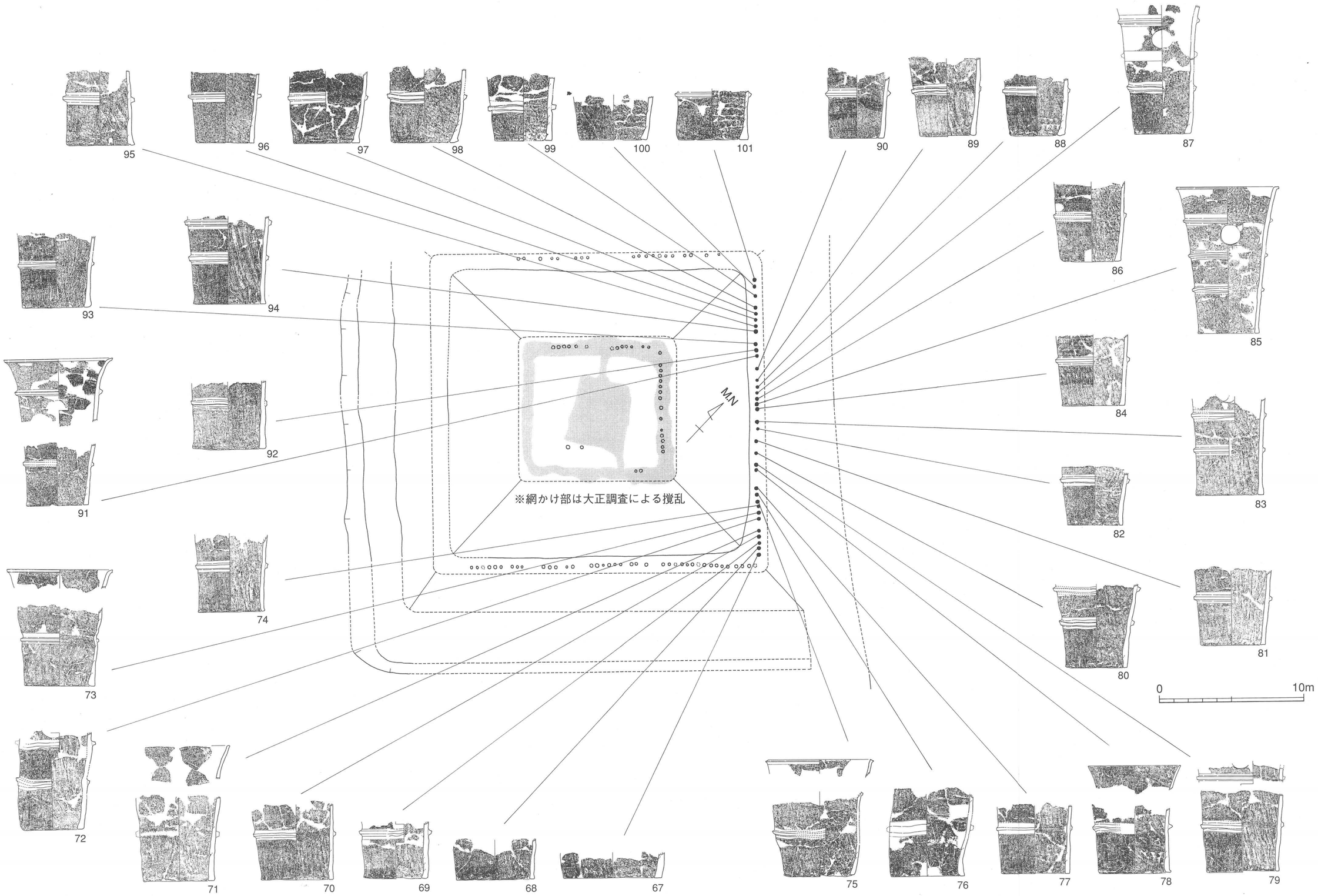


※網かけ部は大正調査による撹乱

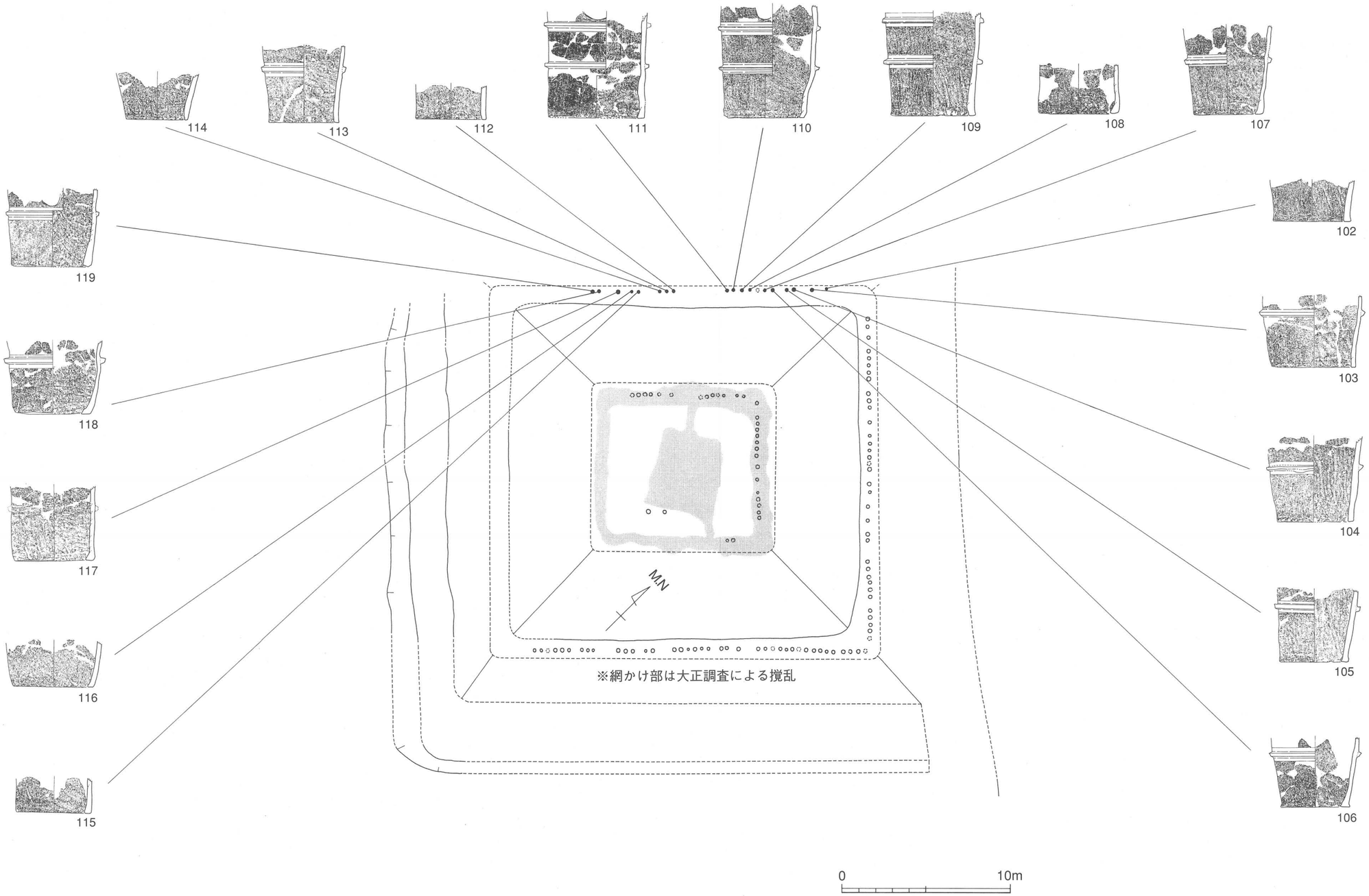
第１図　墳頂部円筒埴輪列基底部検出位置図（Ｓ＝１／250）



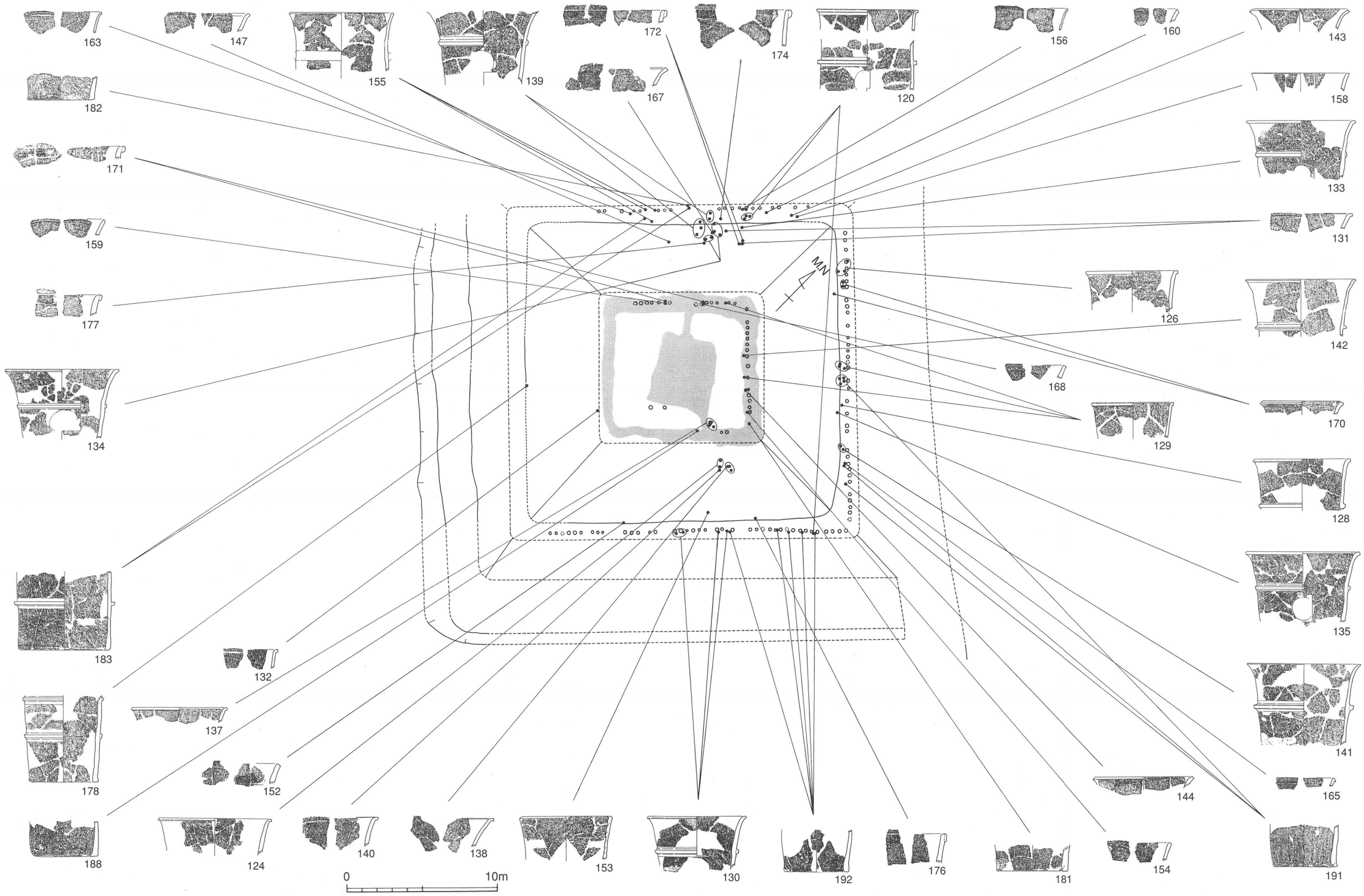
第２図　１段目テラス円筒埴輪列基底部検出位置図①（Ｓ＝１／250）



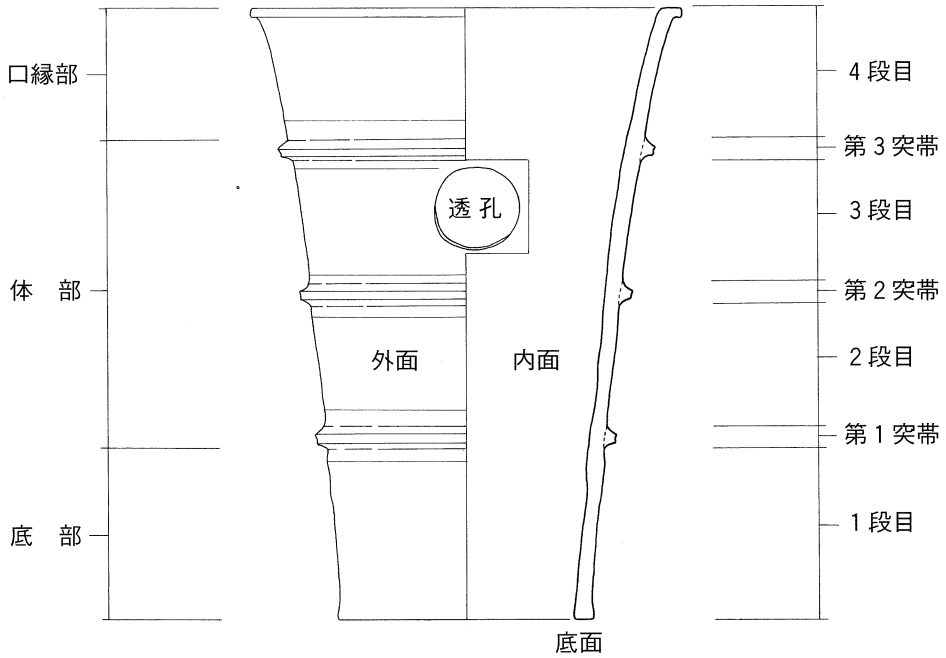
第３図　１段目テラス円筒埴輪列基底部検出位置図②（Ｓ＝１／250）

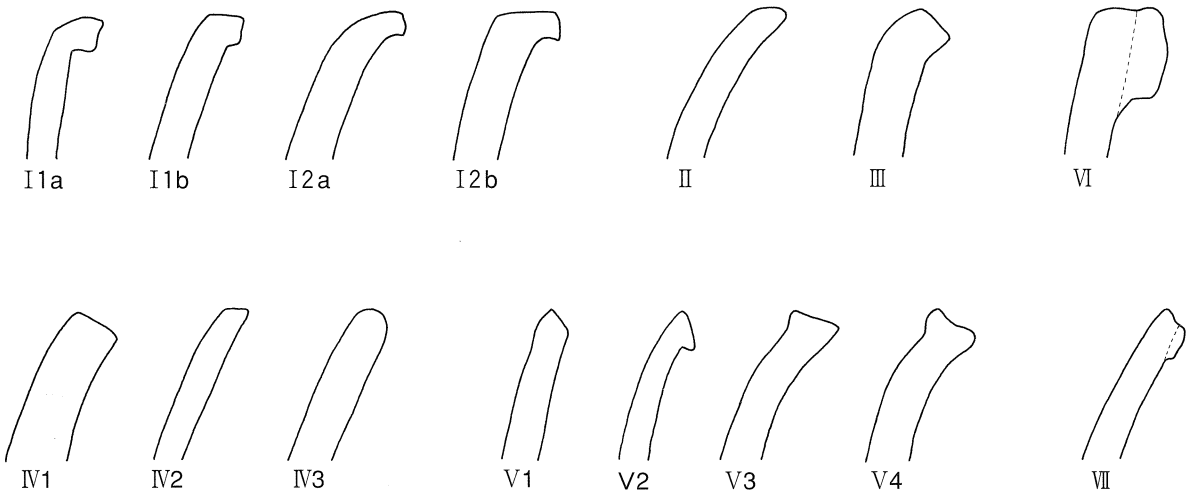


第４図　１段目テラス円筒埴輪列基底部検出位置図③（Ｓ＝１／250）

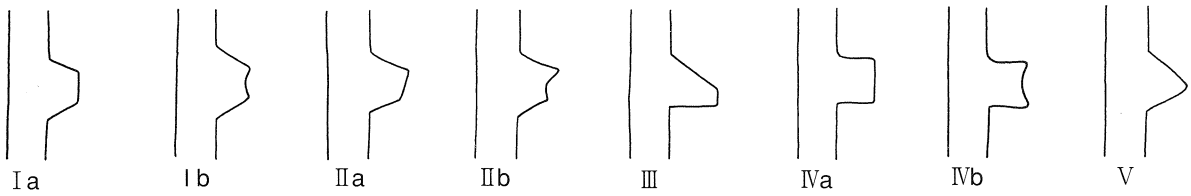


第５図　円筒埴輪出土位置図（Ｓ＝１／250）





口縁部分類



突帯分類

第6図　円筒埴輪各部名称と口縁部及び突帯分類

（全体形状）

円筒埴輪192点中、口縁部から基底部まで全体形状が判断できる資料は６点（13、36、47、54、85、91）と少ない。これら６点をみると、細部の形状は異なるが、３条突帯４段構成で３段目の対向する位置に円形の透かしを有する基本的な形状は共通している。本古墳に採用されていた円筒埴輪は３条突帯４段構成のものが大半を占めると考えられるが、整理報告[(4)]に５条突帯６段以上の構成をもつ個体がみられることや第16図119のように２段目に透かしを有する個体も存在することから、異なる段構成をもつ埴輪が一部含まれていたとみられる。

全体形状がある程度判断できる３条４段構成の埴輪には、基底部から口縁部まで外傾しながら直線的に開くもの（13、36、85）や、基底部からやや外傾気味に立ち上がり、３段目上半から４段目下半にかけてわずかに内湾し、口縁部が外反するもの（47、54）がある。また、33や111、120の状況から、基底部から口縁部まで殆ど開かず、直線的な形状のものも存在すると考えられる。

（口縁部）

口径の復元可能な個体は35個あり、最小25.8㎝（192）～最大37.2㎝（125）を計る。ただし、ほとんどの円筒埴輪は楕円形状を呈しており、短径と長径が存在する。したがって、短径部分もしくは長径部分の破片による復元では異なる数値が得られるため、口径を復元した35個体の中にはある程度の誤差が内在する可能性が高い。第４表は口径に対する個体数の表で、28～32㎝前後、34～36㎝前後に集中がみられる。

口縁部の細部には多様な相異がみられるが、ここでは大まかな形状から以下のように分類する（第６図参照）。

口縁部Ⅰ類　口縁部が屈曲し、逆Ｌ字状を呈するもの
　　1　外反の度合いが弱いもの
　　2　外傾し、外反の度合いが強いもの
口縁部Ⅱ類　口縁部が大きく外反するもの
口縁部Ⅲ類　口縁部が短く外折するもの
口縁部Ⅳ類　口縁部がやや外反気味に立ち上がるもの
　　1　口唇部が平坦でやや傾くもの
　　2　口唇部が平坦で水平なもの
　　3　口唇部が丸いもの
口縁部Ⅴ類　口唇部が肥厚し、面を成すもの
　　1　上端を上方へ突出させるもの
　　2　下端を外下方へ突出させるもの
　　3　下端を外方（水平方向）へ突出させるもの
　　4　上端を上方、下端を外方（水平方向）へ突出させるもの
口縁部Ⅵ類　口縁部外面に突帯を付加するもの
口縁部Ⅶ類　口縁部外面に細い突帯を付加し、口唇部上端を上方に突出させるもの

Ⅰ類に関しては、更に、内面の屈曲部に稜を持たないもの（a）と稜を持つもの（b）に細分できる。また、端面が平坦なもの（124、125、126、128、130、133、135、136、137、140）とM字状に窪むもの（120、121、122、123、127、129、131、132、134、138）がみられる。

口縁部は75点を観察表に記載しているが、未掲載の破片が多数存在する。未掲載分も含めて全体的にみると、Ⅰ類が約５割を占め、Ⅱ～Ⅵ類がそれぞれ一定量含まれるといった状況である。Ⅶ類は全体で１点しかなく、特殊な存在である。また、Ⅵ類は他類と比較して器壁が厚く、口径が大きいことが予想される。残存する破片から数個体存在することは明らかで、胎土、色調、調整等が整理報告にみられる大型円筒埴輪に近似している。このことから、Ⅵ類は大型円筒埴輪の口縁部である可能性が高い。

（突　帯）

全体形状の項で触れたように、突帯は３条のものが主体的で、一部５条以上の個体が存在する。大半の突帯はヨコナデによって円筒本体に貼付られているが、接合部に段を残すものもみられる。また、突帯が円筒本体から遊離し、接合面が観察できる資料が多数あり、その多くには突帯位置設定の際に施されたと考えられる浅い凹線がみられる。

本書に掲載した192点の円筒埴の内、突帯形状を確認できたものは118点（同一個体と考えられる破片にみられる突帯から判断したもの12点を含む）ある。これらは、突帯の断面形状から以下のⅠ～Ⅴ類に分類される（第６図参照）。

突帯Ⅰ類　断面が台形状で端面の上稜と下稜が平均的なもの
突帯Ⅱ類　断面が台形状で端面の上稜が下稜よりも突出するもの
突帯Ⅲ類　断面が台形状で下面が水平に近いもの
突帯Ⅳ類　断面が方形状のもの
突帯Ⅴ類　断面が三角形状のもの

各分類における個体数では、Ⅰ類が50点、Ⅱ類が54点、Ⅲ類が６点、Ⅳ類が９点、Ⅴ類が１点とⅠ・Ⅱ類で全体の９割近くを占める。観察表では、Ⅰ～Ⅳ類について突帯の端面が直線的なもの（a）とM字状に窪むもの（b）に細別している。しかし、ひとつの突帯の中で両者が部分的に混在する状況が複数の個体で確認されることや、この相異が突帯端面に対するナデ調整の強弱によって生じる可能性があることから、両者が制作段階から最終的な整形目標として設定されていたことにはやや疑問が残る。Ⅰ・Ⅱ類におけるａとｂの割合をみると、ともに３：２の割合でａがｂを上回っている。Ⅳ類は絶対数が少ないものの、ａとｂがほぼ同数である。このほか、47ではⅡaとⅣb、72ではⅡbとⅣbという異なる断面形状の突帯を有する個体もみられた。

掲載した円筒埴輪の中で突帯間隔が計測できた資料は28点（７、11、12、30、31、33、36、37、40、43、47、50、54、55、56、57、60、72、75、80、83、87、94、109、110、111、178）あり、50のみ16cmと間隔が例外的に広い。50を除く27点の突帯間隔は10.8～12.7cmに収まり、その平均は約11.5cmである（第５表参照）。

（底　部）

底部の形状は多様だが、器壁の厚さが胴部とさほど変わらないものと底面に向かって肥厚するものに大別される。前者には底面がやや丸みを帯びるものが多く、後者には平坦なものが多い。なお、後者には底面が内側に張り出す形状のものが多くみられるが、これは、基底部整形時に粘土帯を樹立する際、接地面の安定性を向上させる目的で内面の端部を強く押さえた結果と考えられ、内面に明瞭な指頭痕がみられる。また、自重によって底部が大きく湾曲した状態のもの（8、44、50、110、186）が数点みられた。

掲載した192点の円筒埴輪の中で底面を観察できた個体は106個体あり、粘土帯の接合痕跡や圧痕がみられるものがあった。粘土帯の接合痕跡が確認できたものは46点あり、内38点に2カ所、7点に3カ所の接合痕跡がみられた。底面に圧痕がみられたものが93点あり、69点に藁状の圧痕（A）、49点に棒状の圧痕（B）、3点に布目圧痕（C）、2点に板状の圧痕（D）がみられた。なお、これらの内30点は2種類以上の異なる圧痕が混在している。また、底面に朱が付着しているものが11点あった。

復元を含めて底径の計測が可能なものは90個体あり、20.6～32.8cmの数値が得られた。口縁部と同様にほとんどの底部は楕円形状を呈し、短径と長径が存在する。しかし、底部は完存する個体が多く、短径と長径の平均値を底径としているため、口径ほど誤差が表出していないと考えられる。第6表は底部径に対する個体数を示している。90点中86点は20.6～25.7cmに集中し、その平均は約22.5cmである。残る4点は27.2～32.8cmを計るもので、整理報告にある5条突帯6段構成以上となるやや大型の円筒埴輪の底部径に近い。

基底部から1段目突帯までの高さ（底部高）を計測できたものが103点あり、11.1～17.0cmの数値が得られた。高さが11cm程度と極端に低い2点（8、99）と16cm以上とやや高い4点（7、16、57、61）を除く97点は14.0～15.8cmに収まり、その平均は約15.0cmである（第7表参照）。

（透　孔）

透孔が完全に遺存する個体はないが、部分的な残存状況から、同一段の対向する位置に2箇所穿孔されていたと考えられる。透孔の位置が確認できた個体の中では119のみ2段目に穿孔され、その他は3段目に穿孔されていた。透孔の形状は直径5～7cmでほぼ正円形を指向しているが、31や134のようにややいびつな楕円形状を呈するものもある。

透孔は頂部付近から刀子等の鋭い工具によって時計回りに切り込まれたと考えられるものが多いが、半時計回りのものも確認できる。透孔の端面にはナデ調整が施されたものが多く、内外面にわずかな粘土のたるみを残すものもみられる。

（器面調整）

器面調整はすべてナデもしくはハケメ調整である。観察表においては見かけ上の方向を加えて、以下のような記号で表現してあるが、本文中では括弧内の略号を用いる。

第２表　器面調整の分類

	縦方向（a）	横方向（b）	斜方向（c）	不定方向（d）
ハケメ（Ⅰ）	Ⅰa（タテハケ）	Ⅰb（ヨコハケ）	Ⅰc（ナナメハケ）	Ⅰd（不定ハケ）
ナ　デ（Ⅱ）	Ⅱa（タテナデ）	Ⅱb（ヨコナデ）	Ⅱc（ナナメナデ）	Ⅱd（不定ナデ）

なお、この器面調整については、突帯や口縁部の調整に伴うヨコナデは含めず、複数の調整が施されている場合は、すべて併記している。各埴輪はそれぞれ残存状況が異なり、同一の埴輪でも部分毎に調整が異なる場合があることから、観察表では各段の内外面に分けて記載してある。

第３表は各段の内外面に施された器面調整とその個体数をまとめたものである。１段目外面では、タテハケが60点（45％）、タテナデが26点（20％）、ヨコハケとタテナデの組み合わせが15点（11％）みられる。また、ヨコハケとタテナデの組み合わせがみられたものは、１次調整のタテナデの後、上半のみにヨコハケを施したものである。２段目外面でもタテハケ（41点：48％）、タテナデ（17点：20％）の割合が高いが、ヨコハケ（15点：17％）の増加が目に付く。３段目外面ではタテハケ（15点：32％）、ヨコハケ（14点：30％）が突出し、ヨコハケの割合が増加する。４段目外面ではヨコナデ（16点：20％）、ヨコハケ（15点：19％）、タテハケ（10点：12％）、タテハケとヨコナデの組み合わせ（10点：12％）が比較的多く、ヨコナデの割合が増加している。外面調整を全体的にみると、ハケメ調整がナデよりもやや優勢にあるといえる。また、１・４段目は１次調整とヨコハケまたはヨコナデといった２次調整が併存する場合が多くみられるが、２・３段目は１次調整のみもしくは２次調整によって１次調整の痕跡を完全に消しているものが多く、一見すると単一の調整しか見られないようなものが多い。

内面調整では、圧倒的にナデ調整が多く、ハケメ調整が施されたものはごくわずかである。１・２段目ではタテナデ、ナナメナデで60％前後を占めるが、３・４段目になるとヨコナデ、ヨコハケの割合が増加する傾向にある。

（線　刻）

線刻が施されたものが少数ながら確認され、今回掲載している中では22点（32、47、73、78、91、120、122、127、129、131、132、134、135、138、139、140、141、143、144、152、153、161）を数える。線刻が施されている位置は全て外面で、47が３段目、141が３・４段目、その他は４段目である。22（４段目）と141（３段目）には形状が異なる３つの線刻がそれぞれみられる。いずれも破片であるため、線刻の全形を確認できる例は少ないが、横方向に長い弧線が施されたもの（73、120、127、129、132）と縦横の直線が施されたもの（91、131、134、135、138、139、140、144）が目立つ。前者は127や152の状況から楕円形状の線刻と予想される。後者は135の同一個体に上の一辺を欠く縦長長方形の線刻が完全なかたちで確認されていることから、同様の線刻とみられる。141の３段目には透孔のほぼ中間の位置に円形の線刻がみられ、透孔を意識した線刻と捉えられる。また、楕円形や長方形の線刻ついても、その形状から透孔との関連が想起される。

（胎土・焼成・色調）

胎土には砂粒が多くみられ、個体によって含有量にばらつきがある。大半は同時期の土師器よりもやや多くの砂粒を含む状態で、器財埴輪と比較しても多い傾向にある。砂粒には１㎜以下～11㎜大の様々なものがあり、石材の特定は困難であった。そこで、観察表には第８表のように分類した砂粒の色調を記号化して記入している。この色調でみると、灰白色（141点：73％）、褐灰色（94点：49％）、赤褐色（82点：43％）、褐色（82点：43％）、の砂粒を含むものが比較的多いといえる。

焼成は総じて良好で、大半の個体には黒斑が認められた。

色調には第９表のような多様なものがみられ、部分的に異なる色調を呈する個体もある。観察表には黒斑を除いて１個体にみられる全ての色調を記号で表記している。色調の分類にあたっては、土色帳に準拠したため細分しすぎた感があるが、内外面ともに浅黄橙色～にぶい橙色（ｄ、ｆ、ｈ）を呈するものが全体の８割以上を占める。

第３表　器面調整と固体数

調　　整	外　　面				内　　面			
	１段目	２段目	３段目	４段目	１段目	２段目	３段目	４段目
Ⅰa	60	41	15	10	1	0	1	0
Ⅰa･b	4	0	2	2	0	0	0	0
Ⅰa･c	0	1	1	0	0	0	0	0
Ⅰa･Ⅱa	2	0	0	0	0	0	0	0
Ⅰa･Ⅱb	5	0	0	10	0	0	0	0
Ⅰa･Ⅱc	1	0	0	0	0	0	0	0
Ⅰb	5	15	14	15	0	0	3	8
Ⅰb･c	0	0	0	0	1	0	1	0
Ⅰb･d	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅰb･Ⅱa	15	0	0	0	0	0	3	2
Ⅰb･Ⅱa･b	1	0	0	0	0	0	0	0
Ⅰb･Ⅱb	0	0	0	1	0	0	0	4
Ⅰb･Ⅱc	0	0	0	0	1	0	0	2
Ⅰb･Ⅱd	0	0	0	0	1	0	0	0
Ⅰc	1	0	1	5	9	8	3	5
Ⅰc･Ⅱa	0	1	0	0	1	3	0	0
Ⅰc･Ⅱb	1	0	0	2	0	0	0	3
Ⅰc･Ⅱc	0	0	0	0	7	3	0	1
Ⅰc･Ⅱd	0	0	0	0	1	1	0	0
Ⅰd	0	0	0	0	1	0	0	0
Ⅱa	26	17	0	0	46	35	10	3
Ⅱa･b	4	3	2	0	1	0	0	3
Ⅱa･c	0	0	0	0	0	3	0	0
Ⅱa･d	0	0	0	0	0	0	0	0
Ⅱb	3	5	2	16	9	11	6	21
Ⅱb･c	0	0	0	1	7	0	1	0
Ⅱc	1	1	0	0	33	27	8	0
Ⅱd	0	0	0	0	7	1	2	1
不　明	5	1	10	19	8	5	8	28
合　　計	134	85	47	81	134	97	46	81

第４表　口径と固体数

口径（cm）	個数
25.0～25.9	1
26.0～26.9	0
27.0～27.9	1
28.0～28.9	2
29.0～29.9	3
30.0～30.9	7
31.0～31.9	4
32.0～32.9	3
33.0～33.9	1
34.0～34.9	4
35.0～35.9	4
36.0～36.9	4
37.0以上	1
合　計	35

第５表　突帯間の高さと固体数

高さ（cm）	個数
10～	3
11～	20
12～	4
13～	0
14～	0
15～	0
16～	1
合　計	28

第６表　底部径と固体数

底部径（cm）	個数
20.0～20.9	9
21.0～21.9	25
22.0～22.9	28
23.0～23.9	14
24.0～25.0	6
25.0～25.9	4
26.0～26.9	0
27.0～27.9	1
28.0～28.9	1
29.0～29.9	0
30.0～30.9	0
31.0～31.9	1
32.0以上	1
合　計	90

第７表　底部高と固体数

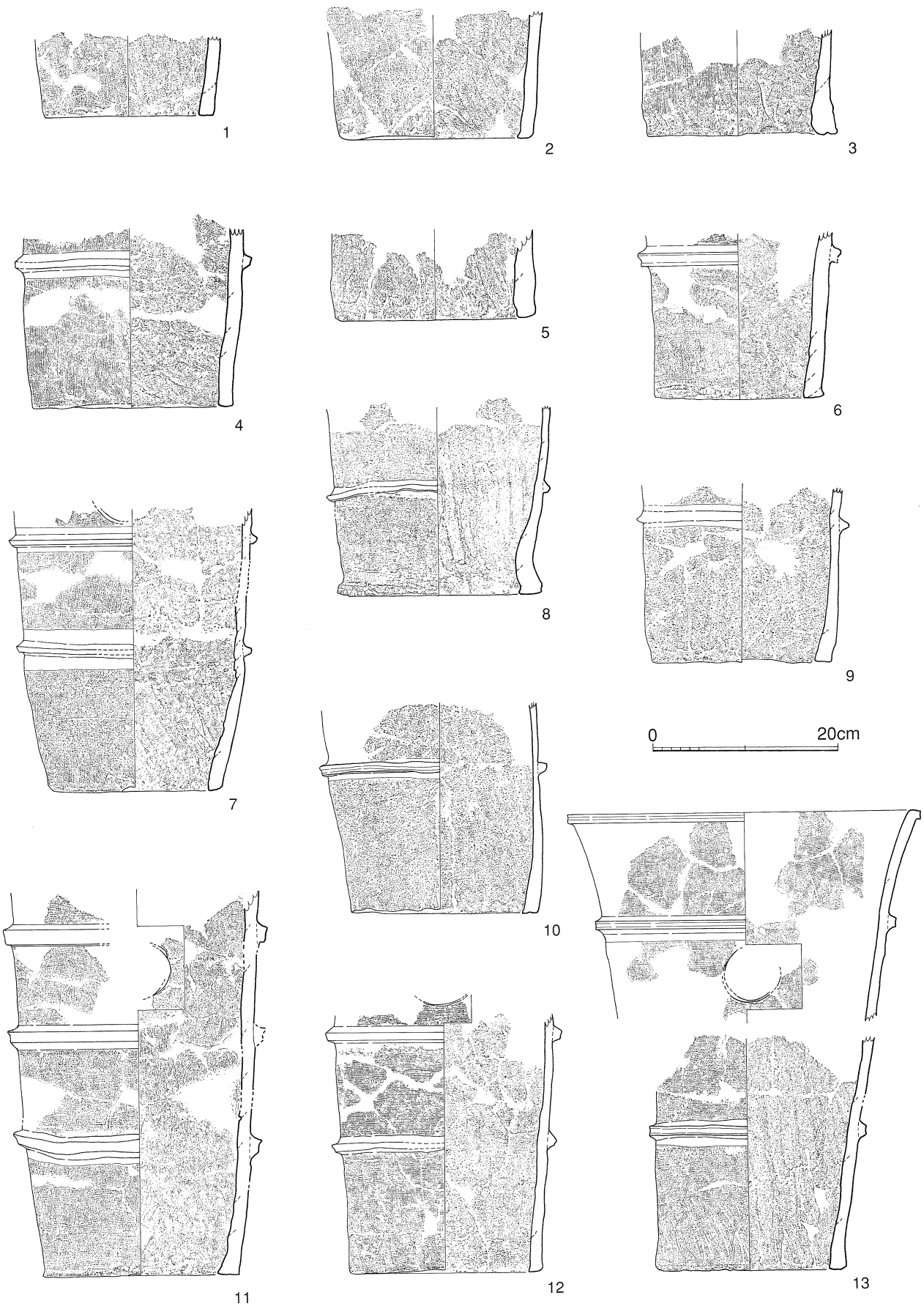
高さ（cm）	個数
11～	2
12～	0
13～	0
14～	35
15～	62
16～	3
17～	1
合　計	103

第８表　胎土混入物色調分類と個体数

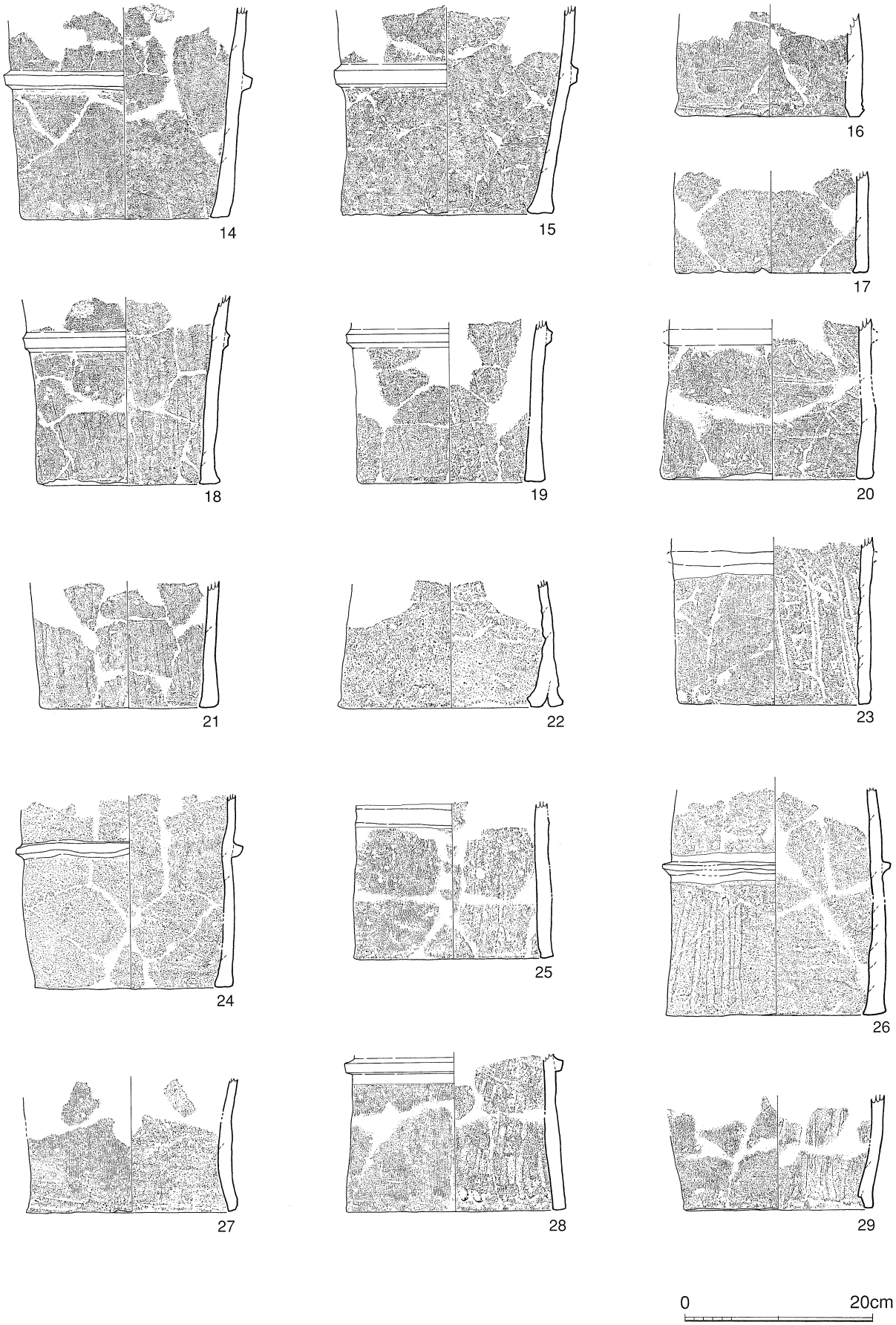
色　調　名	記号	個体数
黒　色	A	48
暗灰色	B	2
赤　色	C	2
褐灰色	D	94
暗褐色	E	33
赤褐色	F	82
褐　色	G	82
明褐色	H	1
黄褐色	I	1
黄橙色	J	1
橙　色	K	10
淡黄色	L	2
灰褐色	M	58
黄灰色	N	1
灰　色	O	31
灰白色	P	141
白　色	Q	12
透明光沢	R1	15
半透明光沢	R2	12
黒色光沢	R3	3
白色光沢	R4	1
金色光沢	R5	5
灰白色光沢	R6	1

第９表　器面色調分類と個体数

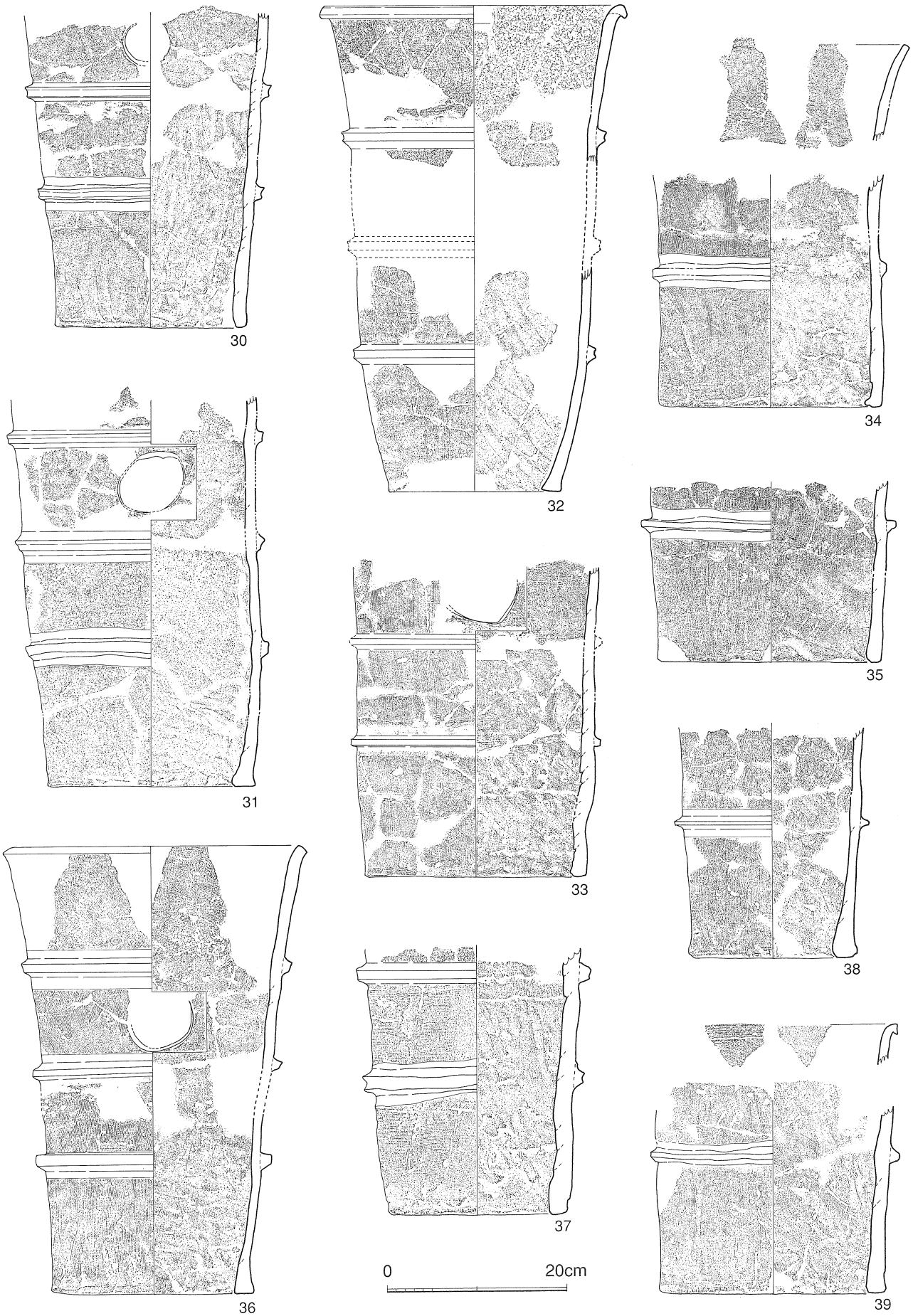
色調名	記号	個　体　数	
		外面	内面
浅黄色	a	2	1
淡黄色	b	1	0
にぶい黄色	c	0	0
浅黄橙色	d	18	14
黄橙色	e	1	1
にぶい黄橙色	f	130	99
浅橙色	g	0	0
にぶい橙色	h	39	49
橙　色	i	13	12
黄灰色	j	4	6
明灰黄色	k	0	0
灰黄色	l	2	0
暗灰黄色	m	2	0
明黄褐色	n	1	0
にぶい黄褐色	o	0	1
灰黄褐色	p	12	16
褐灰色	q	10	13
灰褐色	r	1	0
にぶい褐色	s	3	1
暗灰色	t	1	0
黒褐色	u	16	3



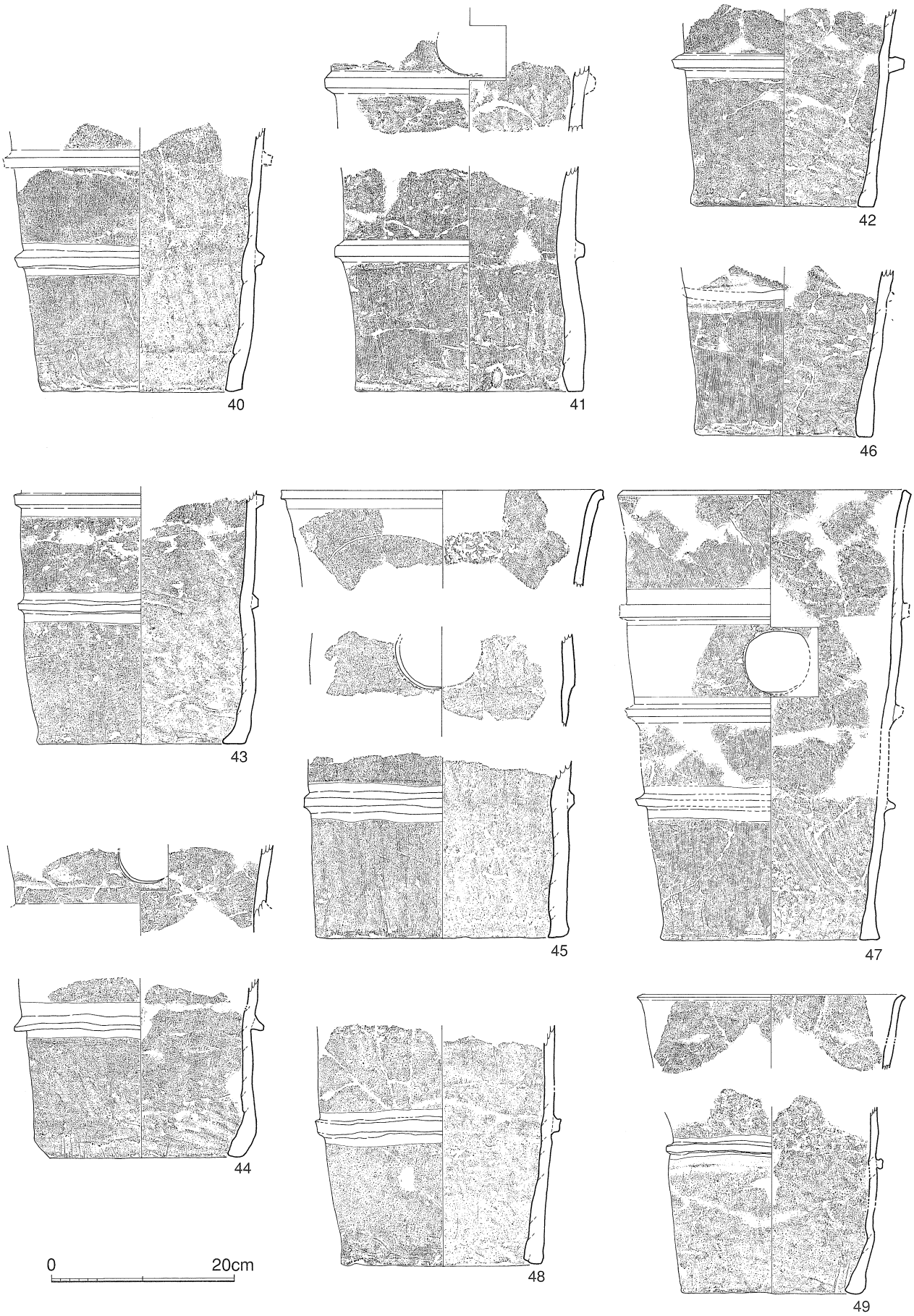
第７図　円筒埴輪実測図①（Ｓ＝１／６）



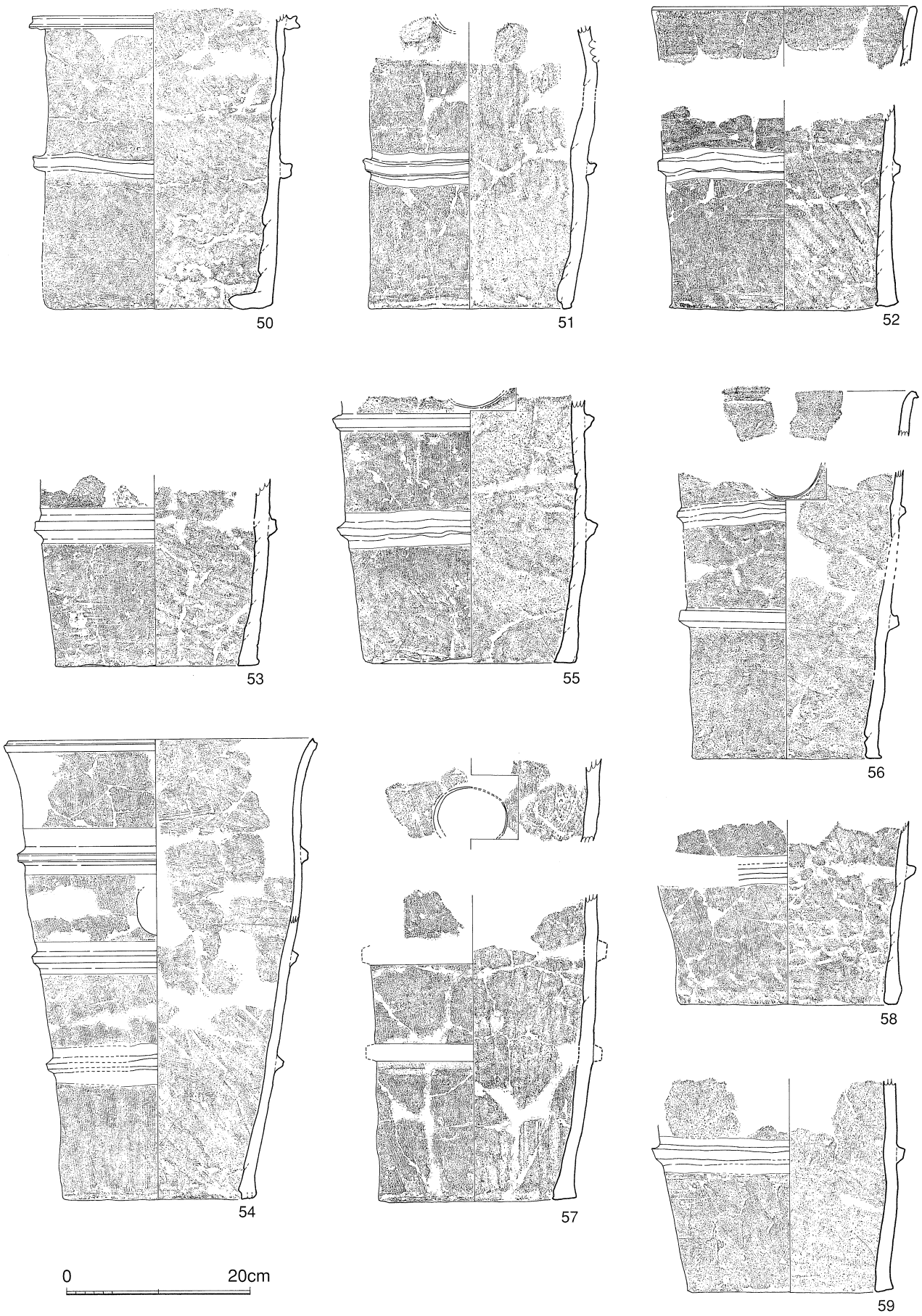
第８図　円筒埴輪実測図②（Ｓ＝１／６）



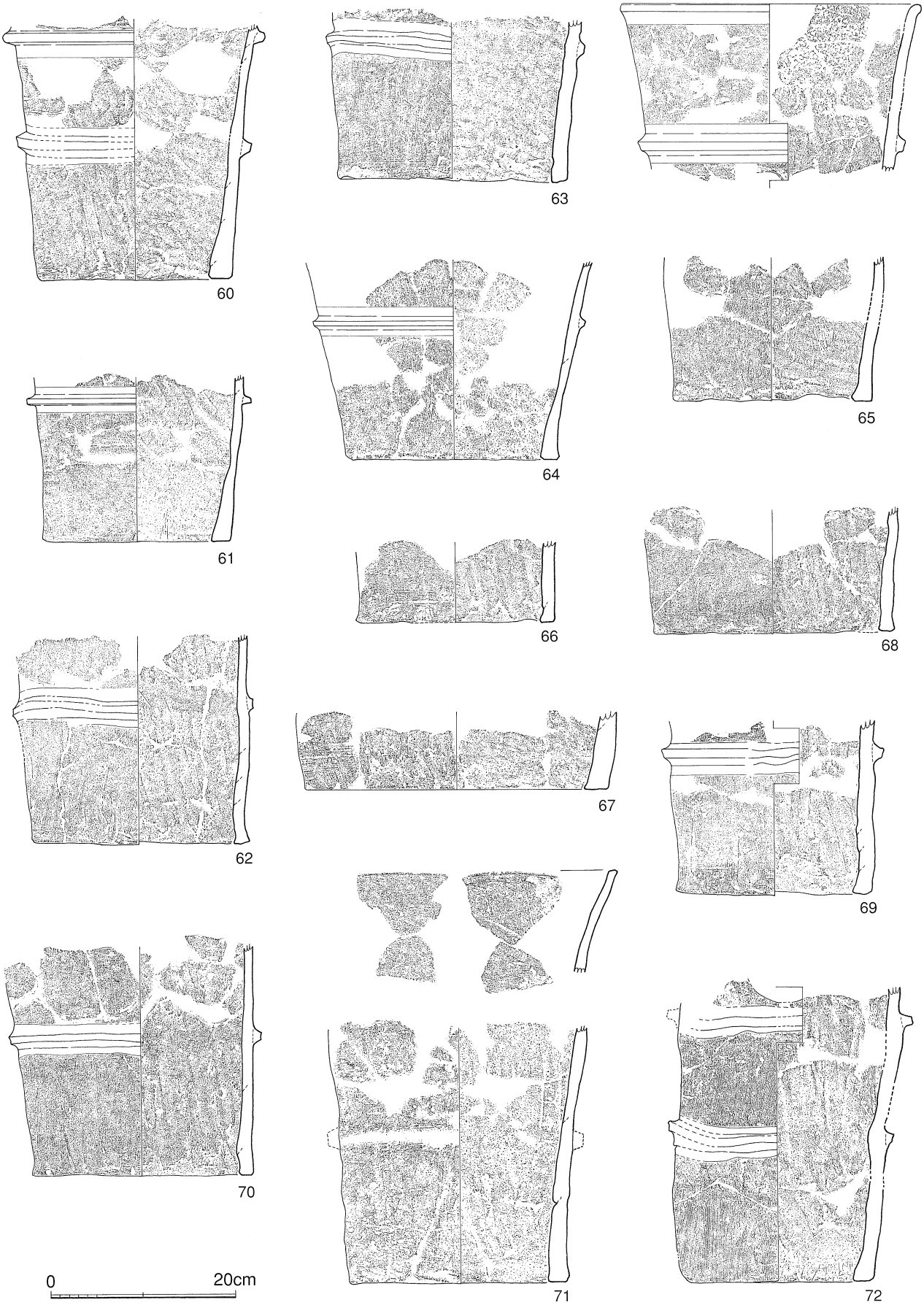
第９図　円筒埴輪実測図③（Ｓ＝１／６）



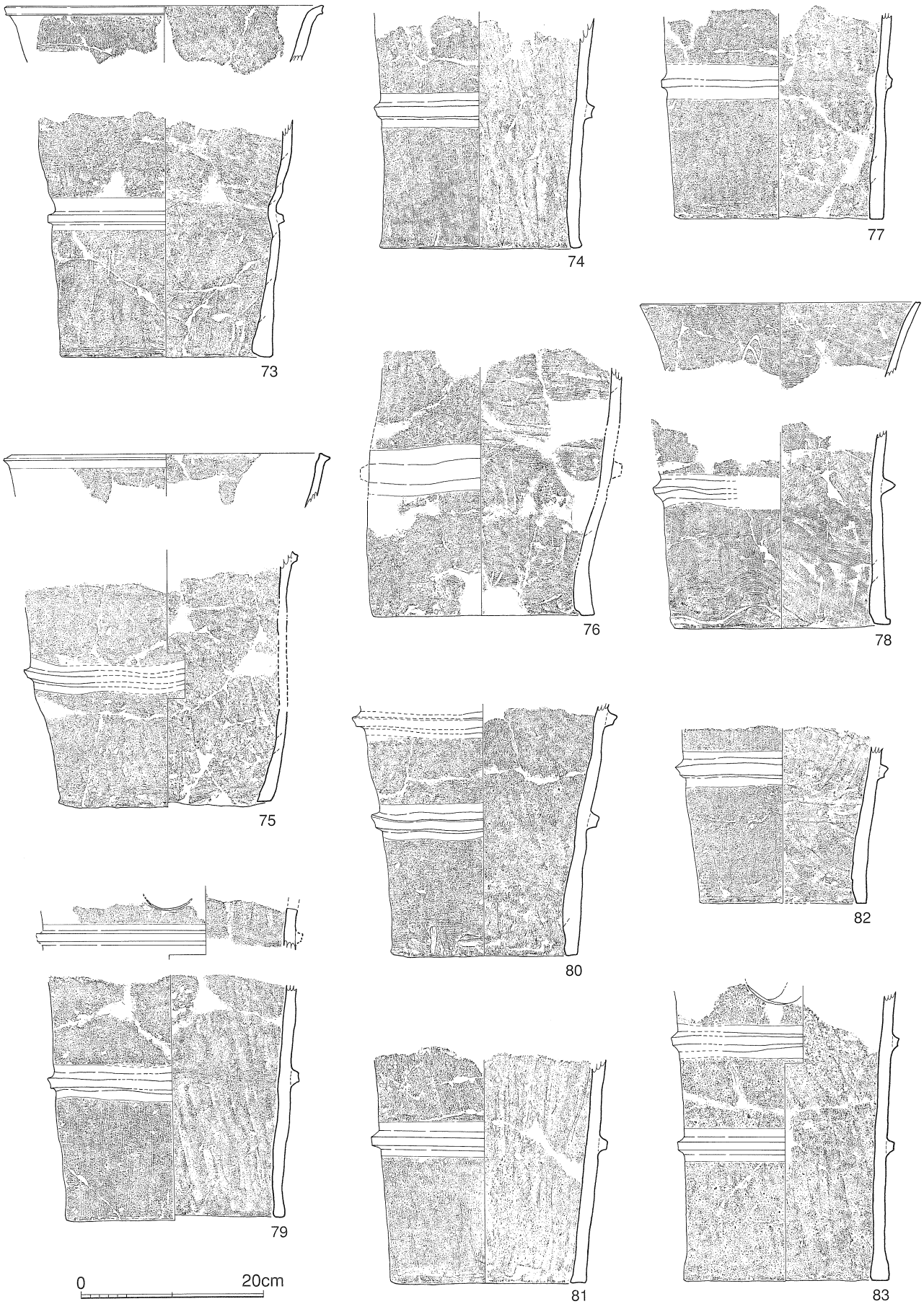
第10図　円筒埴輪実測図④（S＝1／6）



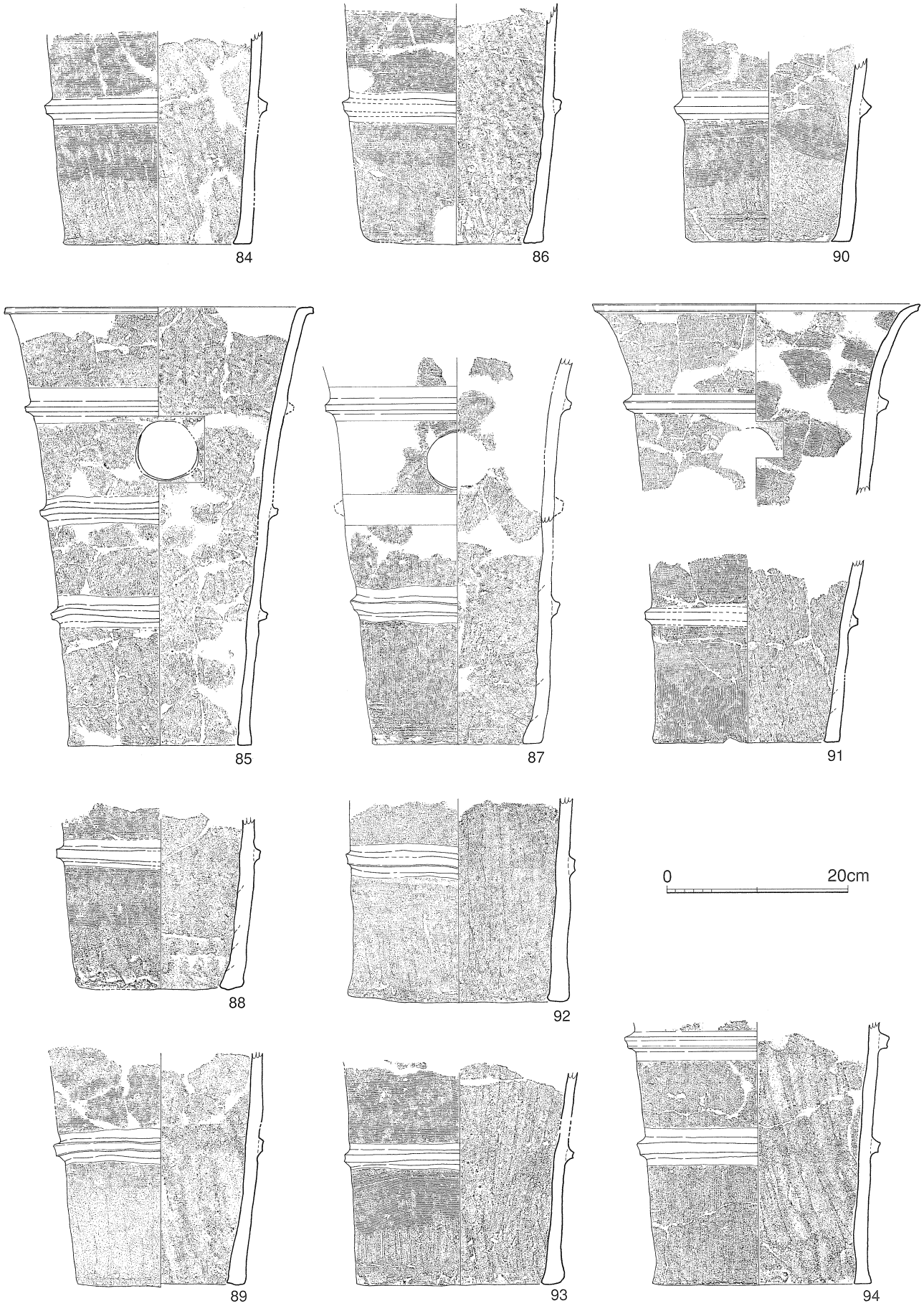
第11図　円筒埴輪実測図⑤（S＝1／6）



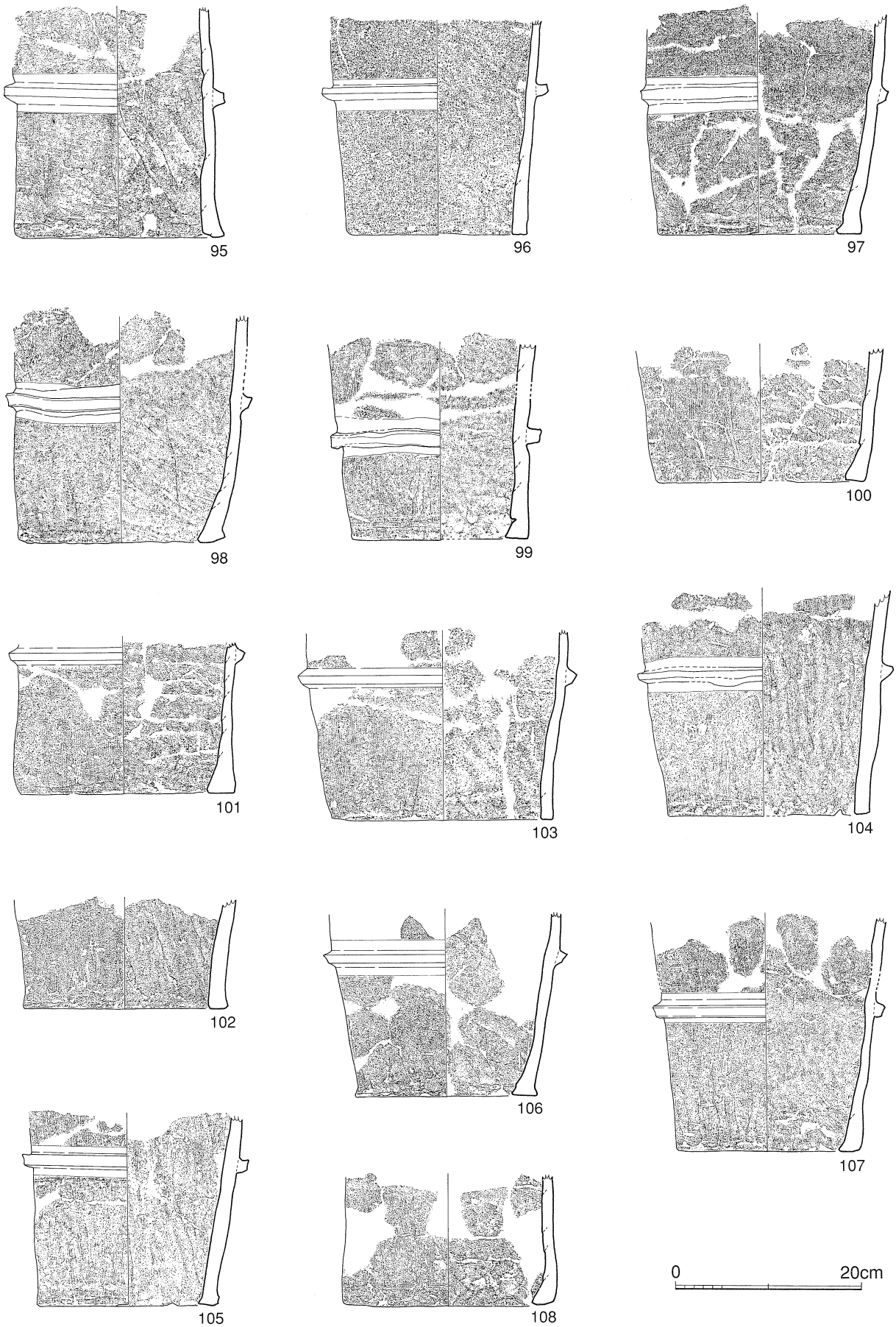
第12図　円筒埴輪実測図⑥（S＝1／6）



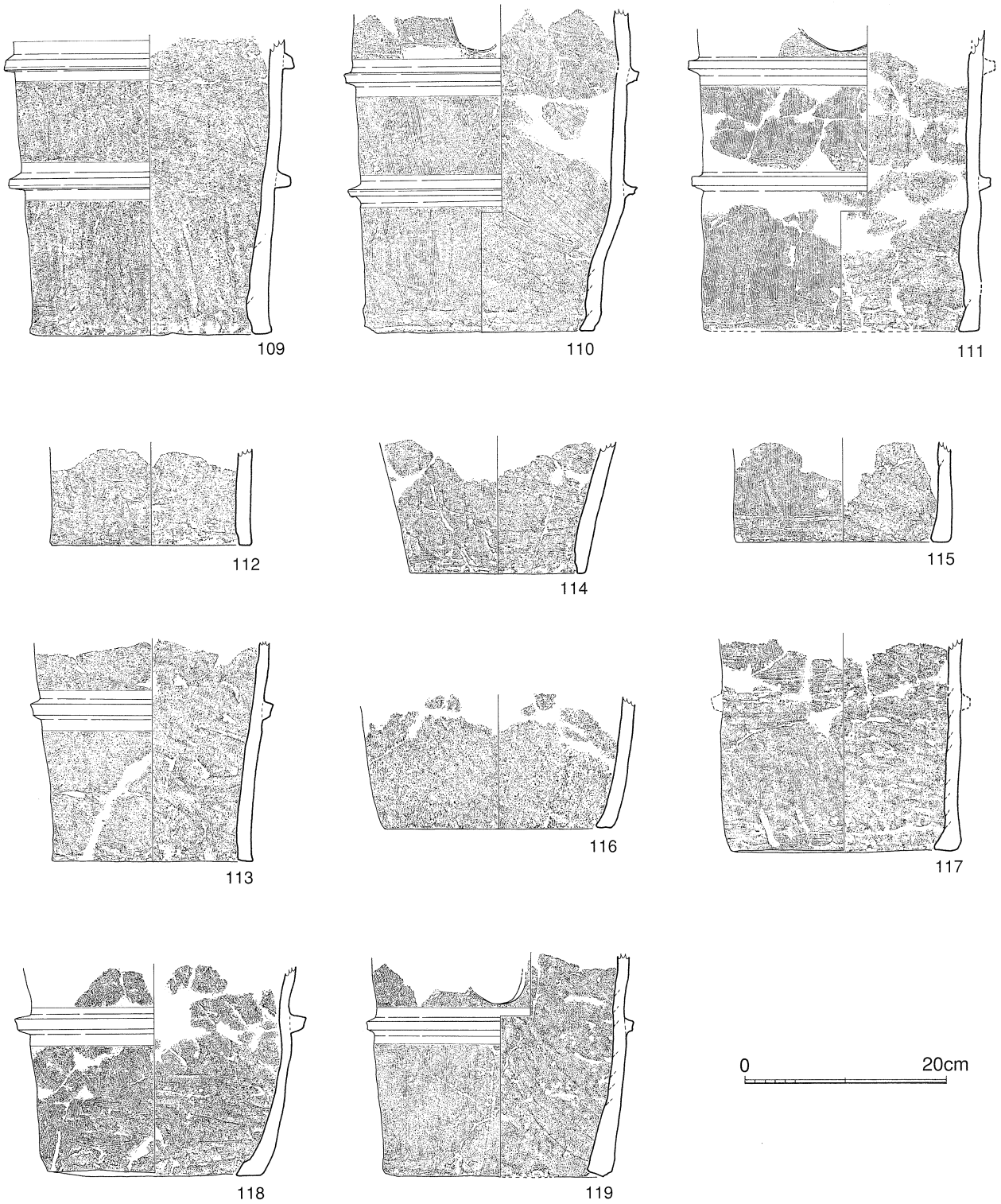
第13図　円筒埴輪実測図⑦（S＝1／6）



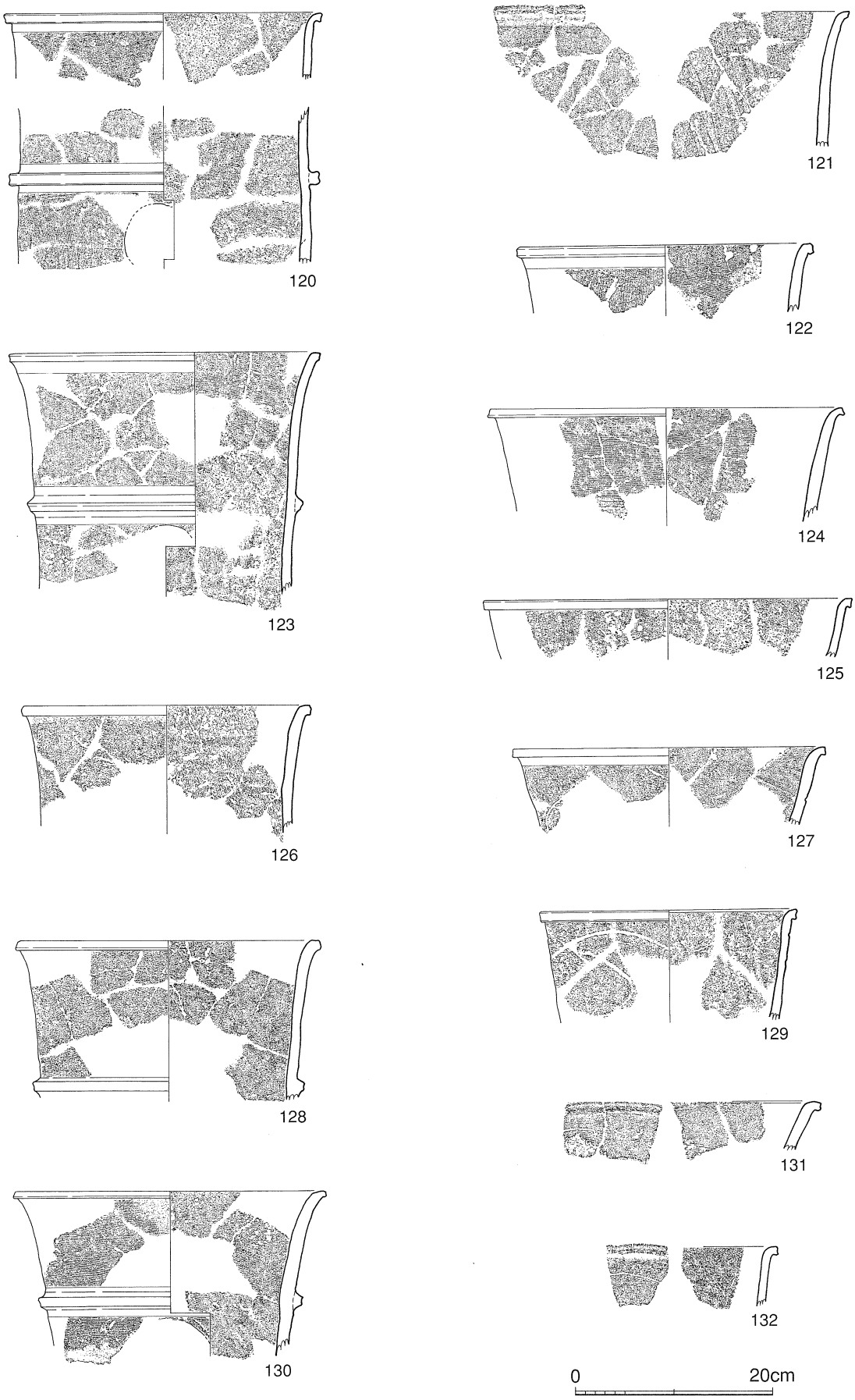
第14図　円筒埴輪実測図⑧（S＝1／6）



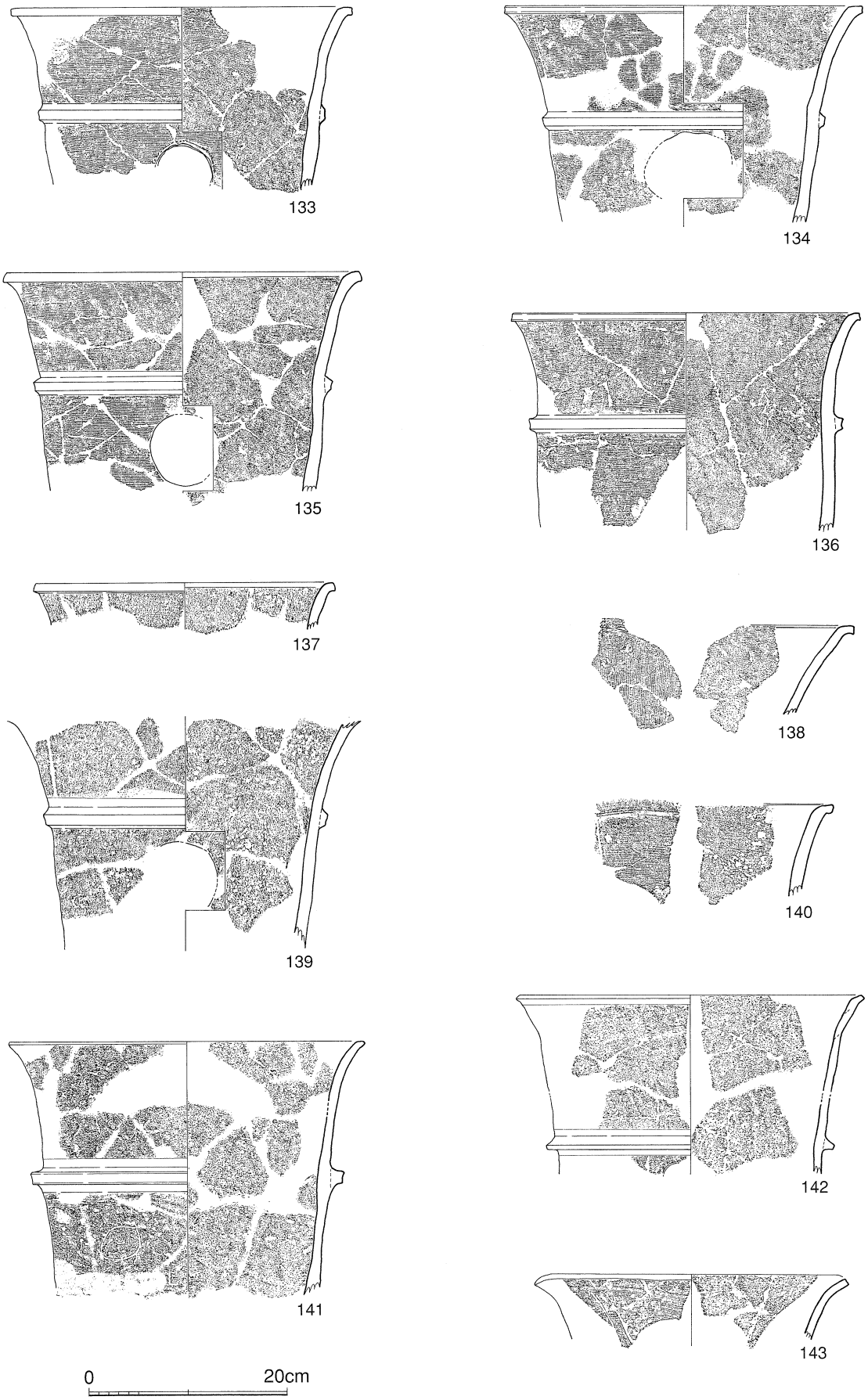
第15図　円筒埴輪実測図⑨（S＝1／6）



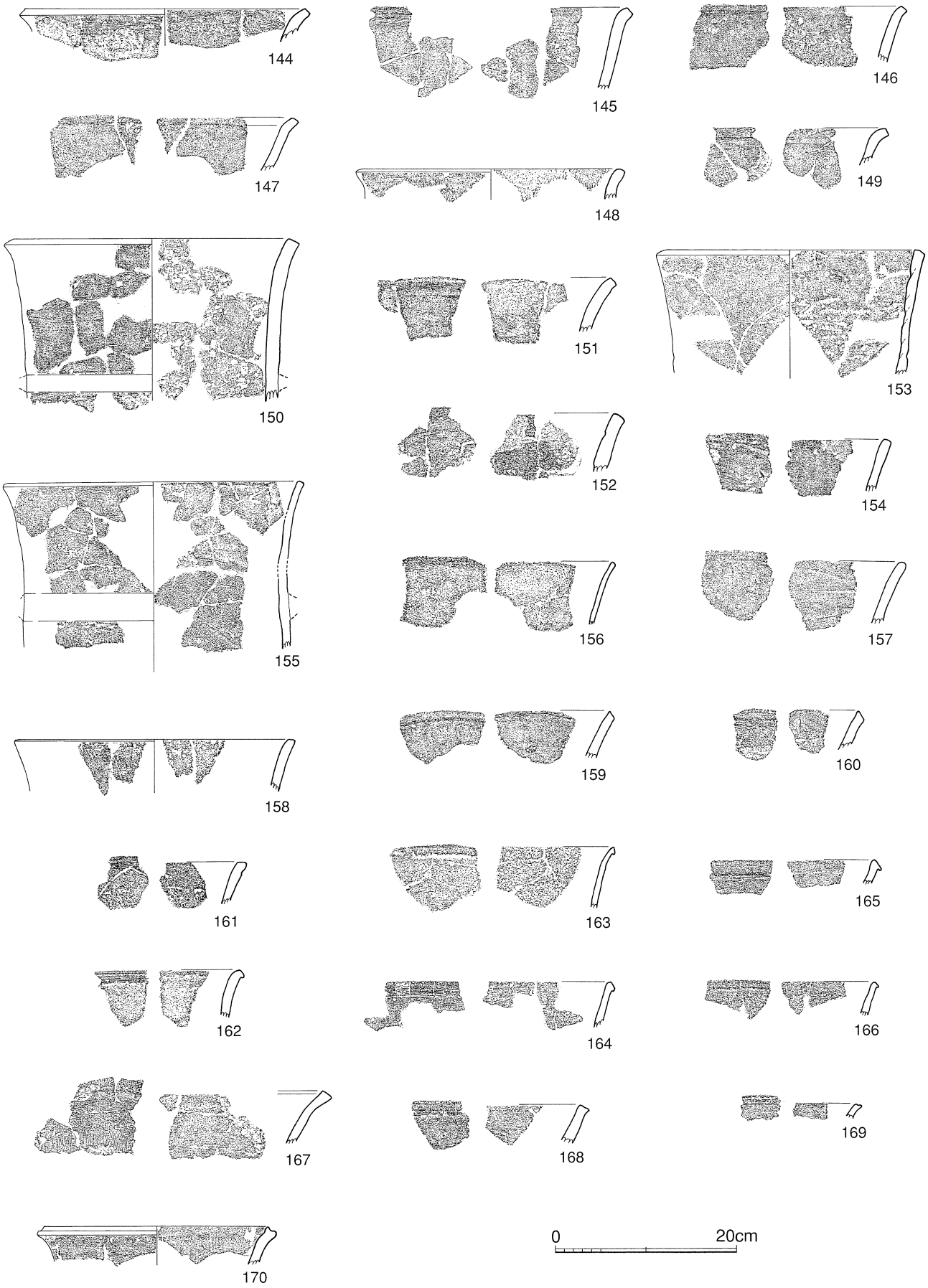
第16図　円筒埴輪実測図⑩（S＝1／6）



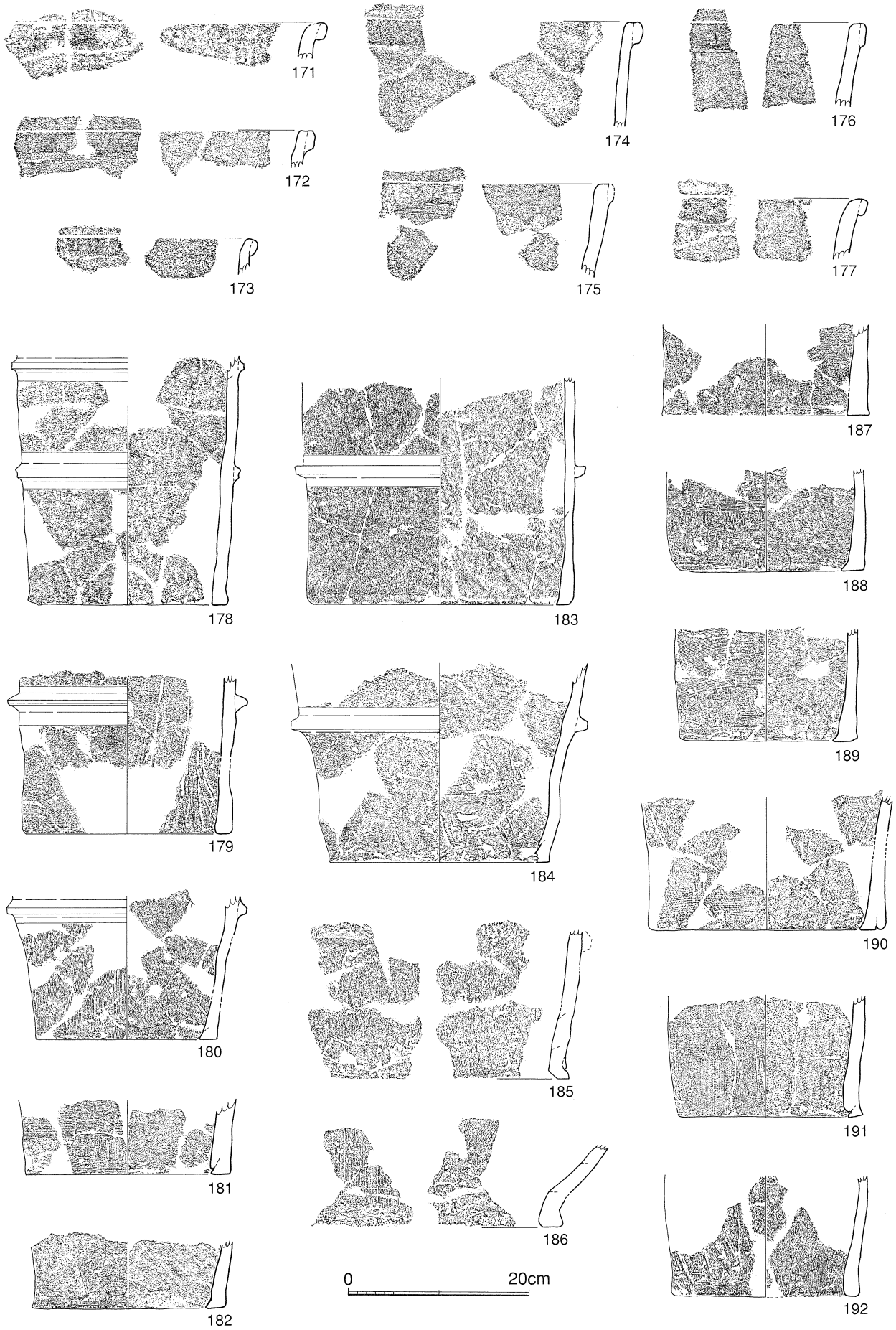
第17図　円筒埴輪実測図⑪（S＝1／6）



第18図　円筒埴輪実測図⑫（S＝1／6）



第19図　円筒埴輪実測図⑬（S＝1／6）



第20図　円筒埴輪実測図⑭（S＝1／6）

第10表　西都原171号噴出土円筒埴輪観察表①

番号	部位	法量					胎土（混入物）	焼成	色調		口縁部分類	突帯分類	底部接合数	透かし	線刻
		器高	口径	底径	突帯間	1段目			外面	内面					
1	基底部～1段目	8.3	－	(17.8)	－	－	F.P	良好	j	q	－	－	?	－	－
2	基底部～1段目	13.8	－	21.4	－	－	E.P	〃	b	f	－	－	?	－	－
3	基底部～1段目	11.3	－	(20.3)	－	－	A.D.G.R1	〃	f	f	－	Ⅰa	2	－	－
4	基底部～第1突帯付近	19.2	－	22.4	－	15.8	E.P	〃	f	f	－	Ⅱa	2	－	－
5	基底部～1段目	9.6	－	21.6	－	－	F.O.P	〃	f	f	－	－	2	－	－
6	基底部～第1突帯付近	18.0	－	17.9	－	15.3	D.G.P	〃	a.f	f	－	Ⅱb	?	－	－
7	基底部～3段目	30.4	－	18.4	11.6	16.2	G.M.P.R2	〃	h	h.i	－	Ⅱa	2	－	－
8	基底部～2段目	21.0	－	22.1	－	11.4	D.F.P	〃	f	f.h	－	Ⅱa	?	－	－
9	基底部～第1突帯付近	18.8	－	20.9	－	15.0	E.P	〃	d	d	－	Ⅴ	2	－	－
10	基底部～2段目	22.9	－	19.6	－	15.7	F.G.O.P.Q	〃	f	f	－	Ⅱb	?	－	－
11	基底部～4段目	42.0	－	21.4	11.2	15.2	A.D.G.P.R1	〃	f.p.t	f.u	－	Ⅱb	2	3	－
12	基底部～3段目	29.6	－	20.9	11.1	14.6	D.G.P	〃	a.j	f.q	－	Ⅱb	?	3	－
13	基底部～2段目、3段目～口縁部	24.9	－	20.0	－	15.2	D.G.P.R1	〃	f.q	f.q	I2b	Ⅰb	?	3	－
14	基底部～2段目	23.2	－	21.5	－	15.0	F.G.O	〃	f	f	－	Ⅱa	?	－	－
15	基底部～2段目	22.0	－	22.3	－	14.8	F.G.O.P	〃	f	f	－	Ⅰb	?	－	－
16	基底部～1段目	11.6	－	19.4	－	17.0	G.L.O.Q.R2	〃	f	f	－	－	?	－	－
17	基底部～1段目	11.1	－	19.4	－	－	G.O.P	〃	f	f	－	－	2	－	－
18	基底部～第1突帯付近	22.9	－	19.2	－	15.2	F.G.L.O.Q	〃	f	f	－	Ⅰb	?	－	－
19	基底部～第1突帯付近	17.7	－	20.1	－	15.4	F.G.O.Q	〃	f.h	f	－	Ⅰa	?	－	－
20	基底部～第1突帯付近	17.6	－	22.3	－	15.2	F.G.O.Q	〃	f	f	－	(Ⅲa)	2	－	－
21	基底部～1段目	13.5	－	19.0	－	－	D.F.P.R1	〃	f	f	－	－	?	－	－
22	基底部～1段目	13.7	－	22.8	－	－	D.F.P.R1	〃	d.f	h	－	－	2	－	－
23	基底部～第1突帯付近	17.7	－	20.0	－	15.6	F.P.R1	〃	f	f	－	－	?	－	－
24	基底部～2段目	20.4	－	20.8	－	14.4	F.O.P	〃	i	i	－	Ⅰa	2	－	－
25	基底部～第1突帯付近	17.4	－	(21.2)	－	15.2	F.O.P	〃	f	p	－	(Ⅱb)	?	－	－
26	基底部～2段目	24.1	－	22.1	－	15.6	G.M.P	〃	f.h	f.h	－	Ⅱa	3	－	－
27	基底部～1段目	14.1	－	23.4	－	－	G.O.Q.R4	〃	f	f	－	(Ⅱa)	?	－	－
28	基底部～第1突帯付近	16.7	－	23.7	－	15.4	F.P	〃	h	h	－	(Ⅱa)	2	－	－
29	基底部～1段目	12.2	－	18.3	－	－	G.M.P	〃	f	f	－	－	?	－	－
30	基底部～3段目	26.6 (34.9)	－	20.3	11.4	15.0	D.G.P	〃	f.p	f.p	－	Ⅱb	?	3	－
31	基底部～4段目	43.4	－	23.0	11.8	15.0	D.G.P	〃	d.h	h	－	Ⅱb	?	3	－
32	基底部～2段目、3段目～口縁部	25.3	－	19.0	－	15.5	G.O	〃	f	f	V2	Ⅱb	?	－	4
33	基底部～3段目	26.0	－	23.9	11.0	15.0	D.G.P	〃	f.p	f.j	－	Ⅰa	2	3	－
34	基底部～2段目、口縁部	26.3	－	23.1	－	14.8	F.P.R5	〃	f	f	Ⅳ1	Ⅰa	?	－	－
35	基底部～第1突帯付近	22.7	－	22.8	－	15.2	F.O.P.R2	〃	f	f	－	Ⅰa	2	－	－
36	基底部～口縁部	49.8	－	22.5	10.8	15.0	A.D.F.M.P	〃	f	f	Ⅳ1	Ⅱa	2	3	－
37	基底部～第2突帯付近	29.8	－	18.9	12.2	14.8	A.F.G.PR1.R3	〃	f.i	f	－	Ⅱb	?	－	－
38	基底部～2段目	25.8	－	(17.4)	－	15.2	A.D.G	〃	f.j	j	－	Ⅲa	?	－	－
39	基底部～2段目、口縁部	25.1	－	24.3	－	15.2	F.O.P.R1	〃	f	a	Ⅱa	Ⅰa	?	－	－
40	基底部～3段目	28.9	－	21.6	10.8	14.2	D.F.G	〃	f.i	i	－	Ⅱb	?	－	－
41	基底部～3段目	24.7	－	24.7	－	15.4	G.O.P.Q	〃	f	f	－	Ⅰa	3	3	－
42	基底部～2段目	22.7	－	20.0	－	15.5	F.G.O.P	〃	f	f	－	Ⅱa	?	－	－
43	基底部～第2突帯付近	27.7	－	22.7	11.6	14.8	F.O.Q	〃	h	h	－	Ⅰa	2	－	－
44	基底部～3段目	19.5	－	21.8	－	14.2	F.O.P.R1	〃	f	f	－	Ⅲa	?	－	－
45	基底部～2段目、3段目、口縁部	22.6	(35.0)	31.3	－	14.8	F.G.O.Q.R1	〃	f	f	Ⅱa	Ⅰb	2	－	－
46	基底部～第1突帯付近	18.2	－	18.4	－	15.4	K.P	〃	f	q	－	－	2	－	－
47	基底部～口縁部	49.2	(30.6)	23.4	11.0	15.2	A.D.F.M.P	〃	f.h	h	V1	Ⅱa・Ⅳb	?	3	3
48	基底部～2段目	26.6	－	21.3	－	15.2	D.G.P	〃	f.i	f	－	Ⅰa	2	－	－

番号	器面調整									備考
	外面				内面				底面	
	1段目	2段目	3段目	4段目	1段目	2段目	3段目	4段目		
1	Ⅰb.Ⅱa	—	—	—	Ⅱa	—	—	—	A.B	
2	Ⅰb.Ⅱa	—	—	—	Ⅱc	—	—	—	D	
3	Ⅰb.Ⅱb	—	—	—	Ⅱb.c	—	—	—	A.B	
4	Ⅰa	Ⅰa	—	—	Ⅱc	Ⅱc	—	—		
5	Ⅱa	—	—	—	Ⅱa	—	—	—	A	
6	Ⅰb.Ⅱa.b	Ⅰb	—	—	Ⅰc.Ⅱd	Ⅰc.Ⅱd	—	—	B	
7	Ⅰa.Ⅱb	Ⅰa	Ⅰa	—	Ⅰc.Ⅱ	Ⅱ	Ⅱ	—	A.B	
8	Ⅱa	Ⅱa	—	—	Ⅱa	Ⅱa	—	—		
9	Ⅱa	—	—	—	Ⅱ	Ⅱ	—	—	B	
10	Ⅰa	?	—	—	?	?	—	—	B	
11	Ⅰb	Ⅰb	Ⅰb	Ⅰb	Ⅱd	Ⅱd	Ⅱd	Ⅱd	A	外面に朱
12	Ⅰb.Ⅱa	Ⅰb	Ⅰb	—	Ⅱc	Ⅱa	Ⅱb	—	A	
13	Ⅰb.Ⅱa	Ⅰb	Ⅰb	Ⅰa.b	Ⅱa	Ⅱa	Ⅱc	Ⅰc.Ⅱc	A	
14	Ⅰb.Ⅱa	Ⅰb	—	—	Ⅱd	Ⅱa	—	—	A	
15	Ⅰb	?	—	—	Ⅱd	Ⅱa	—	—		
16	Ⅰa	—	—	—	Ⅱc	—	—	—	A	
17	Ⅱb	—	—	—	Ⅱ	—	—	—	A.B	
18	Ⅰb.Ⅱa	?	—	—	Ⅱa	Ⅱa	—	—	A	
19	Ⅱa	—	—	—	Ⅱa	Ⅱa	—	—	A	
20	Ⅰa	—	—	—	Ⅰc.Ⅱ	—	—	—		
21	Ⅰb.Ⅱa	—	—	—	Ⅱa	—	—	—	B	
22	?	—	—	—	?	—	—	—		
23	Ⅰa	—	—	—	Ⅰa	—	—	—	A	
24	?	?	—	—	Ⅱc	Ⅱc	—	—	A.B	
25	Ⅰa	—	—	—	Ⅱa	—	—	—		
26	Ⅱa.b	Ⅱb	—	—	Ⅱ	Ⅱc	—	—	A	
27	Ⅰa.Ⅱb	—	—	—	Ⅱb.c	—	—	—	A	
28	Ⅰa	—	—	—	Ⅰb.Ⅱd	—	—	—		
29	Ⅱb	—	—	—	Ⅱa	—	—	—	B	
30	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰa	—	Ⅱa	Ⅱa	Ⅱd	—	A	
31	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰc	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱb	Ⅱb	A.B	
32	Ⅱa.b	Ⅱa.b	Ⅱ	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱc	?	?	B	
33	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰa	—	Ⅱc	Ⅰc	Ⅰb	—		
34	Ⅰa	Ⅰa	—	Ⅰa.Ⅱb	Ⅱc	Ⅰc	—	Ⅱ	A.B.C	
35	Ⅰa.Ⅱa	Ⅱa	—	—	Ⅰc	Ⅰc	—	—	A.B.C	
36	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰc	Ⅰc	Ⅰc.Ⅱc	Ⅰc.Ⅱc	Ⅰc	Ⅰb	B	
37	Ⅰb	Ⅰb	?	—	Ⅱc	Ⅱc	Ⅱc	—	A.D	
38	Ⅱa	Ⅱa	—	—	Ⅱc	Ⅱc	—	—		
39	Ⅰa	Ⅰa	—	Ⅰa	Ⅰc.Ⅱa	Ⅰc.Ⅱa	—	Ⅱb	A	
40	Ⅰa	Ⅰa	?	—	Ⅱa	Ⅱa	Ⅱa	—	A	
41	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰa	—	Ⅱa	Ⅱa.c	Ⅱb.c	—		
42	Ⅰa	Ⅰa	—	—	Ⅱb	Ⅱb	—	—	B	外面に朱
43	Ⅰa	Ⅰa	—	—	Ⅱc	Ⅱc	—	—	A	
44	Ⅰa.Ⅱc	Ⅱb	Ⅱa.b	—	Ⅰb.Ⅱc	Ⅱc	Ⅱc	—	A	
45	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰa	Ⅱc	Ⅱa	Ⅱa	Ⅱa.b	A.B	
46	Ⅰa	?	—	—	Ⅱb.c	Ⅱb	—	—	A.B	
47	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰc.Ⅱc	Ⅰc.Ⅱa	Ⅰb.c	Ⅰc	A.B	
48	Ⅱa.b	Ⅱa	—	—	Ⅱb	Ⅱb	—	—	B	

第11表　西都原171号噴出土円筒埴輪観察表②

番号	部位	法量					胎土（混入物）	焼成	色調		口縁部分類	突帯分類	底部接合数	透かし	線刻
		器高	口径	底径	突帯間	1段目			外面	内面					
49	基底部～2段目、口縁部	24.4	(29.2)	19.5	－	15.5	D.G	〃	f.i	i	Ⅲ	Ⅳa	2	－	－
50	基底部～第2突帯付近	32.4	－	25.7	16.0	15.4	A.D.G.P	〃	f	f	－	Ⅳb	?	－	－
51	基底部～第2突帯付近	31.3	－	21.5	－	15.4	D.G.P	〃	f	h	－	Ⅱa	2	3	－
52	基底部～2段目、口縁部	22.5	(28.8)	23.7	－	15.4	D.G	〃	f.h	f	Ⅳ1	Ⅰa	3	3	－
53	基底部～第1突帯付近	20.4	－	22.2	－	15.1	E.G	〃	f.q	q	－	Ⅰa	?	3	－
54	基底部～口縁部	32.0	(36.2)	21.0	11.8	14.8	F.G.P	〃	f	f	Ⅶ	Ⅰa	?	3	－
55	基底部～3段目	29.1	－	22.4	11.6	14.6	D.G.P	〃	h.i	i	－	Ⅱa	3	3	－
56	基底部～3段目、口縁部	31.6	－	19.3	12.0	15.2	D.G.H.P	〃	f.i	f.i	V2?	Ⅰa	?	3	－
57	基底部～3段目	33.6	－	21.0	10.8	16.4	A.F.J.Q	〃	e.h.q	p	－	(Ⅱa)	2	3	－
58	基底部～2段目	20.1	－	21.4	－	14.6	E.M	〃	f	f	－	Ⅰa	2	－	－
59	基底部～2段目	23.0	－	22.2	－	15.0	A.E.R1	〃	d	d	－	Ⅱb	?	－	－
60	基底部～第2突帯付近	27.4	－	21.2	12.0	14.2	E	〃	f.q	p	－	Ⅱa	2	－	－
61	基底部～第1突帯付近	17.8	－	20.6	－	16.1	A.C.G.M.P	〃	f	d	－	Ⅲa	?	－	－
62	基底部～2段目	22.6	－	23.8	－	15.2	A.F.G.Q	〃	f.u	f	－	Ⅰb	2	－	－
63	基底部～第1突帯付近	18.4	－	23.9	－	14.4	A.G	〃	f.u	f.u	－	Ⅰb	?	－	－
64	基底部～2段目	21.3	－	22.1	－	14.8	D.E	〃	i.n	i	－	(Ⅰa)	?	－	－
65	基底部～1段目、3段目～口縁部	15.6	(29.8)	21.4	－	－	D.E	〃	f.h	h	Ⅱa	－	2	－	－
66	基底部～1段目	8.5	－	21.1	－	－	D.M	〃	f.j	f	－	Ⅱa	?	－	－
67	基底部～1段目	8.3	－	(32.8)	－	－	D.M	〃	f.h	f	－	－	?	－	－
68	基底部～1段目	13.4	－	25.3	－	－	B.F.G.P	〃	f	o	－	(Ⅰa)	2	－	－
69	基底部～第1突帯付近	18.8	－	21.3	－	15.2	A.F.G.P.R5	〃	f.u	f	－	Ⅱa	2	－	－
70	基底部～2段目	24.8	－	23.6	－	15.0	E.O	〃	f	f	－	Ⅰa	2	－	－
71	基底部～2段目、口縁部	27.6	(32.4)	35.8	－	15.4	M.P	〃	f	f	Ⅳ2	－	3	－	－
72	基底部～3段目	32.0	－	20.0	12.7	15.6	A.G.P	〃	f	i	－	Ⅱb・Ⅳb	2	3	－
73	基底部～2段目、口縁部	26.0	(34.8)	(25.0)	－	15.2	A.G.P	〃	f.u	f	I2b	Ⅰa	?	－	4
74	基底部～2段目	25.8	－	22.2	－	15.0	D.G.P	〃	d	d	－	Ⅱb	2	3	－
75	基底部～2段目、口縁部	28.2	(34.6)	22.9	11.8	14.7	G.O.P	〃	f.u	h	V3	Ⅱa	?	－	－
76	基底部～2段目	27.2	－	24.4	－	15.6	D.G.P	〃	f	f	－	－	?	－	－
77	基底部～2段目	22.4	－	22.7	－	14.8	A.M.P	〃	f.h	h	－	Ⅰa	?	－	－
78	基底部～2段目、口縁部	21.7	(30.6)	22.6	－	15.4	A.E.P	〃	f	j.p	Ⅳ2	Ⅱa	3	－	4
79	基底部～3段目	26.5	－	23.9	－	15.4	A.G.P.R1	〃	h.u	h	－	Ⅱa	?	3	－
80	基底部～第2突帯付近	27.4	－	19.7	11.2	14.6	A.F.G	〃	h	h	－	Ⅱb	2	3	－
81	基底部～2段目	24.5	－	21.9	－	15.0	D.M.P	〃	l	f.p	－	Ⅰa	?	－	－
82	基底部～第1突帯付近	19.1	－	18.2	－	14.4	M.O	〃	f.p	f	－	Ⅱb	?	－	－
83	基底部～3段目	32.7	－	22.4	11.6	14.8	D.M.P	〃	f.i	h	－	Ⅰa	?	3	－
84	基底部～2段目	23.3	－	20.3	－	15.0	D.O.P	〃	f.q	f.j	－	Ⅰb	?	3	－
85	基底部～口縁部	48.4	(33.6)	(20.0)	11.6	14.4	A.D.F.G.M.P	〃	f	d	I2b	Ⅱa	?	3	－
86	基底部～2段目	26.4	－	19.1	－	15.1	A.F.G.P	〃	f.u	f.u	－	Ⅰb	2	3	－
87	基底部～4段目	25.7	－	18.2	11.4	14.8	A.F.G	〃	f.r	f	－	Ⅱb	?	－	－
88	基底部～第1突帯付近	19.5	－	18.2	－	14.7	A.F.P.R5	〃	f.u	p	－	Ⅰa	?	3	－
89	基底部～2段目	25.8	－	18.4	－	15.5	A.F.P.R5	〃	f.u	h	－	Ⅰb	?	－	－
90	基底部～2段目	20.3	－	18.3	－	14.8	A.G.P	〃	f	p	－	Ⅱa	?	－	－
91	基底部～2段目、3段目～口縁部	20.2	(36.0)	21.3	－	14.0	B.E.P	〃	f.p	p.q	I2b	Ⅱa	?	3	4
92	基底部～2段目	22.0	－	24.8	－	15.0	A.F.G.P	〃	f.u	f.q	－	Ⅰb	?	－	－
93	基底部～2段目	24.7	－	21.8	－	14.4	A.G.P	〃	f.u	p	－	Ⅰb	2	－	－
94	基底部～第2突帯付近	29.0	－	23.9	11.6	15.1	A.E.P	〃	f	f.j	－	Ⅱb	?	－	－
95	基底部～2段目	24.6	－	21.1	－	14.9	E.O.P	〃	f	f	－	Ⅰb	2	－	－
96	基底部～2段目	23.0	－	20.0	－	15.8	M.O.P	〃	h	h	－	Ⅰa	?	－	－

番号	器面調整									備考
	外面				内面				底面	
	1段目	2段目	3段目	4段目	1段目	2段目	3段目	4段目		
49	Ⅱa	Ⅱa	−	Ⅱb	?	?	−	?		
50	Ⅰc	Ⅰc.Ⅱa	−	−	Ⅰc	Ⅰc	−	−		
51	Ⅰa	Ⅰa	?	−	Ⅱa	Ⅱa	Ⅱa	−		
52	Ⅰa	Ⅱb	Ⅰa	Ⅰa.Ⅱb	Ⅱc	Ⅱb	Ⅰb	?	A	
53	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰa	−	Ⅱc	Ⅱc	Ⅱb	−		
54	Ⅰa	Ⅰa.c	Ⅰa.c	Ⅰa.Ⅱb	Ⅰc.Ⅱc	Ⅰc	Ⅰb	Ⅰb.Ⅱb		
55	Ⅰa.Ⅱb	Ⅰa	?	−	Ⅱb	Ⅱb	Ⅱb	−	A	
56	Ⅱa	Ⅰa	?	?	Ⅱc	Ⅱc	Ⅱc	?		
57	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰa	−	Ⅱa	Ⅱa	Ⅱa	−		
58	Ⅰa	Ⅰa	−	−	Ⅱc	Ⅱc	−	−		
59	Ⅰa	Ⅰa	−	−	Ⅱc	Ⅱc	−	−	A.B	
60	Ⅱc	Ⅱc	−	−	Ⅱc	Ⅱc	−	−	A.B	
61	Ⅱa	?	−	−	Ⅱc	Ⅱa	−	−		
62	Ⅱa	Ⅱa	−	−	Ⅱa	Ⅱa	−	−	B	
63	Ⅰa	?	−	−	Ⅰc.Ⅱc	Ⅱc	−	−	B	底面に朱
64	Ⅱa	?	−	−	Ⅱa	Ⅱa	−	−		
65	Ⅱa	−	?	Ⅱ?	Ⅱc	−	?	Ⅱa.b	B.C	
66	Ⅰa	−	−	−	Ⅱa	−	−	−	A.B	底面に朱
67	Ⅰa.b	−	−	−	Ⅱb	−	−	−	A	
68	Ⅰa	−	−	−	Ⅱa	−	−	−	A.B	底面に朱
69	Ⅰa	?	−	−	Ⅱa	Ⅱa	−	−	A	
70	Ⅰa	Ⅰa	−	−	Ⅱa	Ⅱa	−	−	A.B	
71	Ⅱa	Ⅱa	−	Ⅰc.Ⅱb	Ⅱa	Ⅱa	−	Ⅰc		
72	Ⅰa	Ⅰa	?	−	Ⅱa	Ⅱa	Ⅱa	−	A	
73	Ⅱa	Ⅱa	−	Ⅰa	Ⅱb.c	Ⅱb	−	Ⅱa	A	底面に朱
74	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰa	−	Ⅱa	Ⅱa	Ⅰa	−		底面に朱
75	Ⅰa	Ⅰa	−	Ⅰa	Ⅱc	Ⅱc	−	Ⅱb	A.B	
76	Ⅰa	Ⅰa	−	−	Ⅰc	Ⅰc	−	−		
77	Ⅰa	Ⅰa	−	−	Ⅱa	Ⅱa	−	−	A.B	
78	Ⅰa	Ⅰa	−	Ⅰc	Ⅰb.c	Ⅰc	−	Ⅰc		底面に朱
79	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰa	−	Ⅱa	Ⅱa	Ⅱa	−		
80	Ⅱa.b	Ⅱa.b	Ⅱa.b	−	Ⅱa	Ⅱa	Ⅱa	−	B	
81	Ⅱa	Ⅱa	−	−	Ⅱa	Ⅱa	−	−	A	
82	Ⅰa	Ⅰa	−	−	Ⅱd	Ⅱa.c	−	−		
83	Ⅱa	Ⅰb	Ⅰb	−	Ⅱa	Ⅱc	Ⅱc	−	B?	
84	Ⅰb.Ⅱa	Ⅰb	Ⅰb	−	Ⅱa	Ⅱc	Ⅱc	−	B?	
85	Ⅱa	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱc	Ⅱb	Ⅱb		外面に朱?
86	Ⅰa.b	Ⅰb	Ⅰa.b	Ⅰb	Ⅱa	Ⅱc	Ⅱa	Ⅱa	B	
87	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰa.b	Ⅰa	Ⅱc	Ⅱa	Ⅰb.Ⅱa	Ⅰc	A	
88	Ⅰb.Ⅱa	Ⅰb	Ⅰb	−	Ⅱa	Ⅱa	Ⅰb.Ⅱa	−	A.B	
89	Ⅰb.Ⅱa	Ⅰb	−	−	Ⅱa	Ⅱa	−	−		
90	Ⅰb.Ⅱa	Ⅰb	−	−	Ⅰc.Ⅱc	Ⅰc.Ⅱc	−	−	A	
91	Ⅰa.b	Ⅰb	Ⅰb	Ⅰb	Ⅱa	Ⅱa	Ⅰc	Ⅰb	B	
92	Ⅰb.Ⅱa	Ⅰb	−	−	Ⅱa	Ⅱa	−	−	A.B	
93	Ⅰb.Ⅱa	Ⅰb	−	−	Ⅱa	Ⅱa	−	−	A	
94	Ⅰa	Ⅰa	−	−	Ⅱa	Ⅱa	−	−		底面に朱
95	Ⅰa.Ⅱa	Ⅰa	−	−	Ⅰc	Ⅱc	−	−		底面に朱
96	?	?	−	−	?	?	−	−		

第12表　西都原171号噴出土円筒埴輪観察表③

番号	部位	法量					胎土（混入物）	焼成	色調		口縁部分類	突帯分類	底部接合数	透かし	線刻
		器高	口径	底径	突帯間	1段目			外面	内面					
97	基底部～2段目	23.7	－	22.8	－	14.8	D.E.P	〃	f.h	f	－	Ⅱb	?	－	－
98	基底部～2段目	25.0	－	20.9	－	15.0	D.F.G	〃	f	h	－	Ⅱa	?	－	－
99	基底部～2段目	22.1	－	18.7	－	11.1	A.F.P	〃	f.u	h	－	Ⅳa	?	－	－
100	基底部～1段目	14.3	－	(22.7)	－	－	D.M.P	〃	p	p.q	－	(Ⅱa)	?	－	－
101	基底部～第1突帯付近	16.2	－	22.1	－	15.0	M.O.P	〃	f.h	h	－	Ⅱa	2	－	－
102	基底部～1段目	11.7	－	(21.8)	－	－	D.N.P	〃	f	f	－	－	?	－	－
103	基底部～第1突帯付近	20.2	－	22.3	－	15.2	D.E.G.P	〃	h	h	－	Ⅱa	2	－	－
104	基底部～2段目	24.2	－	(20.6)	－	15.4	D.F.M.P	〃	f.h	f.h	－	Ⅰa	?	－	－
105	基底部～第1突帯付近	20.2	－	20.6	－	15.4	D.E.P	〃	f.q	p	－	Ⅳb	2	－	－
106	基底部～第1突帯付近	19.7	－	(19.4)	－	14.8	E.M.P	〃	f	h	－	Ⅱb	?	－	－
107	基底部～2段目	24.7	－	19.1	－	15.0	D.F.P	〃	f	f	－	Ⅱa	2	－	－
108	基底部～1段目	14.0	－	(22.5)	－	－	D.E	〃	f.h	f	－	(Ⅰa)	2+	－	－
109	基底部～第2突帯付近	29.3	－	(24.0)	11.6	15.2	A.D.F.P	〃	f	f	－	Ⅲa	?	－	－
110	基底部～3段目	31.8	－	22.6	11.4	14.0	F.G.P	〃	h.q	f.q	－	Ⅱa	?	－	－
111	基底部～3段目	30.1	－	27.2	11.7	15.0	F.G.P	〃	h.q.u	h	－	Ⅰa	?	－	－
112	基底部～1段目	9.8	－	(20.0)	－	－	D.E.P	〃	p	p	－	－	?	－	－
113	基底部～2段目	21.8	－	(19.8)	－	15.0	D.E.P	〃	f.i	f	－	Ⅱb	?	－	－
114	基底部～1段目	13.1	－	(17.4)	－	－	D.E.P	〃	j.p	j	－	－	?	－	－
115	基底部～1段目	10.0	－	(20.8)	－	－	D.E.P	〃	d	d	－	－	?	－	－
116	基底部～1段目	13.1	－	(22.6)	－	－	D.E.P	〃	h	h	－	(Ⅱb)	?	－	－
117	基底部～2段目	21.2	－	23.0	－	14.8	F.G.P.R6	〃	f.q	f	－	－	3	－	－
118	基底部～第1突帯付近（口縁部）	20.9	－	21.0	－	15.1	D.E.F.P	〃	f.p	f.p	－	Ⅱa	?	－	－
119	基底部～2段目	21.9	－	20.0	－	15.0	F.G.M	〃	h.u	h	－	Ⅰb	?	2	－
120	3段目～口縁部	－	(32.4)	－	－	－	D.E.F	〃	h	f.h	Ⅱa	Ⅵb	－	3	4
121	口縁部	－	－	－	－	－	G.P	〃	i	h	Ⅱb	－	－	－	－
122	口縁部	－	(29.4)	－	－	－	D.F.P	〃	f	q	Ⅱb	－	－	－	4
123	3段目～口縁部	－	(31.2)	－	－	－	D.F.P	〃	f.m	f	Ⅱb	Ⅱa	－	3	－
124	口縁部	－	(35.4)	－	－	－	F.M.R3	〃	s	q	Ⅱa	－	－	－	－
125	口縁部	－	(37.2)	－	－	－	F.G.M	〃	h	h	Ⅱb	－	－	－	－
126	口縁部	－	(29.4)	－	－	－	D.G.P	〃	f.m	f	Ⅱa	－	－	－	－
127	口縁部	－	(31.8)	－	－	－	F.M.R3	〃	f	f	Ⅱa	－	－	－	4
128	第3突帯～口縁部	－	(30.0)	－	－	－	F.M.P	〃	f	f	Ⅱa	Ⅰb	－	－	－
129	4段目～口縁部	－	(25.8)	－	－	－	D.F	〃	d	e	Ⅱa	－	－	－	4
130	3段目～口縁部	－	(31.2)	－	－	－	F.M.P	〃	h	h	Ⅱa	Ⅰb	－	3	－
131	口縁部	－	－	－	－	－	D.E.P	〃	h	f.p	Ⅱb	－	－	－	4
132	口縁部	－	－	－	－	－	D.F.P	〃	l	i	Ⅱa	－	－	－	4
133	3段目～口縁部	－	(34.8)	－	－	－	D.G.P	〃	f	f	Ⅱb	Ⅰb	－	3	－
134	3段目～口縁部	－	(36.0)	－	－	－	D.F.P	〃	f	f	Ⅱb	Ⅰa	－	3	4
135	3段目～口縁部	－	(36.0)	－	－	－	D.E.P	〃	f	h	Ⅱb	Ⅱb	－	3	4
136	3段目～口縁部	－	(35.4)	－	－	－	F.G.P	〃	f	h.q	Ⅱa	Ⅰb	－	－	－
137	口縁部	－	(30.0)	－	－	－	D.P.R2	〃	s	h	Ⅱb	－	－	－	－
138	4段目～口縁部	－	－	－	－	－	D.E.P.Q	〃	f	p	Ⅱb	－	－	－	4
139	3段目～口縁部付近	－	－	－	－	－	D.M.P	〃	h	h	－	Ⅰa	－	3	4
140	4段目～口縁部	－	－	－	－	－	D.F.G.P	〃	f.u	f	Ⅱa	－	－	－	4
141	3段目～口縁部	－	(35.4)	－	－	－	D.F.P	〃	f	h	Ⅱ	Ⅱa	－	3	3·4
142	3段目～口縁部	－	(34.2)	－	－	－	F.M.P	〃	f	f	Ⅱ	Ⅲa	－	－	－
143	4段目～口縁部	－	(31.2)	－	－	－	D.G.K.M.P	〃	d	i	Ⅱ	－	－	－	4
144	口縁部	－	(30.9)	－	－	－	D.M.P	〃	d	h	Ⅲ	－	－	－	4

番号	器面調整									備考
	外面				内面				底面	
	1段目	2段目	3段目	4段目	1段目	2段目	3段目	4段目		
97	Ⅱa	Ⅱa	—	—	Ⅱc	Ⅱb	—	—	A.B	
98	Ⅱb	Ⅱa.b	—	—	Ⅱc	Ⅱb	—	—	B	
99	Ⅰa	Ⅰa	—	—	Ⅱb	Ⅱb	—	—	A	
100	Ⅰa	—	—	—	Ⅱc	—	—	—	A	
101	Ⅰa	—	—	—	Ⅰc.Ⅱc	—	—	—	A	
102	Ⅱa	—	—	—	Ⅱa	—	—	—		
103	Ⅰa	Ⅰa	—	—	Ⅱc	Ⅰc.Ⅱc	—	—	B	
104	Ⅱa	Ⅱa	—	—	Ⅱa	Ⅱa	—	—	A	突帯に布目圧痕
105	Ⅱa	Ⅱa	—	—	Ⅱa	Ⅱa	—	—	A	
106	Ⅱa	Ⅱa	—	—	Ⅱc	Ⅱc	—	—	A	
107	Ⅱa	Ⅱa	—	—	Ⅱb	Ⅱc	—	—	A	
108	Ⅰa	—	—	—	Ⅱd	—	—	—	A	
109	Ⅱa	Ⅱa	—	—	Ⅱa	Ⅱa.c	—	—	A	
110	Ⅰa	Ⅰa	Ⅰb	—	Ⅰc.Ⅱc	Ⅰc.Ⅱa	Ⅰb.Ⅱa	—	A.B	底面に朱
111	Ⅰa	Ⅰa	?	—	Ⅱb	Ⅱa	—	—	A	
112	Ⅱa	—	—	—	Ⅱb.c	—	—	—	A.B	
113	Ⅱa	Ⅱb	—	—	Ⅱc	Ⅱc	—	—	B	
114	Ⅰa	—	—	—	Ⅱb	—	—	—		
115	Ⅰa	—	—	—	Ⅱa.b	—	—	—	A	底面に朱
116	Ⅱ?	—	—	—	Ⅱ?	—	—	—	A	
117	Ⅰa	Ⅰa	—	—	Ⅱc	Ⅱc	—	—	A.B	
118	Ⅰa	Ⅰa	—	Ⅱb	Ⅰc	Ⅰc	—	Ⅰc.Ⅱb	A	
119	Ⅰa	Ⅰa	—	—	Ⅱc	Ⅱc	—	—	A.B	
120	—	—	Ⅰa	Ⅰa	—	—	Ⅱ?	Ⅱ?	—	
121	—	—	—	Ⅰa.Ⅱb	—	—	—	Ⅱa.b	—	
122	—	—	—	Ⅰa.Ⅱb	—	—	—	Ⅰc.Ⅱb	—	
123	—	—	Ⅰa	Ⅰa	—	—	Ⅱ?	Ⅰc.Ⅱ?	—	
124	—	—	—	Ⅰb	—	—	—	Ⅰb.Ⅱc	—	
125	—	—	—	?	—	—	—	?	—	
126	—	—	—	Ⅱb	—	—	—	Ⅱb	—	
127	—	—	—	Ⅱ	—	—	—	Ⅱ	—	
128	—	—	—	Ⅱ	—	—	—	Ⅱ	—	
129	—	—	—	?	—	—	—	Ⅱa?	—	
130	—	—	Ⅰb	Ⅰb	—	—	Ⅱb	Ⅱb	—	
131	—	—	—	Ⅰb	—	—	—	Ⅰb	—	
132	—	—	—	Ⅰa	—	—	—	Ⅱ?	—	
133	—	—	Ⅰb	Ⅰb	—	—	Ⅱa	Ⅰb.Ⅱa	—	
134	—	—	Ⅰb	Ⅰb	—	—	Ⅱc	Ⅰb.Ⅱb	—	
135	—	—	Ⅰb	Ⅰb	—	—	Ⅱ	Ⅱ	—	
136	—	—	Ⅰb	Ⅰb	—	—	Ⅱc	Ⅰb.Ⅱc	—	
137	—	—	—	Ⅱ?	—	—	—	Ⅱ?	—	
138	—	—	—	Ⅰa.Ⅱb	—	—	—	Ⅰb.Ⅱ	—	
139	—	—	Ⅰb	Ⅰb	—	—	Ⅱa	Ⅰb.Ⅱa	—	
140	—	—	—	Ⅰb	—	—	—	Ⅰb	—	
141	—	—	Ⅱb	Ⅱb	—	—	Ⅱ?	Ⅱ?	—	
142	—	—	—	?	—	—	—	?	—	
143	—	—	—	Ⅰb	—	—	—	?	—	
144	—	—	—	Ⅰa.b	—	—	—	Ⅱ?	—	

第13表　西都原171号噴出土円筒埴輪観察表④

番号	部位	法量					胎土（混入物）	焼成	色調		口縁部分類	突帯分類	底部接合数	透かし	線刻
		器高	口径	底径	突帯間	1段目			外面	内面					
145	4段目～口縁部	－	－	－	－	－	D.F.P	〃	f	h	Ⅲ	－	－	－	－
146	口縁部	－	－	－	－	－	M.P	〃	f	f	Ⅲ	－	－	－	－
147	口縁部	－	－	－	－	－	F.M.P	〃	f.i	i	Ⅲ	－	－	－	－
148	口縁部	－	(28.8)	－	－	－	D.M.P	〃	p	f	Ⅲ	－	－	－	－
149	口縁部	－	－	－	－	－	M.P.R2	〃	h	h	Ⅲ	－	－	－	－
150	第3突帯～口縁部	－	(30.3)	－	－	－	D.P.R2	〃	d	f	Ⅳ1	－	－	－	－
151	口縁部	－	－	－	－	－	F.M.P	〃	f	f	Ⅳ1	－	－	－	－
152	口縁部	－	－	－	－	－	D.E.R2	〃	f	f	Ⅳ1	－	－	－	4
153	4段目～口縁部	－	(27.9)	－	－	－	D.M.R2	〃	d	d	Ⅳ1	－	－	－	4
154	口縁部	－	－	－	－	－	I.M.P	〃	p	q	Ⅳ1	－	－	－	－
155	3段目～口縁部	－	(32.1)	－	－	－	F.M.P	〃	f	f	Ⅳ1	－	－	－	－
156	口縁部	－	－	－	－	－	A.G.P	〃	h	h	Ⅳ1	－	－	－	－
157	口縁部	－	－	－	－	－	D.M	〃	f	f	Ⅳ3	－	－	－	－
158	口縁部	－	(30.6)	－	－	－	F.P.R5	〃	f	h	Ⅳ2	－	－	－	－
159	口縁部	－	－	－	－	－	D.E	〃	f	f	Ⅴ1	－	－	－	－
160	口縁部	－	－	－	－	－	D.P	〃	p	f	Ⅴ1	－	－	－	－
161	口縁部	－	－	－	－	－	F.R2	〃	d	d	Ⅳ2	－	－	－	4
162	口縁部	－	－	－	－	－	D.P.R2	〃	f	f	Ⅴ2	－	－	－	－
163	口縁部	－	－	－	－	－	D.F	〃	i.q	h	Ⅴ2	(Ⅳa)	－	－	－
164	口縁部	－	－	－	－	－	A.F.P	〃	f	f	Ⅴ2	－	－	－	－
165	口縁部	－	－	－	－	－	A.D	〃	h	s	Ⅴ2	－	－	－	－
166	口縁部	－	－	－	－	－	A.F.P	〃	h	h	Ⅴ2	－	－	－	－
167	口縁部	－	－	－	－	－	D.M.P	〃	h	i	Ⅴ3	－	－	－	－
168	口縁部	－	－	－	－	－	A.C.D.G.P	〃	f	f	Ⅴ3	－	－	－	－
169	口縁部	－	－	－	－	－	F.M.R2	〃	f	f	Ⅴ3	－	－	－	－
170	口縁部	－	(25.2)	－	－	－	A.D.E.M.P	〃	d	d	Ⅴ4	－	－	－	－
171	口縁部	－	－	－	－	－	F.M	〃	h	h	Ⅵ	－	－	－	－
172	口縁部	－	－	－	－	－	A.F.P	〃	s.u	h	Ⅵ	－	－	－	－
173	口縁部	－	－	－	－	－	F.M.P	〃	f	f	Ⅵ	－	－	－	－
174	4段目～口縁部	－	－	－	－	－	F.G.P	〃	h	h	Ⅵ	－	－	－	－
175	4段目～口縁部	－	－	－	－	－	D.F.P	〃	f	h	Ⅵ	－	－	－	－
176	4段目～口縁部	－	－	－	－	－	F.P	〃	f	f	Ⅵ	－	－	－	－
177	4段目～口縁部	－	－	－	－	－	F.G.M	〃	h	h	Ⅵ	－	－	－	－
178	基底部～第2突帯付近	27.6	－	(21.6)	11.8	14.5	A.G.K.M.O.P	〃	f	h	－	Ⅰb	－	－	－
179	基底部～第1突帯付近	17.0	－	(22.4)	－	14.4	A.D.G.K.M.P	〃	d	d	－	Ⅰa	－	－	－
180	基底部～第1突帯付近	15.8	－	(21.1)	－	14.0	D.G.K.M.P	〃	f	f	－	Ⅰa	?	－	－
181	基底部～1段目	8.2	－	(22.6)	－	－	A.D.K.M.P.R1	〃	f	f	－	－	?	－	－
182	基底部～1段目	7.4	－	21.2	－	－	A.D.G.K.M.P	〃	f	f	－	－	?	－	－
183	基底部～2段目	25.0	－	28.0	－	14.6	A.D.G.K.O	〃	d	d	－	Ⅳa	?	－	－
184	基底部～第1突帯付近	21.8	－	24.0	－	－	A.D.F.G.M.P.R1	〃	d	d	－	Ⅰa	?	－	－
185	基底部～第1突帯付近	16.0	－	－	－	－	D.G.K.M.O.P	〃	f	f	－	－	?	－	－
186	基底部～1段目	8.8	－	－	－	－	A.F.D.M.O.R2	〃	f	f	－	－	?	－	－
187	基底部～1段目	10.0	－	(22.6)	－	－	A.D.G.M.P.R1	〃	f	f	－	－	?	－	－
188	基底部～1段目	11.0	－	20.4	－	－	D.G.M.P	〃	d	d	－	－	?	－	－
189	基底部～1段目	12.2	－	19.4	－	－	A.D.M	〃	d	h	－	－	?	－	－
190	基底部～1段目	14.2	－	(25.2)	－	－	A.D.G.K.M.P	〃	h	f	－	－	?	－	－
191	基底部～1段目	13.3	－	20.2	－	－	A.D.G.M.P	〃	f	d	－	－	?	－	－
192	基底部～1段目	13.5	－	(20.6)	－	－	D.E	〃	f	f	－	(Ⅱa)	?	－	－

番号	器面調整									備考
	外面				内面				底面	
	1段目	2段目	3段目	4段目	1段目	2段目	3段目	4段目		
145	—	—	—	Ⅰa.Ⅱb	—	—	—	Ⅰb	—	
146	—	—	—	Ⅰc.Ⅱb	—	—	—	Ⅱb	—	
147	—	—	—	Ⅱb	—	—	—	Ⅱb	—	
148	—	—	—	?	—	—	—	Ⅰb.Ⅱ?	—	
149	—	—	—	Ⅰb	—	—	—	Ⅱb	—	内外面に朱?
150	—	—	?	Ⅱb	—	—	?	Ⅱ?	—	
151	—	—	—	Ⅰb?	—	—	—	Ⅰb?	—	
152	—	—	—	Ⅱb	—	—	—	Ⅱ?	—	
153	—	—	—	Ⅱ	—	—	—	Ⅱ	—	
154	—	—	—	Ⅰb.Ⅱb	—	—	—	Ⅱb	—	
155	—	—	Ⅰa	Ⅰa.Ⅱb	—	—	Ⅰc	Ⅰc.Ⅱb	—	
156	—	—	—	?	—	—	—	?	—	
157	—	—	—	Ⅱ	—	—	—	Ⅱb	—	
158	—	—	—	Ⅰc	—	—	—	Ⅰb.Ⅱb	—	
159	—	—	—	Ⅰa.Ⅱb	—	—	—	Ⅱb	—	
160	—	—	—	Ⅱb	—	—	—	Ⅱb	—	
161	—	—	—	?	—	—	—	Ⅱb?	—	外面に朱?
162	—	—	—	?	—	—	—	?	—	
163	—	—	—	?	—	—	—	?	—	
164	—	—	—	Ⅱb	—	—	—	Ⅱb	—	
165	—	—	—	Ⅰc	—	—	—	Ⅱb?	—	
166	—	—	—	Ⅰa	—	—	—	?	—	
167	—	—	—	Ⅰa.Ⅱb	—	—	—	Ⅰb.Ⅱb	—	
168	—	—	—	Ⅱb	—	—	—	Ⅱb	—	
169	—	—	—	Ⅱb	—	—	—	Ⅱb	—	
170	—	—	—	Ⅱb	—	—	—	Ⅱb	—	
171	—	—	—	?	—	—	—	?	—	
172	—	—	—	Ⅱb	—	—	—	?	—	
173	—	—	—	?	—	—	—	?	—	
174	—	—	—	?	—	—	—	?	—	
175	—	—	—	Ⅱb.c	—	—	—	Ⅱb	—	外面に朱?
176	—	—	—	Ⅱb?	—	—	—	Ⅱb	—	
177	—	—	—	?	—	—	—	?	—	
178	Ⅱa	Ⅱa	—	—	Ⅱa	Ⅱa	—	—	B	
179	Ⅰa	Ⅰa	—	—	Ⅰc	Ⅱb	—	—	—	
180	Ⅰa	—	—	—	Ⅱd	—	—	—	A.B	
181	Ⅰb	—	—	—	Ⅱd	—	—	—	—	
182	Ⅱ	—	—	—	Ⅱc	—	—	—	A	
183	Ⅰc.Ⅱb	Ⅱb	—	—	Ⅱc	Ⅱc	—	—	—	
184	Ⅰa	?	—	—	Ⅰd	Ⅱb	—	—	A	
185	Ⅰa	—	—	—	Ⅱa	—	—	—	—	
186	Ⅰa	—	—	—	Ⅰc?	—	—	—	—	
187	Ⅰb.Ⅱa	—	—	—	Ⅱa	—	—	—	—	
188	Ⅰa.b	—	—	—	Ⅱb.c	—	—	—	B	
189	Ⅰb.Ⅱa	—	—	—	Ⅱb.c	—	—	—	B	
190	Ⅰb	—	—	—	Ⅱa?	—	—	—	—	
191	Ⅰa	—	—	—	Ⅱa	—	—	—	—	
192	Ⅰa.Ⅱb	—	—	—	Ⅱa	—	—	—	A	底面に朱

第２節　器財埴輪

宮崎県史編纂事業の一環として行われた京都大学所蔵資料（大正時代の調査における出土資料）の整理報告[5]（以下整理報告）では、器財埴輪として、家形、盾形、甲冑形（冑形、短甲形）、蓋形埴輪が報告されている。今回の調査でもほぼ同様の器財埴輪が確認されたが、盾形及び冑形については１点も出土していない。また、前述の整理報告では触れられていなかった壺形埴輪が比較的多く出土している。以下、各器種毎にその出土状況と特徴を述べる。

（１）家形埴輪

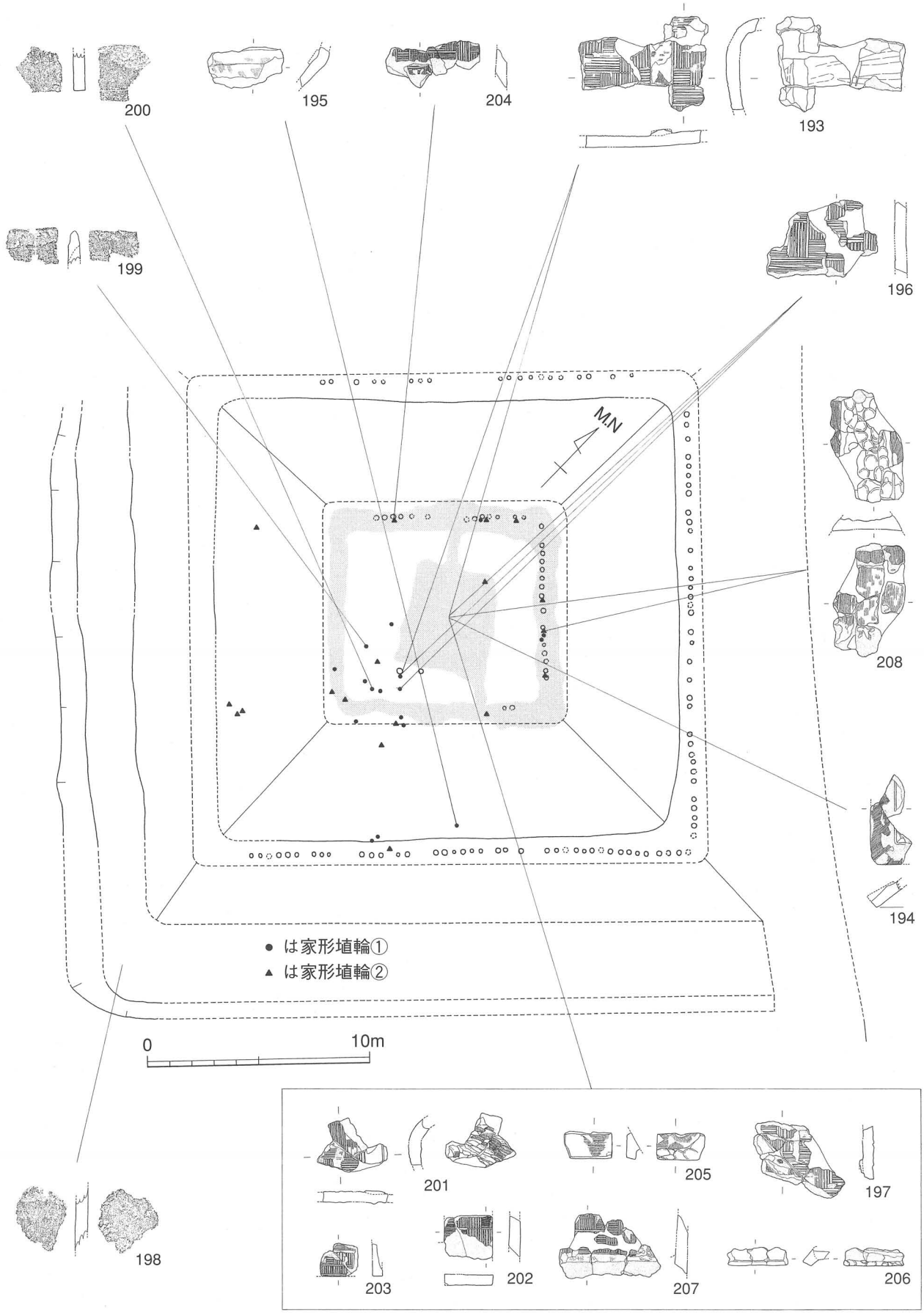
出土状況

本古墳出土の家形埴輪の大半は大正の調査によって出土しており、今回の調査による出土量は少ない。大正の調査では、墳頂平坦面の中央からやや南西に寄った地点から家形埴輪１個体の基底部が検出されたと報告されている。第21図は今回の調査における家形埴輪の出土状況であるが、大正の攪乱内以外の分布状況は墳頂平坦面の南コーナー付近を中心に南西及び南東の墳丘斜面に集中している。

家形埴輪の特徴

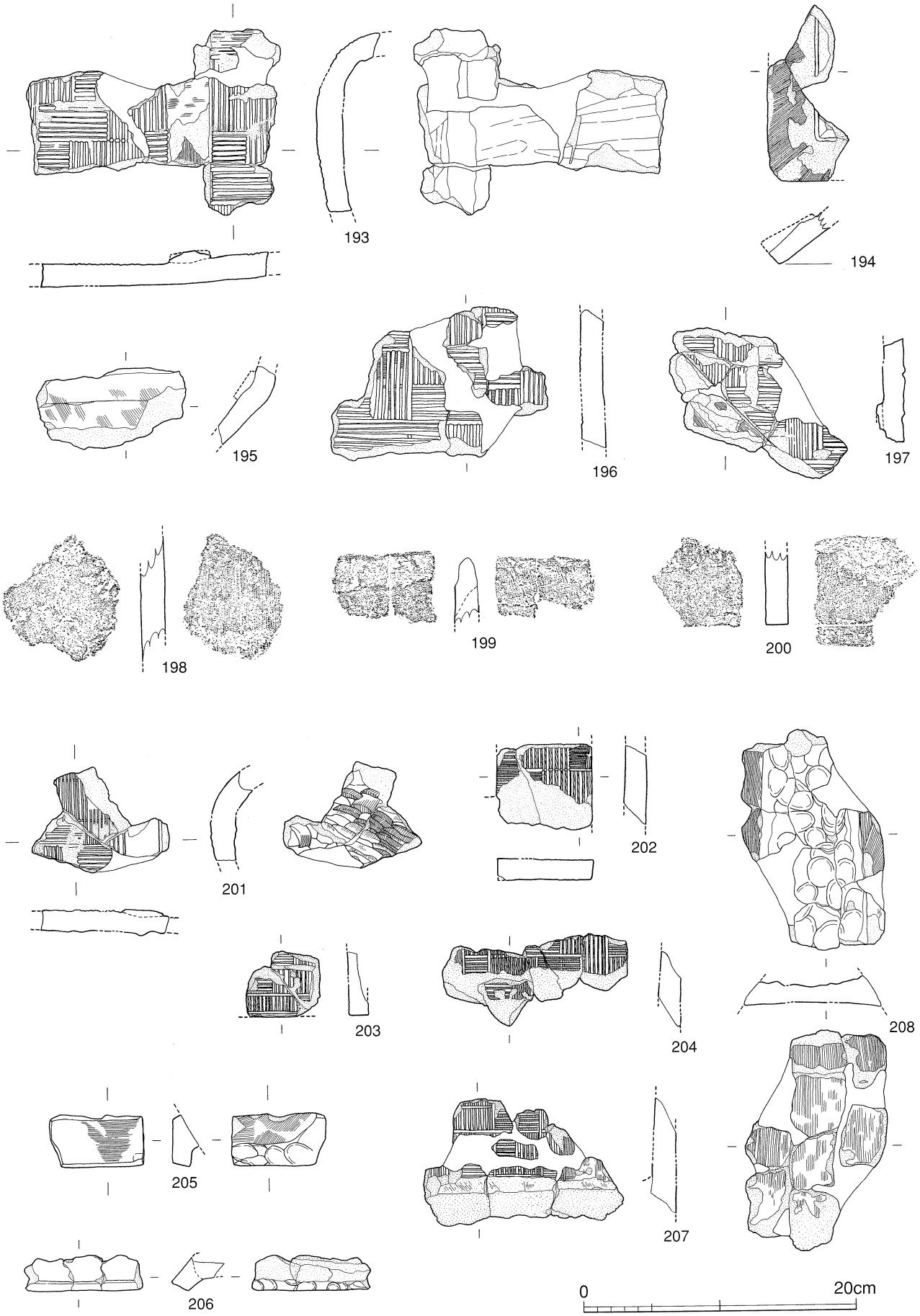
大正調査資料の整理報告では、外面にハケメ調整がみられる大きな壁の破片と網代表現がみられる大きな壁の破片が紹介され、報告者は、別個体であった場合と同一個体であった場合の両案を提示している。また、塗彩方法の相異から壁体に網代表現を有する家形埴輪が２個体存在すると考えている。しかし、京大所蔵資料と今回出土した資料を再検討した結果、屋根には切妻、入母屋造のものがそれぞれ１個体存在すること、整理報告において網代の塗彩方法が異なるとされた破片は方向を90°誤認していると考えられることから、家形埴輪は２個体のみであると判断した。以下、入母屋造のものを家形埴輪①、切妻造のものを家形埴輪②として記述を進める。また、大正の調査報告では、前述した埴輪基底部の破片に関して、「此ノ埴輪ニハ各種幾何學的紋様ヲ刻劃シタルコト例ヘバカノ應神天皇陵陪塚ノ頂上ヨリ發見シタル家屋形埴輪ノ破片ノ夫レノ如ク又タ赤色ニ彩レル痕跡ヲ認ム可シ」との記述があり、この基底部は家形埴輪②の可能性が考えられる。しかし、本報告第１分冊に掲載した図版４の①の写真がこの家形埴輪基底部の出土状況であれば、破片の残存量等から家形埴輪①の可能性も考えられる。従って、大正調査報告にみられる家形埴輪基底部については、個体を特定することはできない。なお、ここでは今回出土した埴輪の破片について報告し、家形埴輪の全体的な構造については、京都大学所蔵資料を含めて第Ⅵ章において検討する。

第22図193～200は家形埴輪①の破片である。193～197は屋根部分の破片と考えられ、焼成は良好で砂粒を含む。色調は浅黄橙色～にぶい橙色を呈し、黒斑がみられる。193は屋根頂部～上半部の破片で、外面には線刻による網代表現及び棟方向に直交する幅３㎝の突帯状の押縁がみられる。押縁にはハケメ調整がみられ、棟と並行な網代とともに赤色顔料が塗布されている。内面はナデ調



※網かけ部は大正調査による撹乱

第21図　家形埴輪出土状況（S＝1／250）



第22図　家形埴輪実測図（S＝1／4）

整で壁との接合面を明瞭に残し、接合面の外側には赤色顔料が塗布されている。196・197も網代表現がみられる屋根上半部の破片である。196の外面に施された網代も横方向の部分のみ赤色顔料の塗布がみられる。197は網代に対して斜め方向に延びる突帯状の押縁を残す破風板付近の破片と考えられ、内面はハケメ調整で赤色顔料の塗布がみられる。194は屋根下半部の先端付近の破片で、幅約4㎝の突帯が貼り付けられていたとみられ、突帯が剥離した接合面にはハケメ痕を残す。198～200は壁体の破片である。焼成は良好で砂粒を含み、色調は浅黄橙色～灰黄色を呈する。いずれも外面は縦方向のハケメ調整、内面はナデ調整である。198の外面には赤色顔料がみられる。199は屋根との接合部で、外側の接合面にはハケメ痕を残す。200は下方に入り口もしくは窓とみられる開口部の一辺を残す。

第22図201～208は家形埴輪②の破片である。いずれも焼成は良好で砂粒を含み、色調は浅黄橙色～にぶい橙色を呈する。201は屋根の頂部付近の破片で、外面には線刻による網代表現及び棟方向に直交する幅2.5㎝の突帯状の押縁がみられる。押縁にはハケメ調整がみられるが、全体的に風化が激しく、赤色顔料の塗布は確認できない。また、内面はハケ工具による刺突で凹凸が激しい。202～204、207は壁体の破片である。いずれも外面に線刻による網代表現がみられ、内面はナデ調整である。202は両側縁に開口部の一辺を残し、左側側縁は下端から横方向に屈曲する状況が伺えることから、左側が窓で右側が入り口になると考えられる。赤色顔料の塗布は確認できない。203は下方に開口部の一辺を残すもので、窓もしくは入り口の上面とみられる。この破片も赤色顔料の塗布が確認できない。204は左端に沈線とハケメ調整による柱表現が一部遺存し、内面がやや内側へ曲がる状況が伺えることから、妻側もしくは平側壁体の角付近と考えられる。赤色顔料は縦方向の網代に塗布されている。207は破片右端付近に幅3㎝の沈線とハケメ調整による柱表現がみられ、妻側もしくは平側壁体の中央付近とみられる。下位には、横方向に直線的な下部突帯との接合面を残している。赤色顔料の遺存状況は悪いが、この破片だけ横方向の網代に塗布されている。205は屋根の内側に貼り付けられる桁材の先端部で、先端の下位に弧状の抉りを有する。外面は横方向のハケメ調整、内面は指押さえ及びナデ調整で、内面上半にはハケメ調整を残す接合面がみられる。接合面以外の面には赤色顔料が塗布されている。206は先端部が下方へ屈曲する形状の下部突帯の破片で、外面から先端にかけて赤色顔料の塗布がみられる。208は外面にハケメ調整、内面に指押さえがみられる板状の破片で、外面には赤色顔料の塗布がみられる。内面の左右にはハケメ調整を残す断面が斜めに傾いた接合面がみられることから、中空に造られた棟木の下部破片と考えられる。

（2）短甲形埴輪

出土状況

大正の調査報告では、前述の家形埴輪基底部の南方から出土したとの記述があるのみで、その出土地点は不明確であった。しかし、今回の調査において、原位置の特定可能な検出状況が得られた。

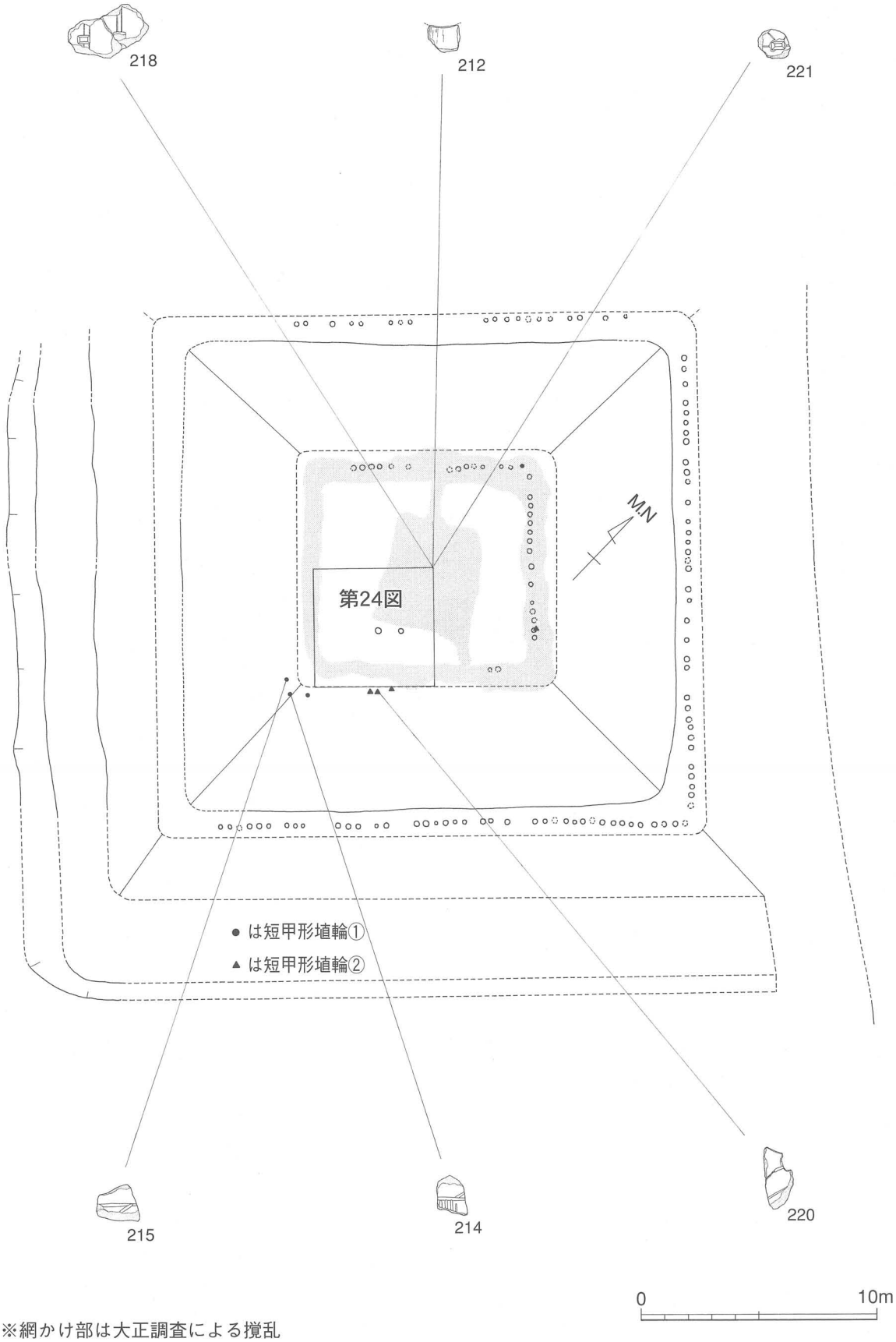
第23、24図は短甲形埴輪の出土状況で、第24図は第23図に示した墳頂平坦面の中央～南コーナー付近を拡大したものである。第24図にみられるように、墳頂平坦面中央から３ｍ程南に寄った地点では、一部大正調査坑に切られるかたちで、長さ約２ｍ、幅約50㎝、深さ15㎝の布掘り状の浅い溝が検出され、その中に70㎝程の間隔を置いて２つの円筒基底部が出土した。この基底部周辺にはそれぞれ異なる焼成、線刻表現を有する短甲形埴輪片が散乱していた。このことから、本墳には２個体の短甲形埴輪が存在し、近接して樹立されていたことが明らかとなった。

短甲形埴輪の特徴

第24図において西側の基底部に伴うものを短甲形埴輪①、東側の基底部に伴うものを短甲形埴輪②として、以下、その特徴を述べる。

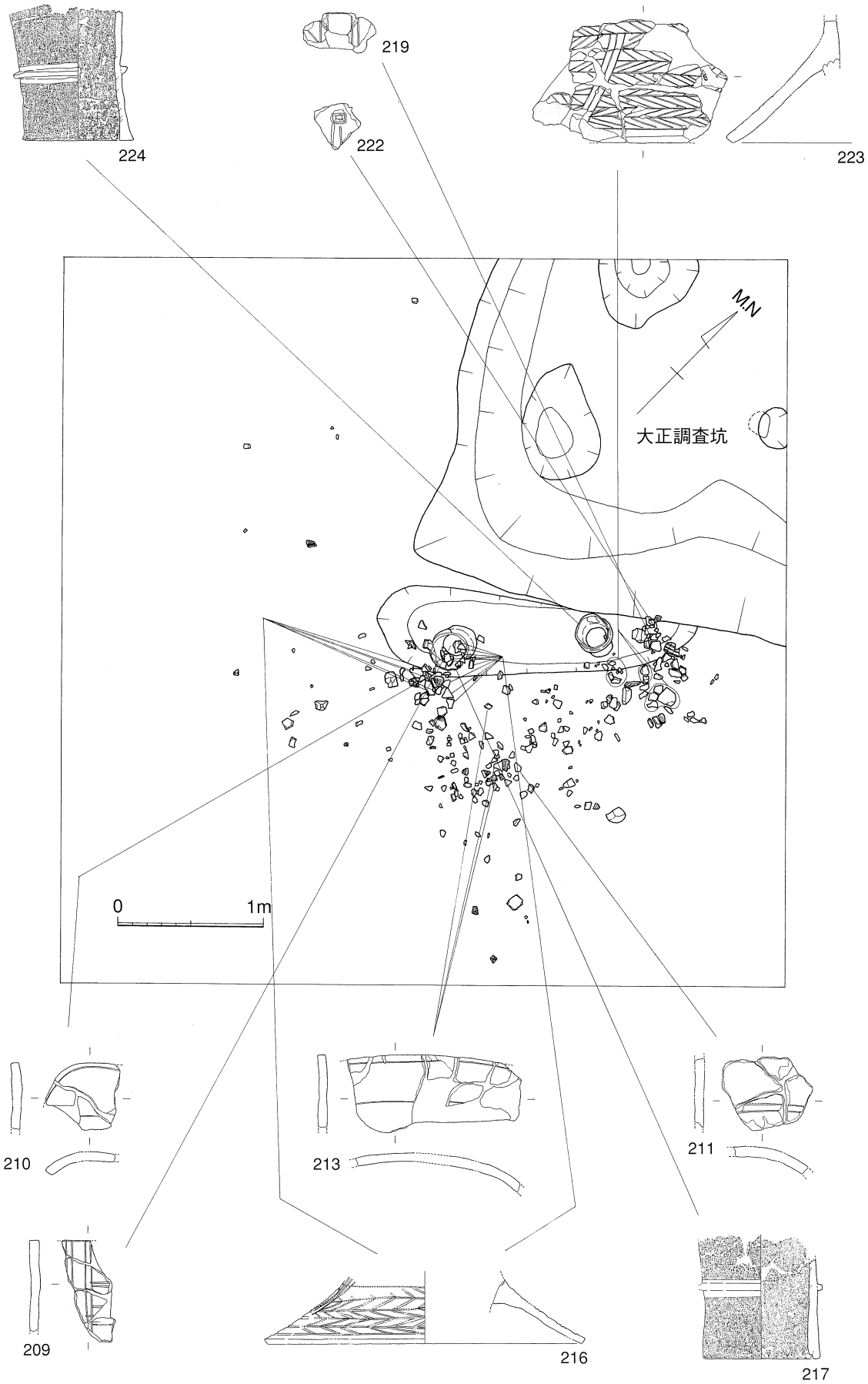
第25図209～217は短甲形埴輪①である。にぶい橙色～浅黄橙色を呈し、焼成は良好である。胎土には砂粒を多く含み、器面の風化が激しいが内外面の一部に赤色顔料がみられることから、本来は全面が赤く塗られていたとみられる。短甲部分（209～213）には１本もしくは２本一組の沈線による表現がみられるが、後述する短甲形埴輪②のような粘土粒による皮綴表現はみられず、モチーフとなった短甲は不明である。209は前胴部中央上端付近の破片と考えられる。２本一組の縦方向の沈線が２列施され、右側の沈線の外側には横方向の２本１組の沈線が上下に２列とその間に１本の沈線が２本みられる。210・213は後胴部押付板付近とみられ、外縁に沿った１状の沈線と横方向に延びる１条の沈線がみられる。211は後胴部右側寄りの破片とみられ、横方向に延びる２本１組の沈線がみられる。212は側面上端部中央付近の破片とみられるが、沈線等はみられず、外面に縦方向のハケメ調整痕を残す。214・215は短甲と草摺の接合部付近の破片とみられる。214は横方向の１条の沈線を挟んで上方に延びる４条の沈線と左下がりの斜方向に延びる沈線がみられる。215には横方向の沈線から下位に左下がりの斜方向沈線がみられる。216は草摺の破片で、1／4程度残存している。残存部分の状況から、３本の縦方向沈線で４分割された区画にほぼ等間隔で並行する６条以上の横方向沈線で区画し、その間を上下交互に右下がり、左下がりの斜方向沈線で充足して綾杉文を形成している。基底部との接合面できれいに遊離しており、短甲形埴輪②と比較すると傾きが緩やかである。217は底径24.6㎝、残存高23.8㎝を測る基底部で、突帯はＩａタイプである。全体的に風化が激しいが、器面調整は縦方向のナデとみられ、黒斑を有する。赤色顔料の塗布は認められず、本来何段構成であったのか不明である。

第25図218～224は短甲形埴輪②である。浅黄橙色～褐灰色を呈し、焼成は良好である。胎土には砂粒を多く含むが、短甲形埴輪①と比較すると良好な遺存状態といえる。内外面の一部に赤色顔料がみられることから、本来は全面が赤く塗られていたとみられる。短甲部分（218～222）の破片は非常に少かったが、整理報告において取り上げられている短甲形埴輪がこれらと同一個体であり、三角板皮綴短甲をモチーフとしている。218・219は前胴部中央付近、220は側面付近、222は短甲と草摺の接合部付近の破片とみられる。223は草摺部分の破片で、216と同様の綾杉文が施されている。横方向の沈線は10条あり、最上段には縦方向の３本沈線が及ばないことから、短甲との接合部分付近まで残存していると考えられる。216よりも傾きが強く、器壁も厚い。224は底径2

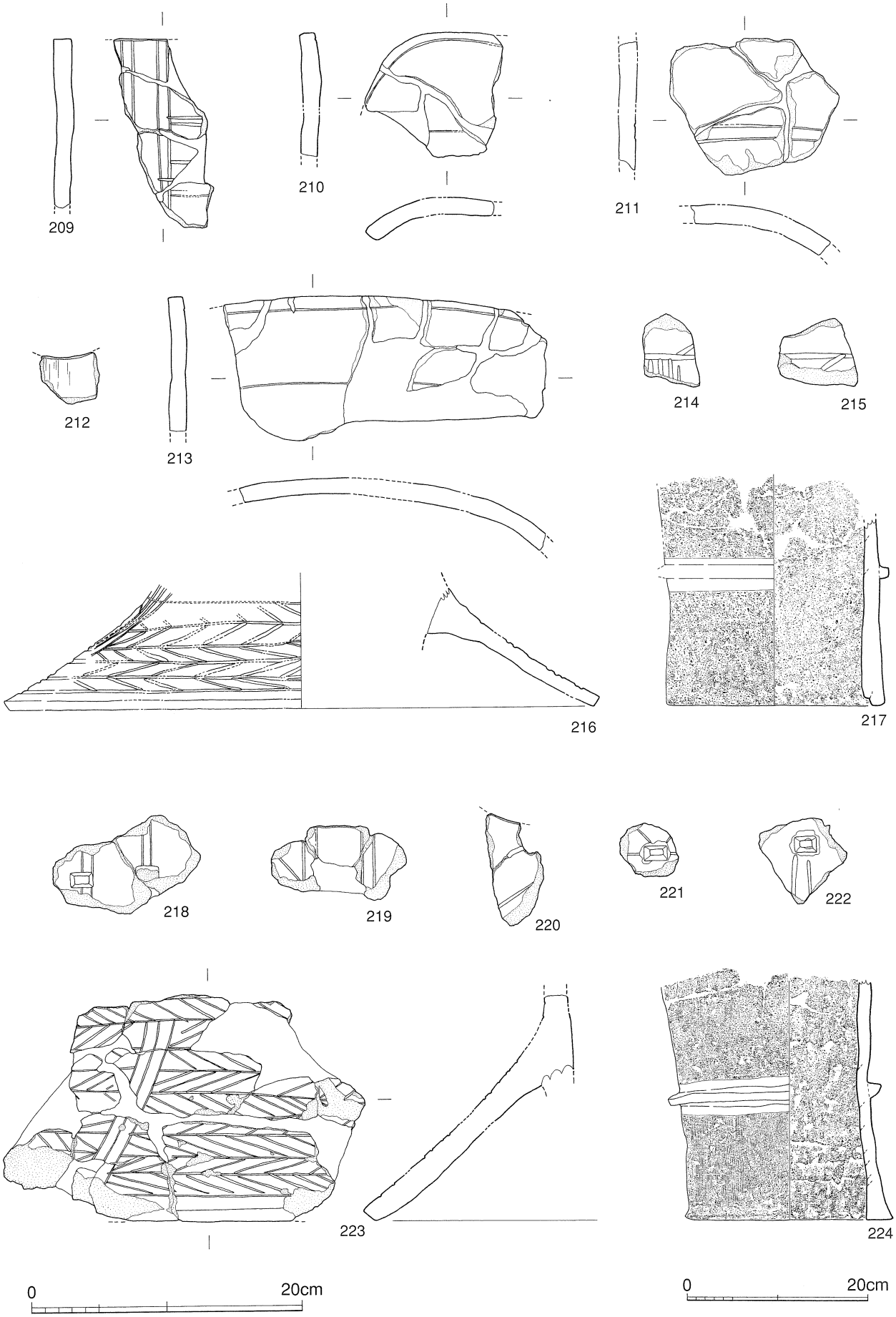


※網かけ部は大正調査による撹乱

第23図　短甲形埴輪出土状況①（S＝1／250）



第24図　短甲形埴輪出土状況②（S＝1／40）



第25図　短甲形埴輪実測図（S＝1／4，但し217・224はS＝1／6）

2.6cm、残存高26.2cmを測る基底部で、突帯はⅡaタイプである。器面調整は外面が1・2段目ともに縦方向ハケメ後一部に不規則な横方向のハケメ調整、内面は荒いナデ調整で粘土紐のつなぎ目が明瞭に残されている。黒斑を有するが、赤色顔料の塗布は認められない。本来何段構成であったのか不明であるが、通常の円筒埴輪では1段目の高さが2段目よりも高いのに対して、2段目の残存高が1段目とほぼ同じであることから、2段構成であった可能性がある。

（3）蓋形埴輪

出土状況

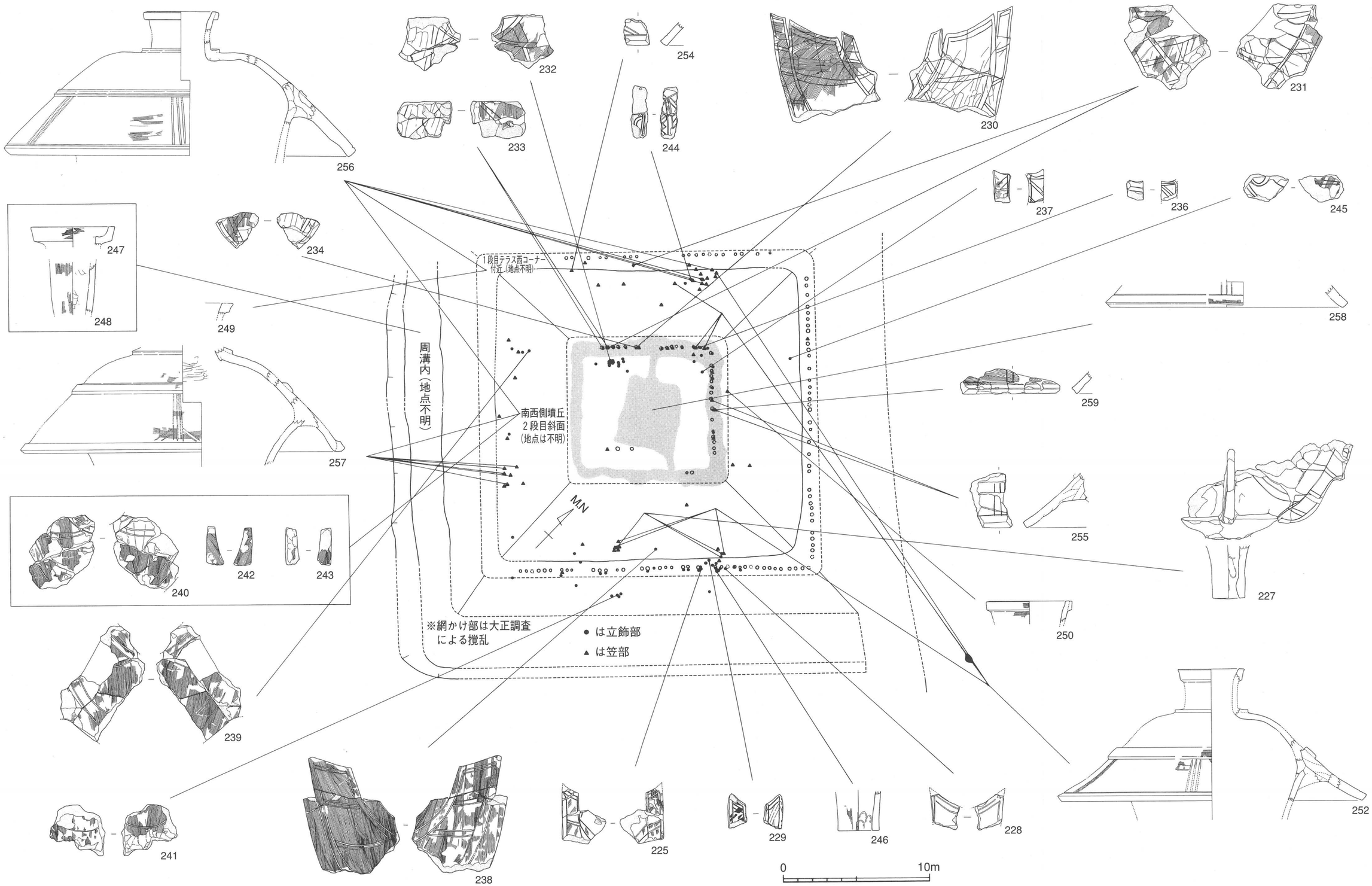
整理報告では蓋形埴輪の報告があり、大正の調査においても出土していたことが知られるが、調査報告には蓋形埴輪に関する記述は全くみられない。

第26図は、今回の調査における蓋形埴輪の出土状況である。この状況をみると、大半の破片が墳頂平坦面上から墳丘2段目斜面にかけて分布していることが伺われる。このことから、蓋形埴輪は本来、墳頂平坦面上に樹立されていた可能性が高いと考えられる。

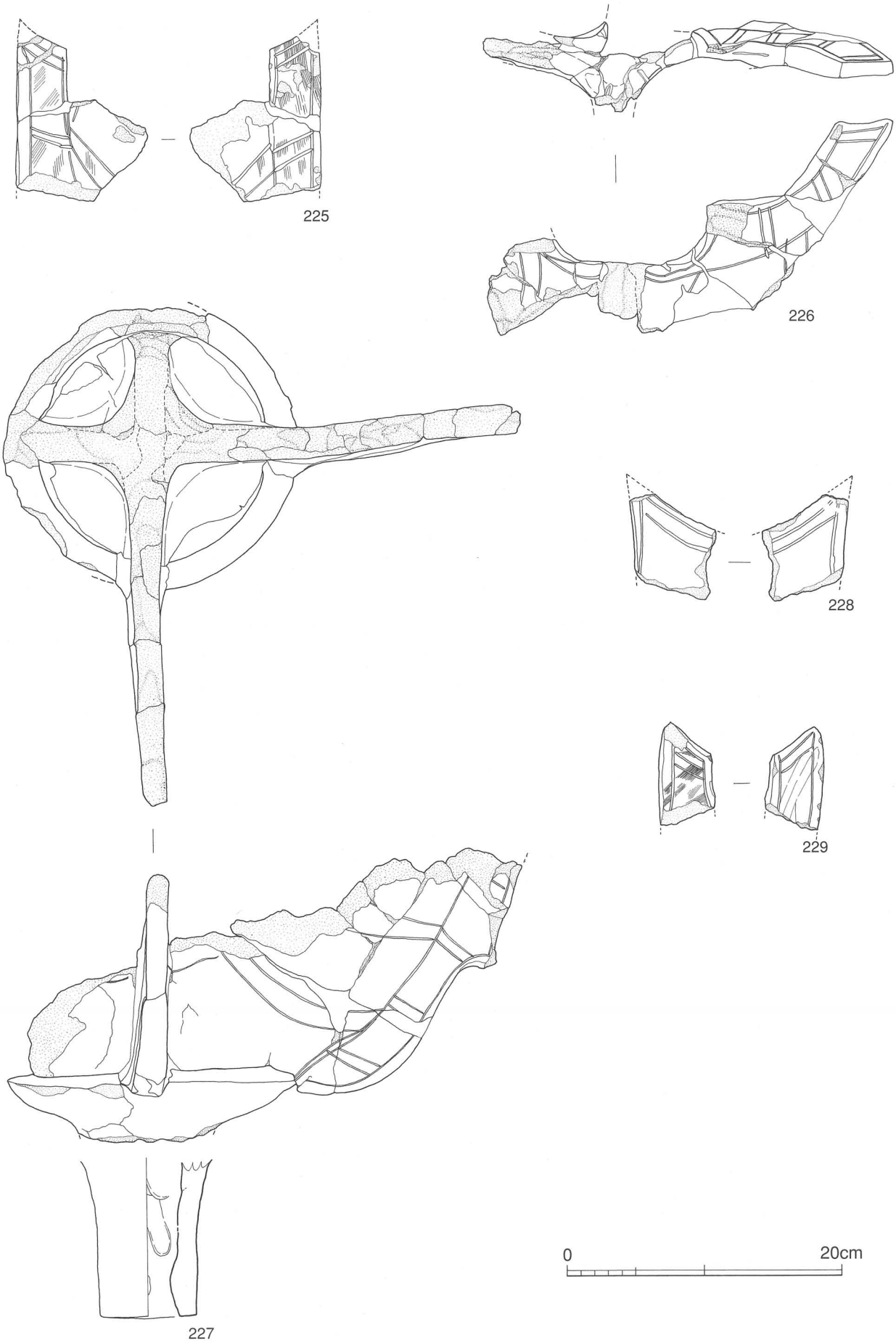
蓋形埴輪の特徴

225～249（第27図～30図）は立飾り部の破片である。出土状況や施文、調整、焼成等の特徴から、少なくとも3個体以上存在すると考えられる。225～229は同一個体（以下立飾り①）とみられ、墳丘2段目南西側斜面を中心に出土した。焼成は良好で色調は浅黄橙色～にぶい橙色を呈し、砂粒を少量含む。器面調整は多少風化しているが不定方向のハケメが主体で、赤色顔料の塗布はみられない。軸部は先端径7cmの筒状部がやや外反しながら12cmほど立ち上がったところで大きく外側へ開き、端部に幅2cm程度の粘土が貼り付けられた径21cmの皿形を成す。皿形の上には中央で十文字に交差する飾り板が結合しているが、接合部分には沈線状の刻み目が施されている。飾り板は、切り込み及び1条の沈線によって本体、内側の鰭、外側の鰭に分割され、更に内外の鰭に外縁に沿った1条の沈線を付加して3つの施文帯を構成している。各施文帯には2条の並行する弧線がほぼ等間隔で施されているが、鰭と本体ではその間隔が異なる。225は飾り板外側の鰭部～本体付近の破片で、本体と鰭の境目は上端から4cmほどの細い切り込みで分割されていたことが伺われる。226は十文字に交差する飾り板基部の上端付近から内側の鰭にかけての破片である。内側の鰭も本体との境目上端から4cm程度は細い切り込みで分割されていたことがわかる。227は軸部から立飾りの下位部分で、2方向の飾り板が比較的残存している。228は本体上端の外側付近、229は外側の鰭の破片とみられる。229では表裏で並行する沈線の条数が異なっている。

230～237は同一個体（以下、立飾り②）とみられ、墳頂平坦面西側から墳丘2段目北西側斜面を中心に出土している。焼成は良好で色調は浅黄橙色～にぶい黄橙色を呈し、砂粒を少量含む。器面調整は多少風化しているが不定方向のハケメと不定方向の強いナデ調整がみられる。器面の一部や沈線内に赤色顔料が残存していることから、本来は全面に塗布されていたと考えられる。軸部の形状は不明で飾り板部分のみだが、切り込み及び沈線によって本体、内側の鰭、外側の鰭に分割さ



第26図　蓋形埴輪出土状況（S＝1／250）



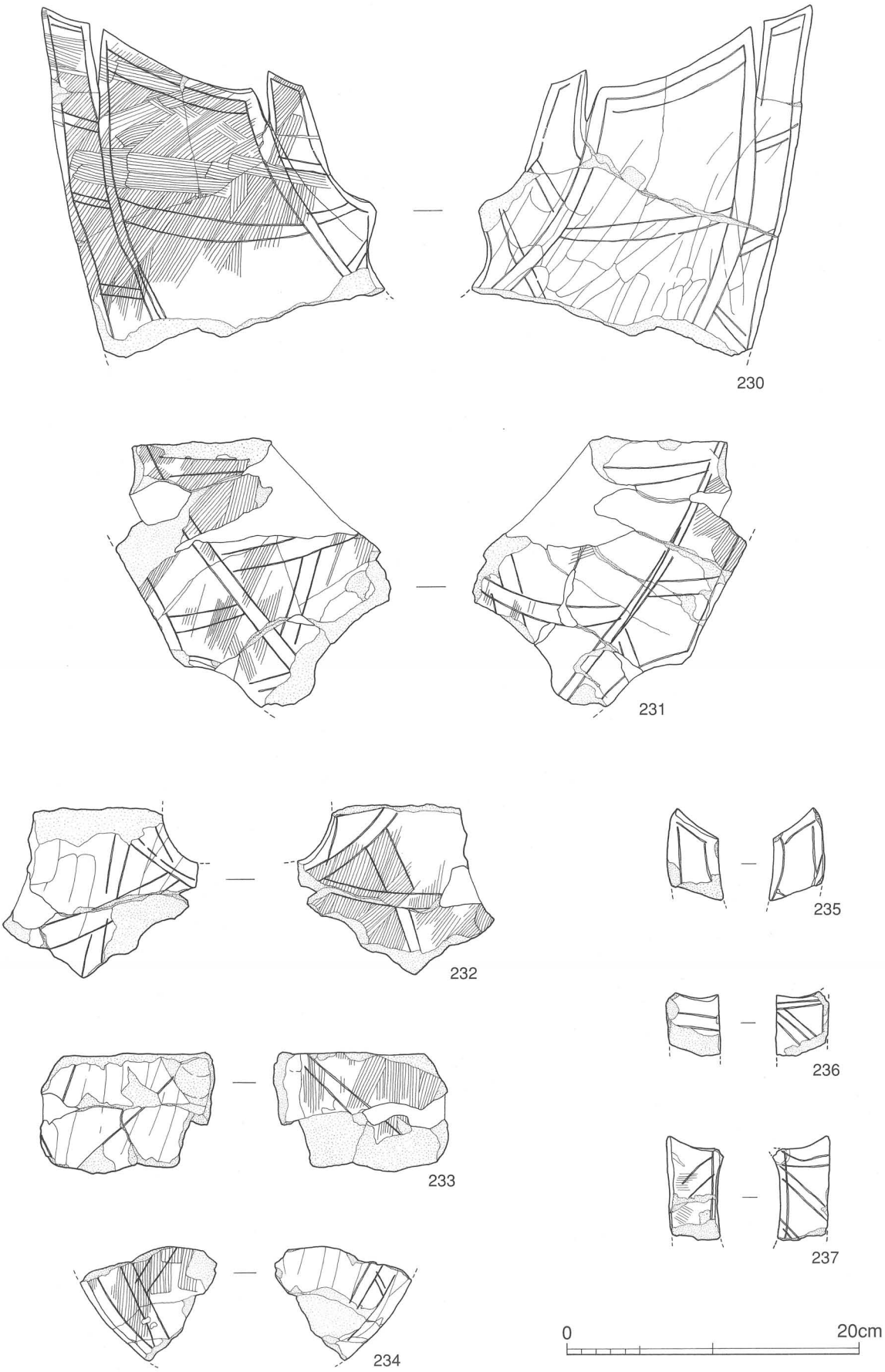
第27図　蓋形埴輪実測図①（S＝1／4）

れる基本的な形態や各施文帯内に弧線を充填する施文方法では立飾り①と共通する。ただし、内側の鰭が本体の高い位置に付くことや、本体の施文帯に充填された２本の並行する弧線から方向を違える２条の弧線が枝分かれ状に付加されている（231・232参照）点が立飾り①とは異なる。230は飾り板上半部、231は下半部外側、232は交差する基部付近、233は中央の接合部付近、234は皿形部との接合部付近、235は内側の鰭上端部、236・237は外側の鰭上端部の破片である。236・237は表裏の施文が異なっている。

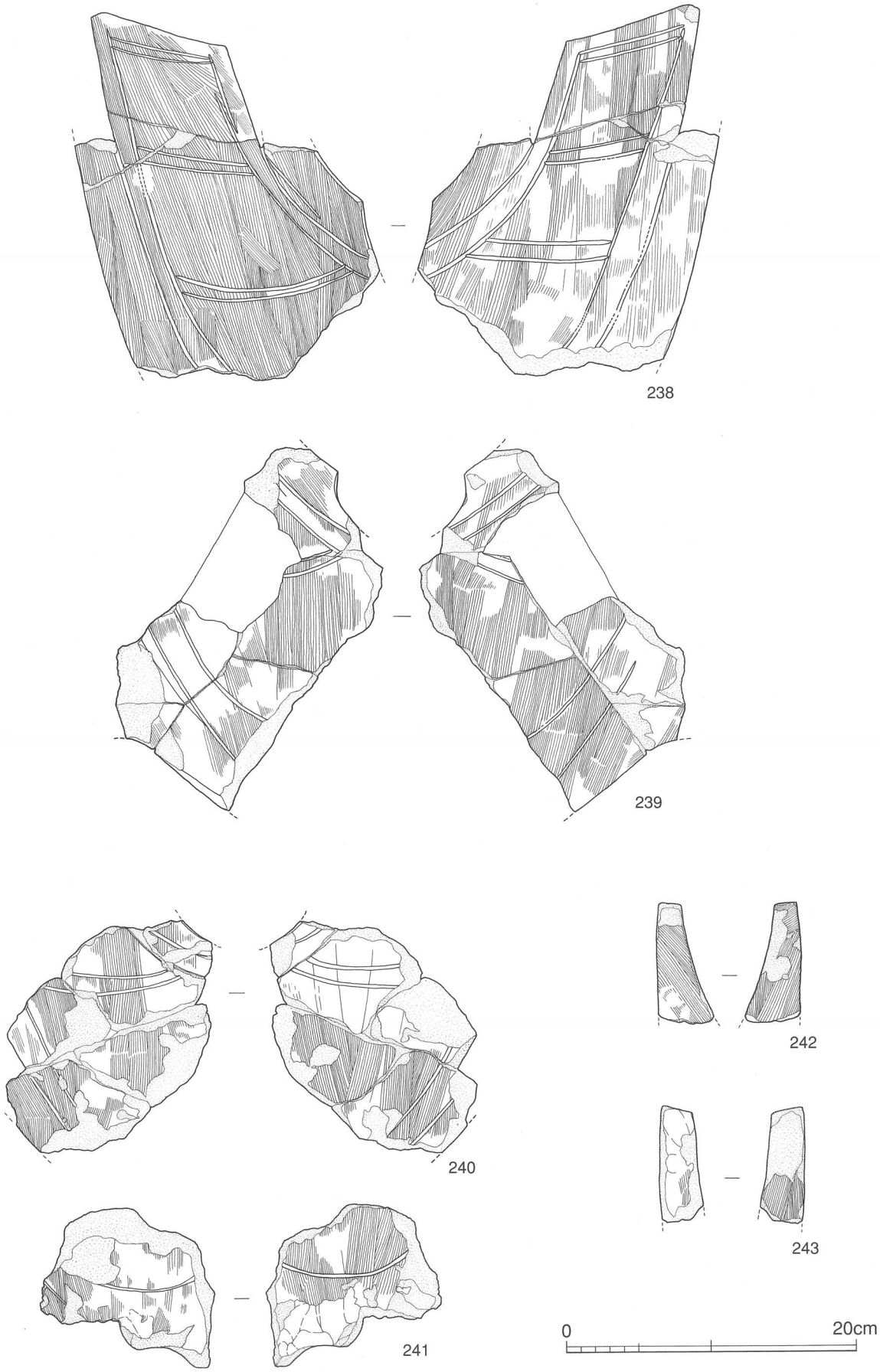
238～243は同一個体（以下、立飾り③）とみられ、墳丘２段目南西側及び南東側斜面を中心に出土している。焼成は良好で色調は浅黄橙色～にぶい黄橙色を呈し、砂粒を少量含む。器面には比較的安定した縦～斜め方向の荒いハケメ調整がみられる。器面の多くに赤色顔料が残存していることから、本来は全面に塗布されていたと考えられる。立飾り②と同様に飾り板部分のみで、切り込み及び沈線によって本体、内側の鰭、外側の鰭に分割される基本的な形態は立飾り①・②と共通するが、内外の鰭には施文が見られない点で大きく異なる。238は飾り板上半部の破片で、内外の鰭上端を欠く。239・240は中位～下位、241は軸部の皿形部との接合部分、242は内側の鰭先端部、243は外側の鰭先端部の破片とみられる。

244・245は表裏で施文が異なる立飾り本体の破片とみられる。焼成や色調は立飾り①に類似するが、施文及び出土地点の相異から別個体の可能性が考えられる。246～248は軸部の破片である。246は、墳丘南東側１段目テラス中央付近から東コーナー付近で出土した軸部先端付近の破片で、復元径９㎝である。外面には細かなハケメ及び丁寧なナデ調整、内面には指押さえ痕を残す。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が灰褐色を呈している。247・248は外面のハケメ調整の類似やともに墳丘南西側周溝から出土しており、同一個体とみられる。また、247の皿状部の内外面には赤色顔料が塗布されており、立飾り③と同一個体の可能性が高い。

249～259（第30、31図）は笠部（軸受部、台部を含む）の破片である249・250は軸受部口縁の破片で、ともに外面に粘土を貼り付け肥厚させている。251は軸受部下端突帯付近の破片である。252は同一個体と考えられる破片によって復元した軸受部～笠部である。ただし、出土地点が墳丘２段目南東側斜面と北東側斜面に大きく分かれて分布していることから、別個体を合成している可能性もある。焼成は良好で砂粒を含み、色調は浅黄橙色～にぶい黄橙色を呈する。器面は風化が激しい部分が多いが、笠部外面は横方向のハケメ、笠部内面及び台部の内外面はナデ調整で、赤色顔料の塗布は認められない。接合していない破片からの復元であるため正確性を欠くが、軸受部径14.4㎝、笠部先端径67.6㎝に復元された。軸受け部口縁は粘土を貼り付けて肥厚させ、軸受部下端突帯は笠部上端に扁平に張り付く。笠部は中央に幅４㎝の突帯が全周し、上半部は無文、下半部には３本を一組とする放射状の沈線と笠部先端に沿った１条の沈線がみられる。253・254は同一個体とみられる笠部先端付近の破片である。焼成は良好で砂粒を少量含み、色調は浅黄橙色を呈する。ともに内外面ナデ調整で笠部先端に沿った沈線がみられ、254には２条の右下がりの沈線もみられる。255は墳頂平坦面北東側の円筒埴輪列中央付近から出土した笠下半部の破片である。焼成や色調は252に類似するが、沈線が細く深いことから施文の際に刀子等の鋭い工具が使用されたとみられ、別個体と考えられる。256は同一個体と考えられる破片によって復元した軸受部～笠部である。



第28図　蓋形埴輪実測図②（S＝1／4）



第29図　蓋形埴輪実測図③（S＝1／4）

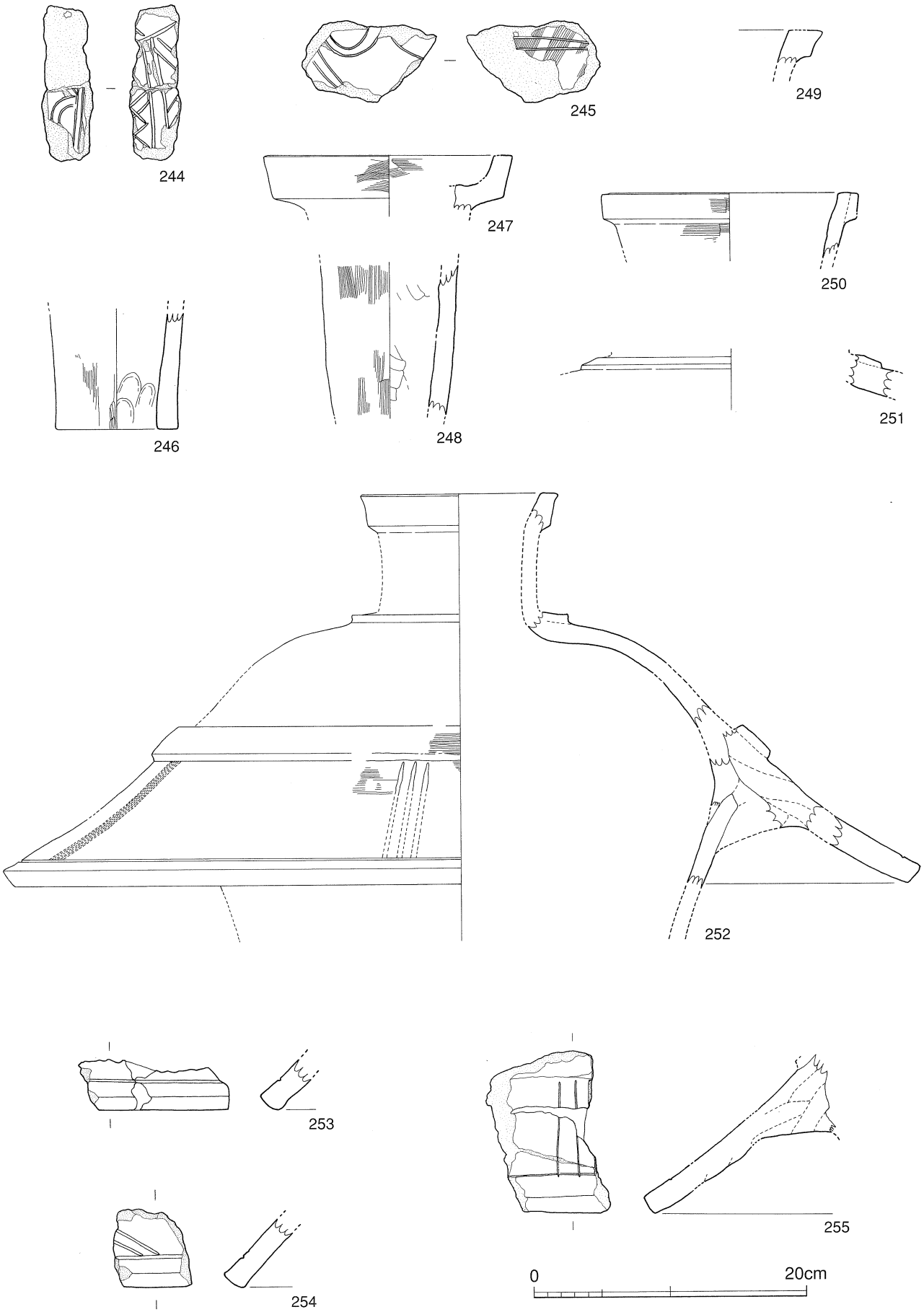
出土地点は、墳丘２段目南西側斜面から北西側斜面にかけて分布していた。焼成は良好で砂粒を少量含み、色調は浅黄橙色～にぶい橙色を呈する。器面は横方向のハケメ調整が施されていたとみられ、外面の大部分には赤色顔料の痕跡を残すことから、本来は外面全体に塗布されていたと考えられる。笠部内面及び台部の内外面はナデ調整である。252と同様に不安を覚えるが、復元した法量は、軸受部径16.4cm、笠部先端径76.8cmである。全体的な器形や施文の特徴は252に共通するが、こちらの個体の方が器壁が厚く、復元径もやや大きい。257も同一個体と考えられる破片によって復元した軸受部～笠部である。破片数自体少ないが、墳丘２段目南西側斜面の南寄りの地点から集中的に出土している。焼成は良好で砂粒少量を含み、色調は浅黄橙色～にぶい黄橙色を呈する。笠部外面には横方向のハケメ調整が施されていたとみられ、一部赤色顔料が遺存することから、本来は全面に顔料の塗布が施されていたと考えられる。笠部内面及び台部の内外面はナデ調整である。この個体も自信を欠くが、笠部先端径71cmに復元される。軸受部下端及び笠部中位に突帯が廻り、笠部先端にも粘土を貼り付けて肥厚させている。笠上半部は無文だが、笠下半部には４条の放射状沈線がみられ、その外側に「ハ」の字状に延びる２条の沈線が施されている。258は笠部先端付近の破片で、墳頂平坦面北東側円筒埴輪列中央部付近から出土している。焼成は良好で砂粒を含み、色調はにぶい黄橙色を呈する。笠部外面には横方向のハケメ、内面はナデ調整が施されており、赤色顔料の塗布はみられない。施文は３本を一組とする放射状の沈線と笠部先端に沿った１条の沈線がみられ、254・257以外の笠下半部と共通する。先端部付近のみの破片だが1／4程度遺存し、その径は52.4cmに復元される。251・256・257と比較するとひとまわり小さい。また、この復元値は整理報告に提示されている笠部と近似しすることから、同一個体の可能性が高い。259は形状等が258に類似した破片だが、色調は黄灰色を呈し、外面に粗いハケメ調整が施されていることから、別個体の可能性があるためここに挙げた。

（４）壺形埴輪

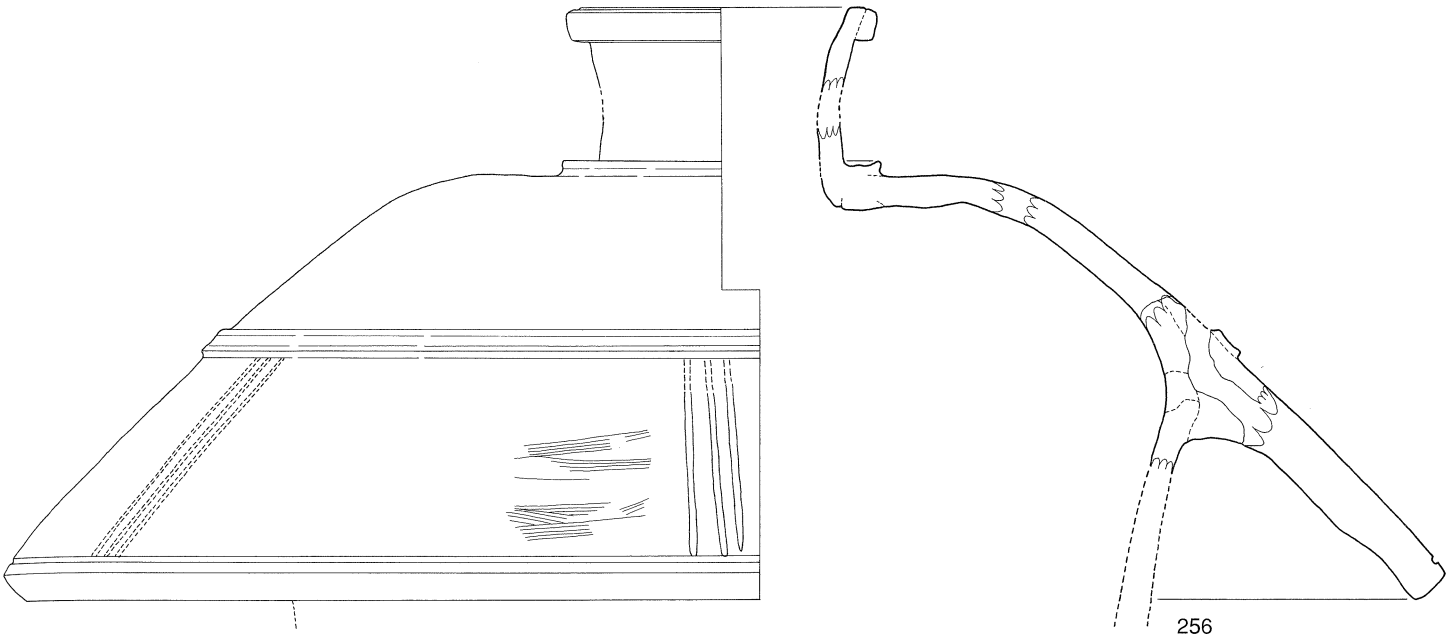
出土状況

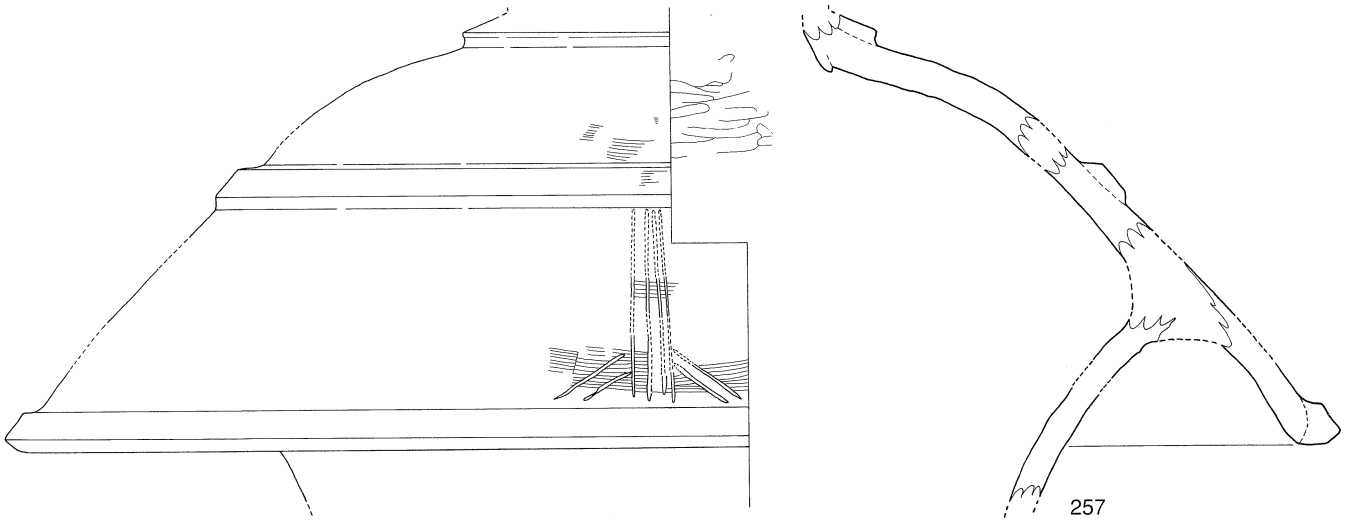
調査報告、整理報告では全く記述がみられない。今回の資料整理に伴い京大所蔵資料を実見したところ、少量の破片は含まれていたものの、壺形埴輪の大半は、今回の調査で出土したといえる。

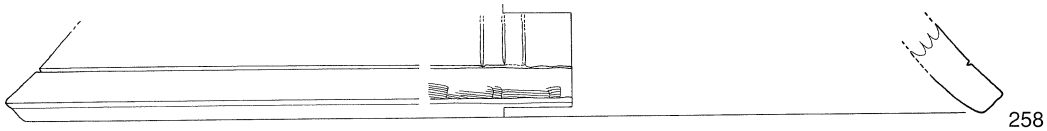
第32図は今回の調査における壺形埴輪の出土状況である。各個体の出土地点は他の器財埴輪に比べて集中する傾向が伺われ、一部の個体については原位置の推定が可能である。260は墳丘１段目北東側テラスの中央からやや東側において、底部から口縁部まで接合する一連の破片が円筒埴輪列から墳丘側へ横倒しとなった状態で出土した（第33図）。鍔状突帯より下方には第18図135と同一個体とみられる円筒埴輪口縁部～３段目の破片が下敷きとなって出土したことから、260は墳丘１段目テラスを廻る円筒埴輪の上に載せた状態で使用されていたと考えられる。また、264や279は墳頂平坦面上からまとまった破片が出土しており、墳頂平坦面上に原位置を持つ壺形埴輪が存在することも明らかである。

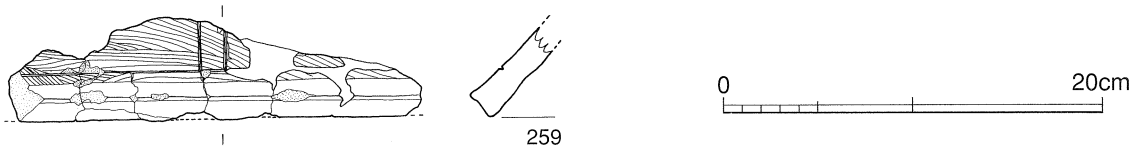


第30図　蓋形埴輪実測図④（S＝1／4）









第31図　蓋形埴輪実測図⑤（S＝1／4）

壺形埴輪の特徴

本古墳から出土した壺形埴輪は少なくとも15個体以上あり、細部については個体差が大きい。第34・35図には、接合しないが同一個体と考えられる破片で合成復元したもの（261、263～267、276～277）があり、特に266・267はの復元に用いた破片は出土地点が離れていることから、別個体の破片を合成した可能性もある。全形が復元（推定）される個体をみると、口縁部下端と頸部下端に突帯が廻る複合口縁形で、肩部と円筒部の境に鍔状突帯が廻り、円筒部の対向する位置に円形の透かしが施された基本的な形状は共通している。以下、各部位ごとに特徴を述べる。

口縁部は外反し、口唇部がナデ調整によって平坦もしくは中央がやや窪んだ面を成すものが多い。この口唇部の面は、垂直に近いもの（264、265、266、271）、下端が外方へ張り出し内側へ傾くもの（263、267、268）がある。

口縁部下端突帯は頸部先端が擬口縁となり、口縁部と接合される部分の外面に貼り付けられたもので、断面が台形となるもの（263、264、265、266、267）が多い。260は突帯の上端、261は下端が張り出し、260は断面が三角形状を呈している。

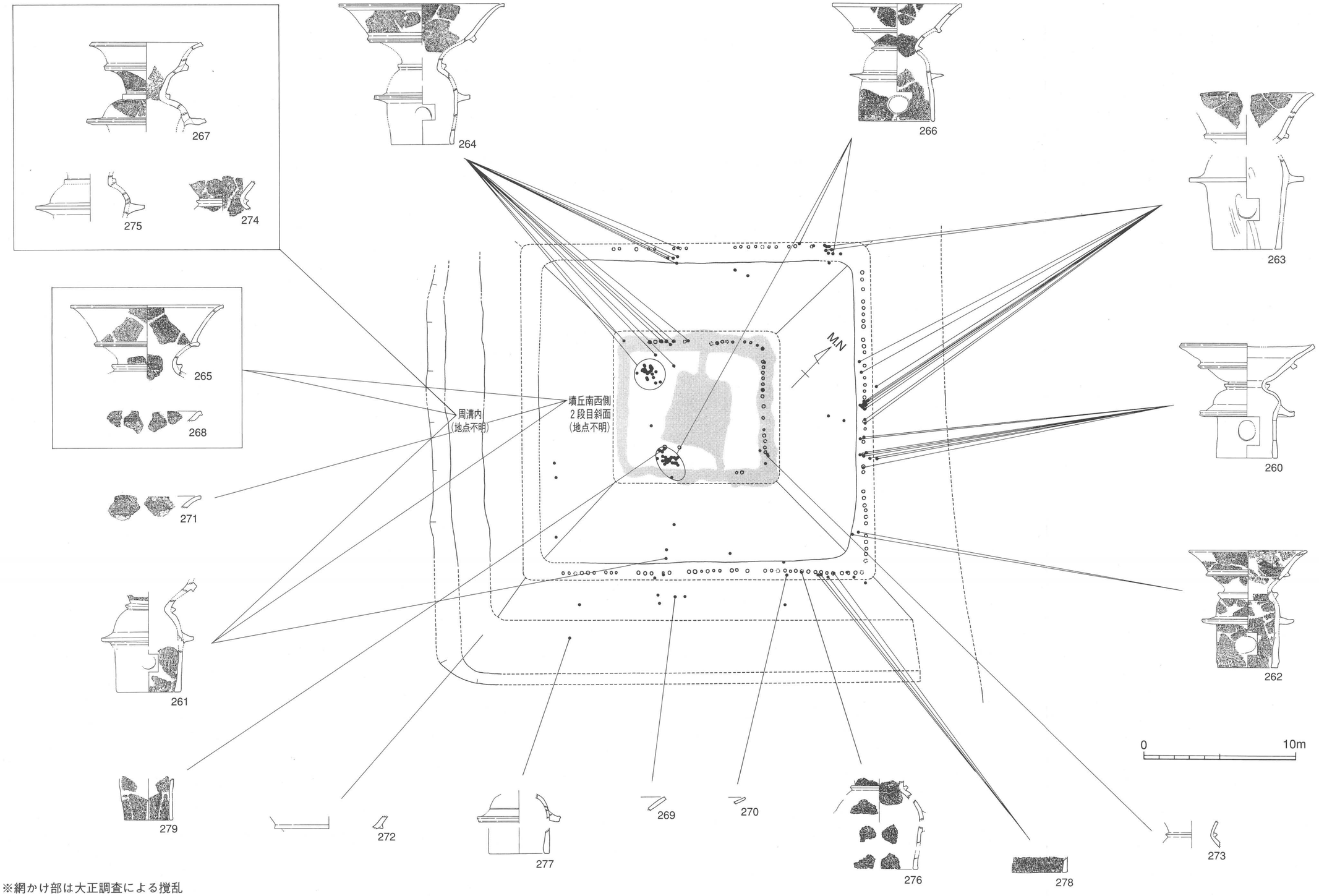
頸部突帯は、断面三角形状を呈するものが多く、先端部が丸みを帯びるもの（261、262、263、273）、尖るもの（260、266、274）がある。267・275は先端が肩部から垂直に立ち上がり、階段状の外観を呈する。264・276は先端に面を有し、断面が台形状である。

鍔状突帯には、断面が三角形状のもの（266）、台形状のもの（261、263、264、275）、先端付近で上方へやや屈曲するもの（260、262、267、277）がある。先端付近で上方へやや屈曲するものについては、先端部の上端が張り出すもの（260、277）、下端が張り出すもの（267）、丸く収めるもの（262）がみられる。

円筒部は底径が20cm前後で比較的安定しているが、基底から鍔状突帯までの高さが15cm前後のもの（260、261、262、266）と20cm程度のもの（263）がある。遺存状態の良い円筒部の破片には基底と鍔状突帯の中程からやや上方に円形の透孔がみられるが、266のみ透孔が基底側へ寄っている。

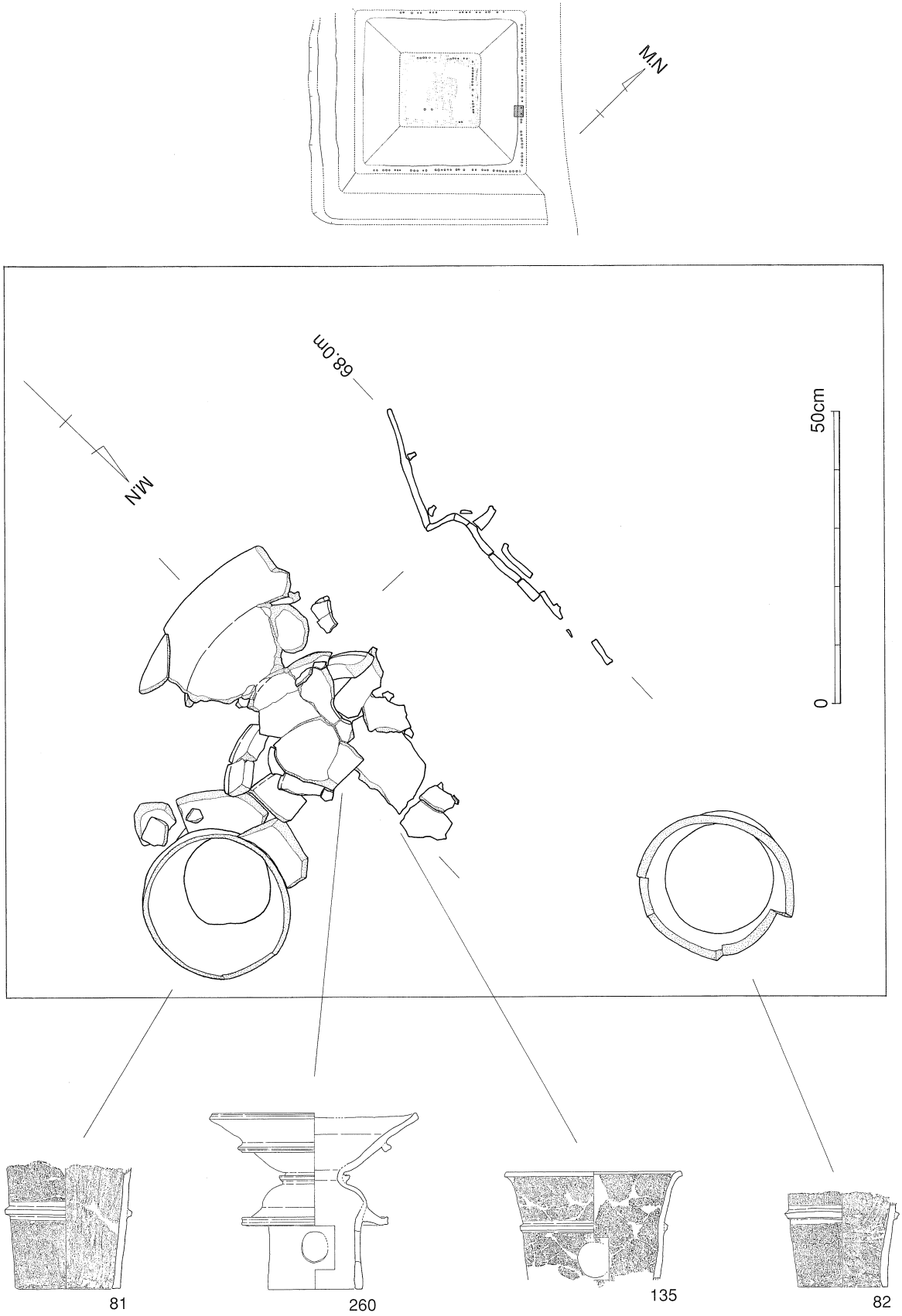
第３節　その他の遺物

埴輪以外の出土遺物として、総数約200点程の土器片等が出土している。この中には墳丘盛土内の混入と考えられる縄文土器片（桑ノ丸式）１点や数点の古代～中世の遺物がみられる以外、殆どが古墳時代の土師器片である。土師器の器種には甕、壺、高坏があり、壺と高坏が甕よりやや多く出土しているように思われる。また、京都大学に所蔵されている大正調査資料にも少量の土師器片が含まれていたが、同調査報告では、墳頂平坦面中央付近で検出された家形埴輪の下約2.4m付近で素焼き土器の破片１点が出土したとの記述があるのみで、出土状況の詳細は不明である。今回の調査における埴輪以外の遺物出土状況は、墳頂平坦面中央の大正調査による攪乱坑及び墳丘南西側周溝内にやや出土が集中するが、出土総量自体が少なく、原位置に近い出土状況として捉えられるものはなかった。以下、３点のみ報告する（第35図280～282）。

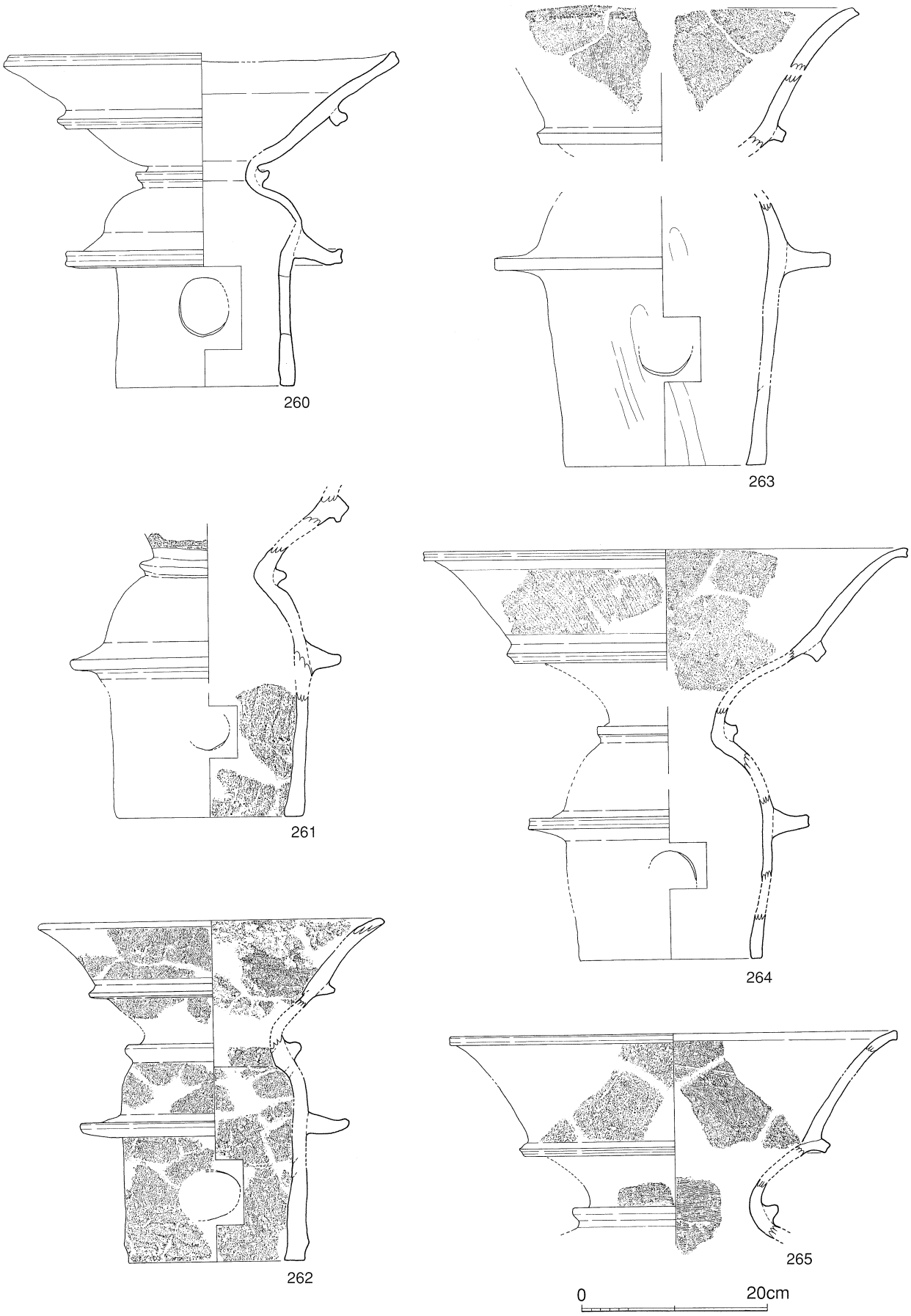


※網かけ部は大正調査による撹乱

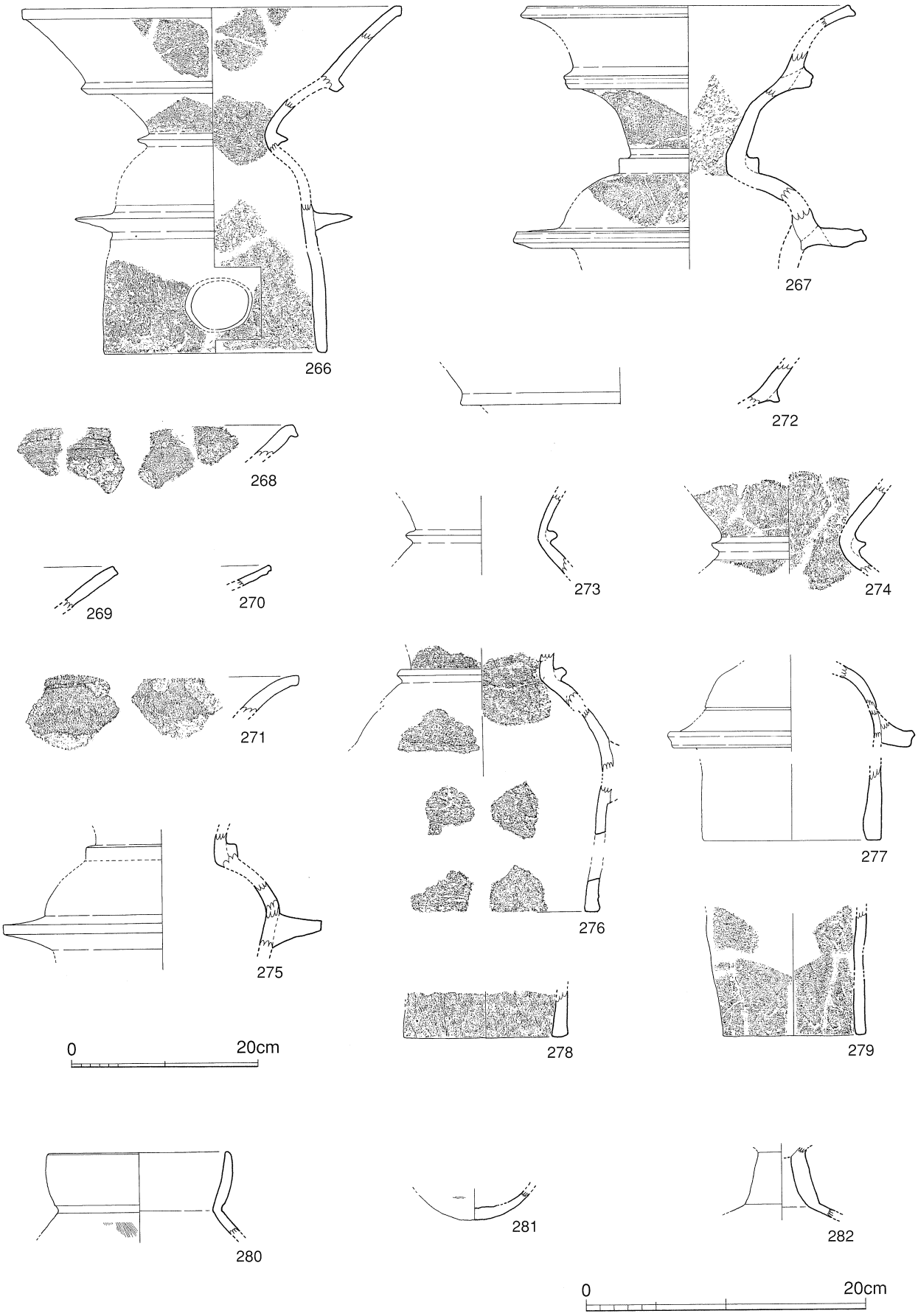
第32図　壺形埴輪出土状況①（S＝1／250）



第33図　壺形埴輪出土状況②（S＝1／10）



第34図　壺形埴輪実測図①（S＝1／6）



第35図　壺形埴輪実測図②（S＝1／6）及び土器実測図（S＝1／4）

280は墳丘南西側周溝埋土中から出土した小型壺の口縁部～頸部付近の破片で、復元口径は12.8cmを測る。頸部内面は稜をもって屈曲し、外面は凹線状に窪む。口縁部は頸部から直上方向にやや内湾気味に立ち上がり、口唇部は丸みを帯びる。器面調整は、口縁部は内外面ともにナデ、胴部の内面は指押さえ、外面は縦方向のハケメ調整である。281は墳丘南東側１段目テラス付近で出土した小型壺の底部片である。丸底を呈し、底部内面の中央には粘土の絞り状の痕跡が見られる。内外面共に風化が激しいが、外面はヘラミガキもしくは丁寧なナデ調整とみられる。282は墳丘南西側周溝埋土中から出土した高坏の脚柱部～裾部である。全体的な器形は不明だが、脚柱部の高さが3.5cm程度と低いことから、比較的小型の高坏であったとみられる。脚柱部と坏部の接合部分はへそ状に充填された粘土がきれいに外れており、脚柱部～裾部へは内外面ともに稜をもって屈曲する。器面は内外面ともに風化が激しいが、脚柱部内面には粘土の絞り痕跡が明瞭に残り、外面はヘラミガキ調整が施されていたと考えられる。

第Ⅵ章　おわりに

第１節　墳丘について

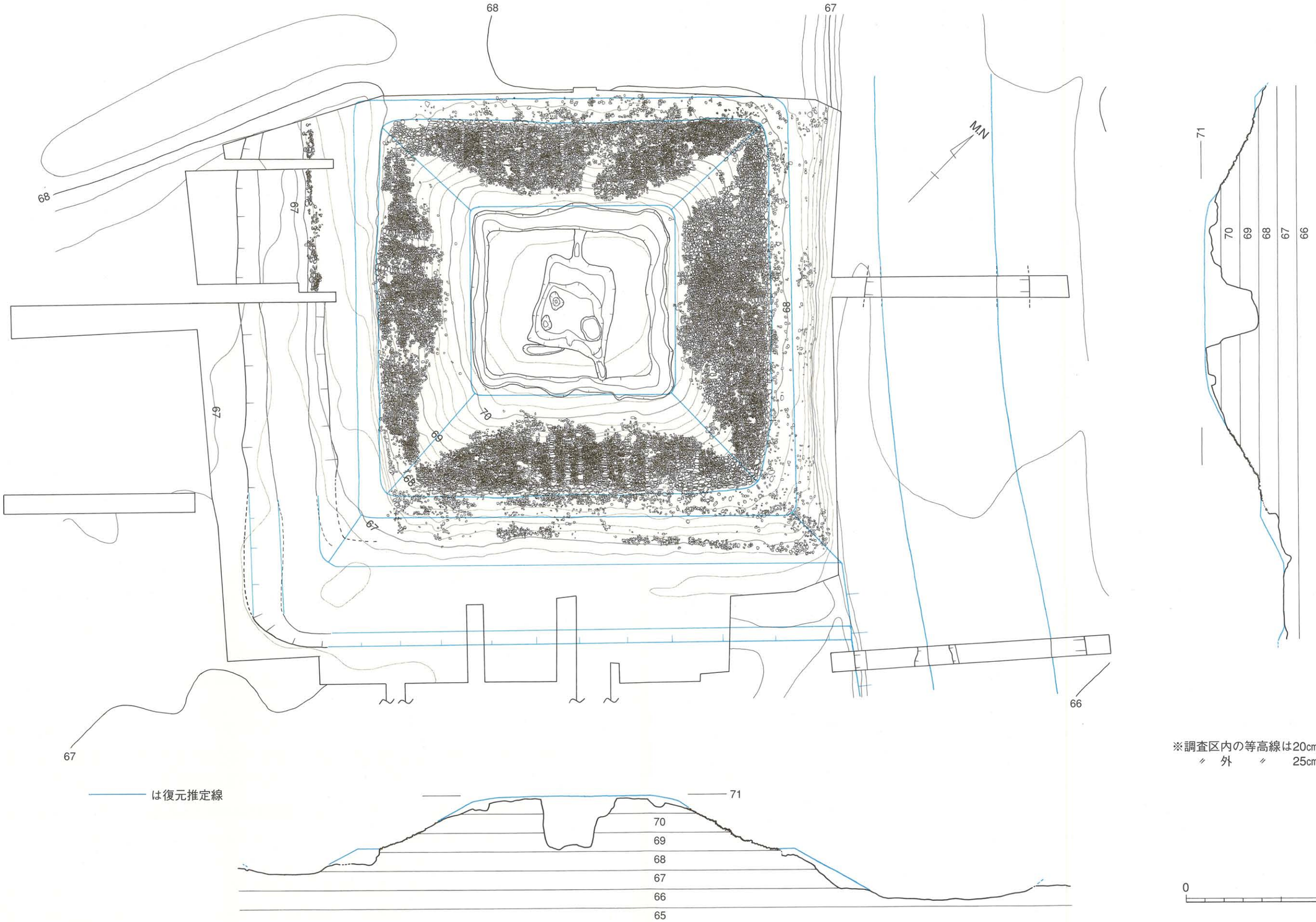
墳丘については第１分冊において報告しているため詳述はしないが、以下の諸点について簡単にまとめておく。

（形状と規模）

第36図は第１分冊第14図に復元推定線（青線）を加えたものである。

墳丘２段目は比較的遺存状況が良かったため、在る程度の推定復元が可能である。頂平坦面は葺石が遺存する斜面の傾斜及び埴輪列の状況から北西・南東が11m、北東・南西が10mのやや長方形に復元される。墳丘２段目基底部は基底石列（根石）の状況から１辺20.8m前後のほぼ正方形に復元される。

墳丘１段目については遺存状態が悪いため推定が困難であるが、１段目テラスは埴輪列の状況や１段目各斜面の状況から、幅1.2mに復元している。南西側では葺石の状況より周溝墳丘側基底が１段目の墳端と判断されることから、この延長線と復元されたテラスを結んでみるとさほど違和感無く復元できる。北東側には女狭穂塚の周溝が廻っており、この周溝と171号墳の間にはテラス状の平坦面がみられた。しかし、このテラスは後世の削平によるものと考えられたことから、本来、女狭穂塚周溝の171号側斜面は段差無く171号に接続していたと判断される。したがって、171号墳の１段目北東側墳端は女狭穂塚周溝の外側基底と考えられる。この推定が正しければ、調査時の主軸トレンチにおける１段目墳丘の南西側基底～北西側基底は30.3mに復元される。南東側は南西側で検出された周溝の状況から復元しているが、北西側が未調査であるために規模を復元できない。



※調査区内の等高線は20cm間隔
〃 外 〃 25cm 〃

第36図　171号墳墳丘復元想定図（S＝1／200）

（葺石）

１段目及び２段目の斜面で確認され、基底石（根石）と区画石列を供えていた。葺石に使用されている礫は10～20㎝前後のやや扁平なものを主体とするが、基底石及び区画石列には30～50㎝の大きな礫が使用されていた。区画石列は間隔にばらつきがあるもののほぼ全面にみられ、２段目斜面では各コーナーの稜線でも確認された。基底石は礫の長軸を横位に配し、基本的には一重だが、二重となる部分もみられた。２段目に比して１段目の遺存状態が悪かったが、このことは墳丘２段目が盛土整形であったのに対して１段目が地山削出し整形であったことに起因するとみられる。

西都原古墳群では、近年の史蹟整備事業に際して数基（13、100、173、169号）古墳が調査されているが、基底石や区画石列を有する基本的な構造は共通している。

なお、今回の調査で出土した転落した葺石は、調査で掘削したトレンチ内にまとめて埋め戻し、現地保存している。

（周溝）

墳丘の南西側で幅4.5m深さ40㎝程度の浅い周溝が確認された。墳丘南東側は削平、北西側は未調査のため確認できなかった。墳丘北西側では女狭穂塚の周溝が確認されており、前述したとおり周溝を共有する。しかし、周溝基底のレベルが1.3m程異なる点には注意を要する。

第２節　埴輪について

・円筒埴輪

今回出土した円筒埴輪の外面調整には、ヨコハケ調整が施されものが一定量含まれており、その大半はいわゆるＢ種ヨコハケ(6)といわれるものである。更に、先行研究(7)の分類に従えば、Ba種、Bb種の範疇に含まれると考えられ、Bc種は認められない。法量では、底部高が15㎝前後、突帯間が12㎝前後を計るものが多く、Ｂ種ヨコハケの採用とともに、川西編年Ⅲ期の古市タイプの円筒埴輪に類似した特徴を有する。

第38図及び第11表に宮崎県における埴輪出土古墳をまとめているが、定形化した円筒埴輪が初めて導入されるのは本古墳及び周辺の４基（男狭穂塚、女狭穂塚、169号墳、170号墳）である。

・器財埴輪

器財埴輪は平成14年度に京大所蔵資料と今回出土資料を整理する機会を得られたが、残念ながら接合及び実測を行うことはできなかった。

第37図は、その際の所見を基に作成した**家形埴輪**の復元模式図である。あくまでも模式図であり、全体的な形状や細部の特徴は、今後再整理する機会があれば変更される可能性が高い。

第37図上は家形埴輪①の復元模式図である。屋根は入母屋造で、押縁で３つに区画された上屋根には2.6㎝の方眼を基本として同一方向の線刻を２個連続させる網代表現がみられる。この網代は横方向網代にのみ赤色顔料が塗布され、３区画で独立した重圏菱形文を形成している。破風板頂部の下面には棟木を表現した粘土塊が貼り付けられている。下屋根はハケメ調整で、下端に突帯が

廻る。壁体もハケメ調整で、基部との境界に直線的に外方へ延びる袖廻り突帯がみられる。また、平側の１面には窓と入り口が開口し、窓の上には粘土による立体的な庇が存在したようである。基部には平側で２カ所、妻側で１カ所の半円形のくり込みがみられる。

第37図下は家形埴輪②の復元模式図である。屋根は切妻造で押縁で３つに区画された上半には１辺1.7㎝の方眼を基本として同一方向の線刻を２個連続させる網代表現がみられる。ただし、遺存する破片から網代の配置を復元できなかったため、図では方眼のみ図化している。また、網代を残す破片には赤色顔料の塗布はみられなかった。屋根の下位は無文で、外面にはハケメ調整がみられる破風板頂部下位には中空の棟木表現がみられる。また、屋根の妻側下端付近には先端下位にくり込みがみられる桁材を表現したものが貼り付けられている。平側の壁面には両端と中央にハケメ調整を残す沈線で区画された柱表現がみられ、その間を屋根と同様の網代表現で充足している。この網代表現はそれぞれ独立した重圏菱形文を形成していたとみられ、縦方向の網代に赤色顔料が塗布されている。ただし、図化している平側の面では向かって右半部に窓及び入り口が開口していたと考えられ、その破片をみると横方向の網代に赤色顔料が塗布されている。このことから、平側は２面で異なる方向の網代に赤色顔料を塗布した可能性が高い。妻側では３本の柱表現に加えて桁材間を結ぶ横方向の柱表現がみられ、柱表現以外の壁面全体に網代表現がみられる。横方向の柱表現を境として、下位では中央の柱を介して１つの重圏菱形文を形成し、上位でも独立した重圏菱形文を形成している。ただし、上位では方眼の升目の問題から中心が１列左側へ寄ったかたちに復元される。妻側では、２面とも縦方向の網代に赤色顔料が塗布されている。壁体と基部の境界には鼠返し状に下方へ屈曲した袖廻り突帯がみられる。基部には家形埴輪①と同様、平側で２カ所、妻側で１カ所の半円形のくり込みがみられる。

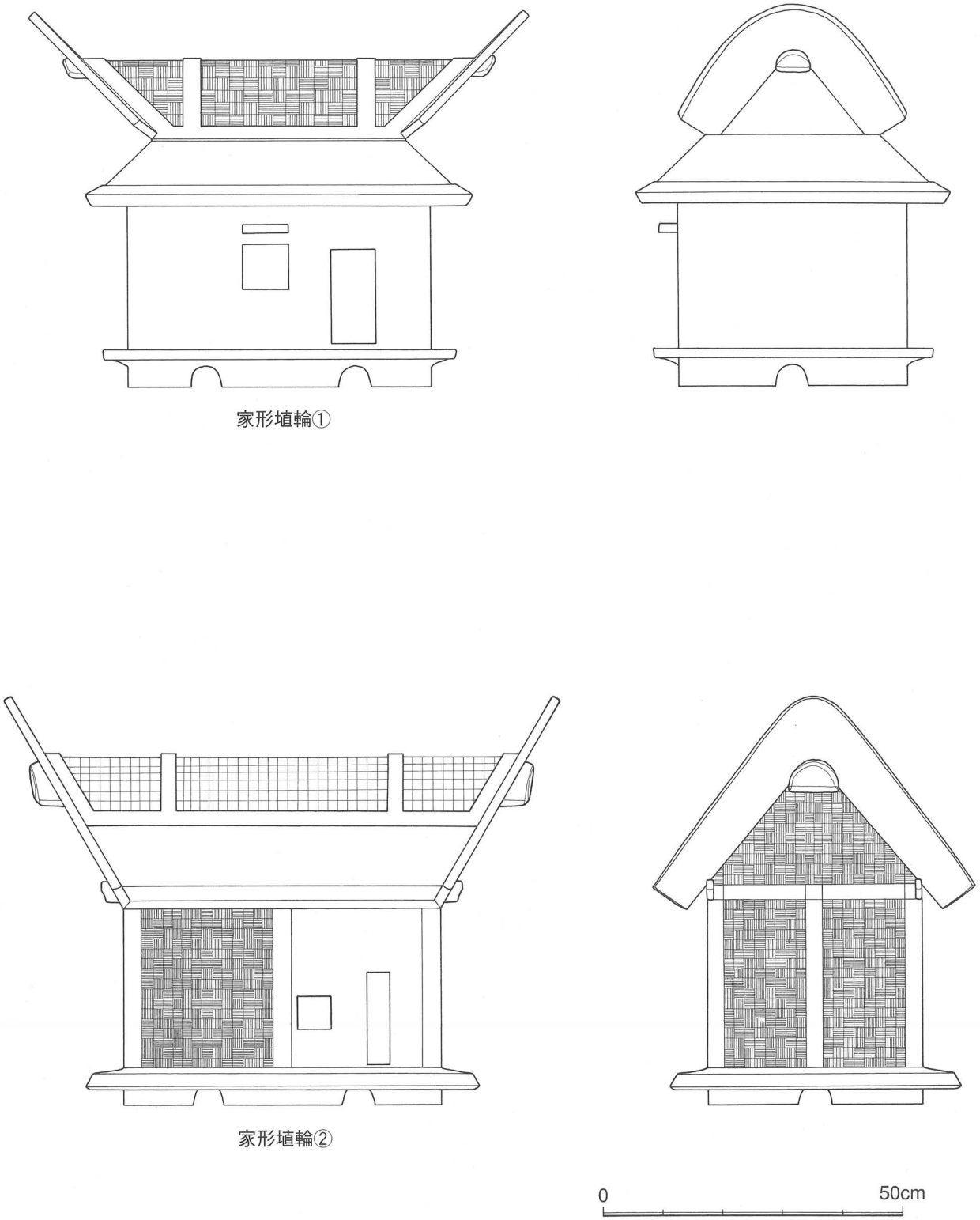
２つの家形埴輪にみられる特殊な赤色顔料の塗彩方法は、整理報告において土師の里遺跡出土品との関連を想定されている。

短甲形埴輪は２個体確認された。２個体ともに短甲部から草摺部まで一体成形されており、草摺部の表現も横方向につながる革帯のなごりは見られず、かなり抽象化が進んでいる。ちなみに、223の草摺は整理報告の図４の１・２ と同一個体とみられるが、草摺の最上段には縦線帯が及ばないことから、その点について整理報告の復元を修正する必要がある。また、整理報告の図４の１で復元されている短甲形埴輪の前胴部上端の破片を実見したところ今回出土の短甲形埴輪①と同一個体であると考えられ、復元は誤りである。

蓋形埴輪は少なくとも４個体以上は存在したと考えられる。

笠部は中位の突帯下が２段に分割されず、３本もしくは４本の放射状沈線が施されている点で共通する。笠部中位の突帯は257がやや高い位置に付くと考えられる以外、台部との接合部付近に取り付くと思われる。軸受け部については口縁部はすべて受け皿状に肥厚するタイプで、軸受け部下端突帯はいずれも笠部天井に取り付くタイプである。これらの特徴は先行研究[8]において時期的な推移を表す要素と考えられており、円筒埴輪の川西編年第Ⅲ期に相当する。なお、257では笠部先端に突帯が廻るが、この特徴は川西編年第Ⅳ期以降に類例がみられるようである[9]。

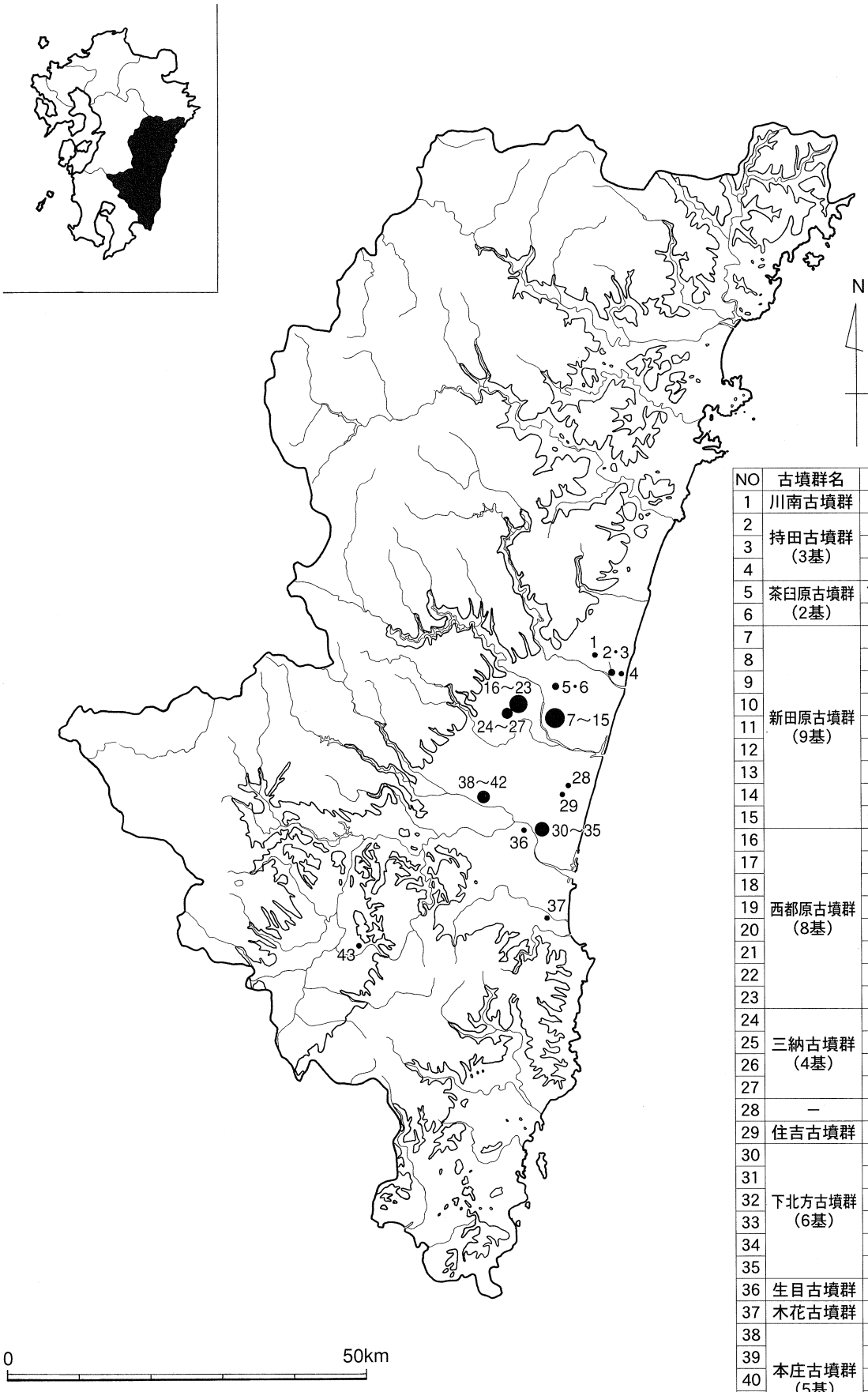
立飾部は個体差が大きいが、飾板最上辺が水平よりも外上方へ延びる点、縦方向の沈線を欠いた



第37図　家形埴輪復元模式図（S＝1／10）

第14表　宮崎県内における埴輪採用古墳一覧

NO	古墳群名	古墳名	地　域	墳　形	規模	調査	埴輪編年	形象埴輪	備　　考
1	川南古墳群	33号	高鍋・川南	前方後円墳	63		Ⅲ	壺	
2	持田古墳群	13号		円　　墳	12		?		
3		34号		円　　墳	60		Ⅳ		周辺からの表採
4		62号		帆立貝式	51		Ⅳ～Ⅴ	家（鰹木のみ）	
5	茶臼原古墳群	1号（児屋根塚）	西都・新富	前方後円墳	108	○	Ⅲ		
6		2号		円　　墳	20		Ⅲ		
7	新田原古墳群	1号		前方後円墳			Ⅴ		
8		10号		前方後円墳	10		Ⅴ		
9		47号（機織塚）		前方後円墳	49		Ⅴ	動物	
10		56号（水神塚）		前方後円墳	49	△	Ⅴ	人物	隣接地の調査
11		58号（百足塚）		前方後円墳	76	○	Ⅴ	家、人物、鹿、鳥、柵	概要報告のみ
12		59号		前方後円墳	71		Ⅴ		
13		61号		円　　墳	10		Ⅴ		
14		62号		円　　墳	10		Ⅴ		
15		92号（大久保塚）		前方後円墳	84		Ⅲ		
16	西都原古墳群	101号		円　　墳			?	壺？	
17		男狭穂塚		帆立貝式	167	△	Ⅲ		宮内庁による局所的調査
18		女狭穂塚		前方後円墳	177	△	Ⅲ	家、盾、蓋、短甲、冑	宮内庁による局所的調査
19		169号		円　　墳	48	○	Ⅲ	家、舟、盾、短甲、壺	
20		170号		円　　墳	45	○	Ⅲ	家	
21		171号		方　　墳	25	○	Ⅲ	家、盾、冑、短甲、蓋、壺	
22		212号		前方後円墳	50		Ⅲ？	家？ほか	
23		寺原古墳		円　　墳	10	○	Ⅲ～Ⅳ	壺？	
24	三納古墳群	松本塚古墳		前方後円墳	104	△	Ⅳ～Ⅴ		隣接地の調査
25		20号		円　　墳	27	△	Ⅳ～Ⅴ		隣接地の調査
26		24号		円　　墳	16	△	Ⅳ～Ⅴ		隣接地の調査
27		25号		円　　墳	11	△	Ⅳ～Ⅴ	家、翳	隣接地の調査
28	－	下那珂馬場古墳	佐土原	前方後円墳	73		Ⅲ		
29	住吉古墳群	1号	宮　崎	前方後円墳	65		Ⅲ		
30	下北方古墳群	1号		前方後円墳	72		Ⅴ		
31		3号		前方後円墳	68		Ⅲ～Ⅳ		
32		5号		円　　墳			?		
33		12号		円　　墳		○	?		未報告
34		13号		前方後円墳	100	○	Ⅴ	人物、動物、盾、舟？	
35		無号（旧2号）		円　　墳	10	○	Ⅴ		
36	生目古墳群	19号（5号）		前方後円墳	60	○			定形化した埴輪ではない
37	木花古墳群	2号		前方後円墳	43		Ⅴ		
38	本庄古墳群	25号（てんの塚）	国　富	前方後円墳	61		Ⅳ		
39		29号（下長塚）		前方後円墳	62		Ⅴ		
40		37号（上長塚）		前方後円墳	76		Ⅳ		
41		39号（丸山塚）		前方後円墳	68		Ⅴ		
42		42号（藤岡山東陵）		前方後円墳	84		Ⅲ～Ⅳ		
43	牧ノ原古墳群	1号	都　城	前方後円墳	50		Ⅴ		



NO	古墳群名	古墳名
1	川南古墳群	33号
2	持田古墳群（3基）	13号
3		34号
4		62号
5	茶臼原古墳群（2基）	1号(児屋根塚)
6		2号
7	新田原古墳群（9基）	1号
8		10号
9		47号(機織塚)
10		56号(水神塚)
11		58号(百足塚)
12		59号
13		61号
14		62号
15		92号(大久保塚)
16	西都原古墳群（8基）	101号
17		男狭穂塚
18		女狭穂塚
19		169号
20		170号
21		171号
22		212号
23		寺原古墳
24	三納古墳群（4基）	松本塚古墳
25		20号
26		24号
27		25号
28	―	下那珂馬場古墳
29	住吉古墳群	1号
30	下北方古墳群（6基）	1号
31		3号
32		5号
33		12号
34		13号
35		無号(旧2号)
36	生目古墳群	19号(5号)
37	木花古墳群	2号
38	本庄古墳群（5基）	25号(てんの塚)
39		29号(下長塚)
40		37号(上長塚)
41		39号(丸山塚)
42		42号(藤岡山東陵)
43	牧ノ原古墳群	1号

第38図　宮崎県内の埴輪出土古墳分布図

２本１組の横方向沈線による紋様構成等の特徴が共通して見られ、笠部の編年観と矛盾しない。

壺形埴輪は少なくとも15個体以上が確認されており、前述したように口縁部中位と頸部に突帯が廻る複合口縁形で肩部と円筒部の境に鍔状突帯が廻り、円筒部の対向する位置に円形の透かしが施された基本的な形状は共通する。169号墳でも同様の壺形埴輪が出土しているが、九州内では他に類例を知らない。類例としては奈良県河合町乙女山古墳例や大阪府藤井寺市野中宮山古墳例等が挙げられ、畿内地域との強い関係を想起させる。また、畿内地域にみられる壺形埴輪の中でも最も新しい一群として捉えられている(10)。

円筒部がやや大型のものと小型のものがみられるが、いずれも円筒埴輪の口径よりも小さく、260にみられた出土状況から、円筒埴輪の上に載せて使用したと考えられる。また、１段目テラス北東側の出土状況から、円筒埴輪10本に１個程度の割合で載せられていた可能性が考えられる。

第３節　まとめ

今回の調査により、周溝を共有して一体化した主墳と陪塚の構造的な関係が確認されたことや埴輪の器種や特徴把握、大正時代の調査成果の再確認（整理報告も含めて）ができたことは大きな成果といえる。出土した埴輪の特徴は円筒・器財ともに川西編年Ⅲ期の範疇に含まれるとみられ、従来いわれてきた編年観になんら変化はない。しかし、筆者の力量不足により、十分に考察することができなかったことは、大変遺憾である。今後報告される169号の報告を待って、再検討したい。

最後に、調査から整理段階において非常に多くの方から有益な御教示いただき、本来、ご芳名を記して謝意を表すところですが、諸般の事情により掲載かないませんことをお詫び申し上げます。

註

(1) 宮　崎　県　1915『宮崎縣兒湯郡西都原古墳調査報告』

(2) 註(1)の中で、各列(西北側以外)の中央部には他よりもやや大きな円筒埴輪が樹立されていたとの記述がみられる。

(3) 高橋克壽　1993「西都原171号墳出土埴輪について」『宮崎県史研究』第７号

(4) 註(3)に同じ

(5) 註(3)に同じ

(6) 川西宏行　1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号　日本考古学協会

(7) 一瀬和夫　1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大水川改修に伴う発掘調査概報』Ⅴ　大阪府教育委員会

(8) 松木武彦　1990「蓋形埴輪の変遷と画期 －畿内を中心として－」『鳥居前古墳 －総括編－ 』大阪大学文学部考古学研究室

(9) 川村紀子　1997「第４節　５世紀代の蓋形埴輪の変遷」『西墓山古墳』藤井寺市文化財報告第16集（古市古墳群の調査研究報告３）　藤井寺市教育委員会

(10) 高井健司　1991「第Ⅲ章第３節　壺形埴輪について」『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ』（市営長吉住宅建設に伴う発掘調査報告書前編）　財団法人大阪市文化財協会

円筒埴輪①（85）

円筒埴輪②（47）

円筒埴輪③（36）

壺形埴輪（260）

図版2

蓋形埴輪①（227）

蓋形埴輪②（238）

蓋形埴輪③（230）

蓋形埴輪④（256）

蓋形埴輪⑤（258）

蓋形埴輪⑥（256）

家形埴輪（193）

短甲形埴輪①（216）

短甲形埴輪②（223）

図版4

1段目テラス円筒埴輪列検出状況①（南東列・北東から）

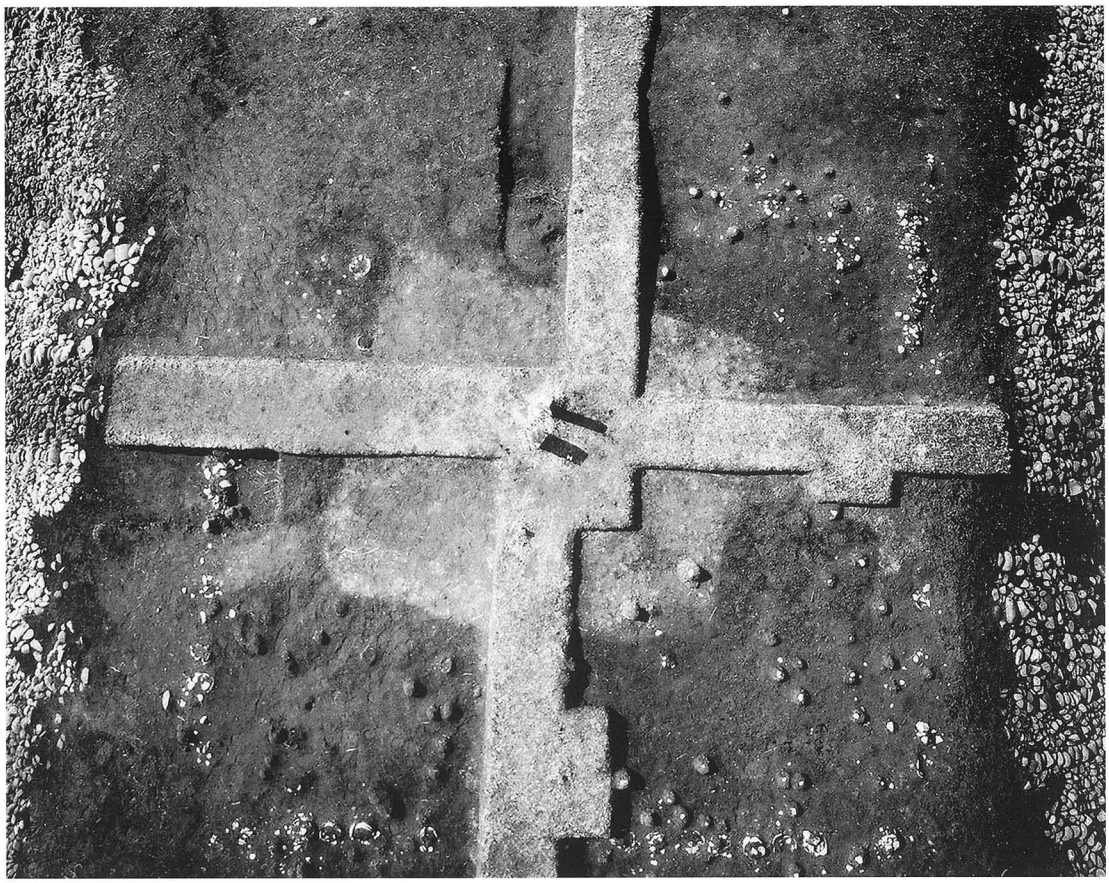
1段目テラス円筒埴輪列検出状況②（東コーナー付近・東から）

1段目テラス円筒埴輪列検出状況③（北東列・東から）

図版6

1段目テラス円筒埴輪列検出状況④（北西列・北から）

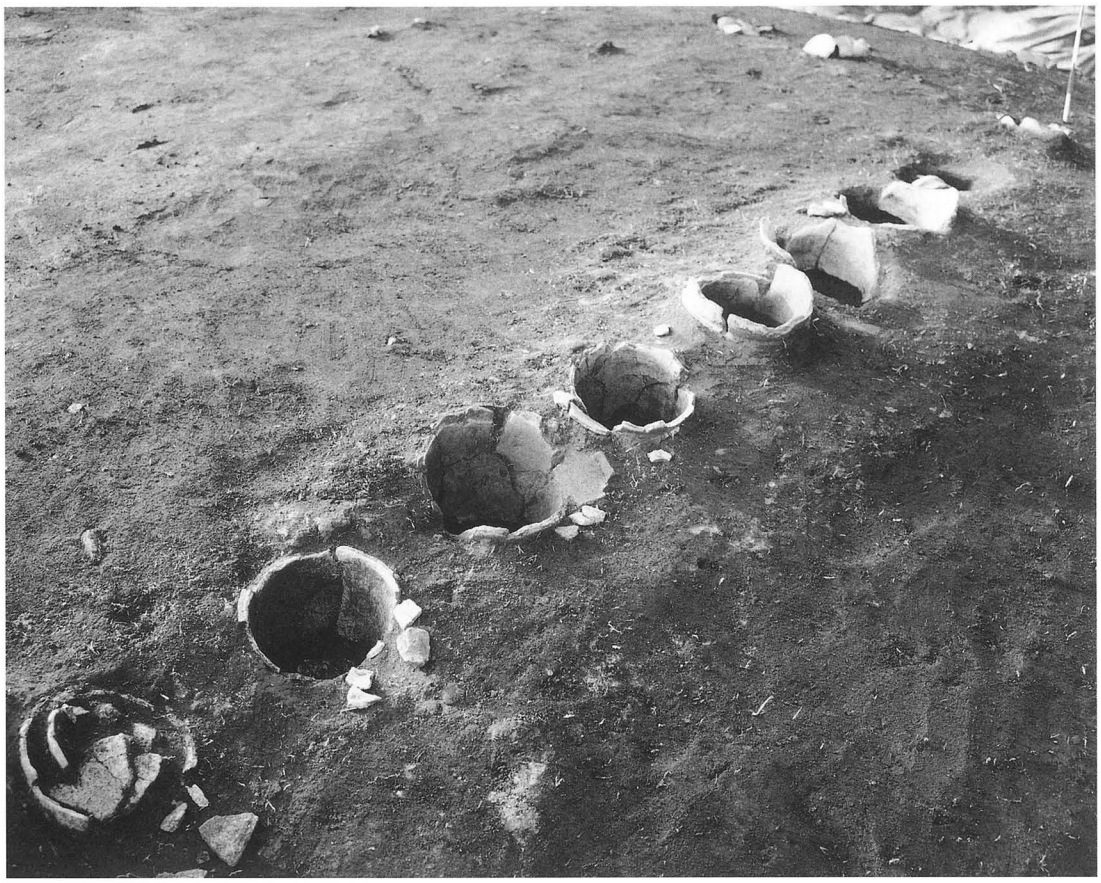
大正攪乱内石碑埋設状況



墳頂部円筒埴輪列検出状況①（上空から）

墳頂部円筒埴輪列検出状況②（北東から）

図版8



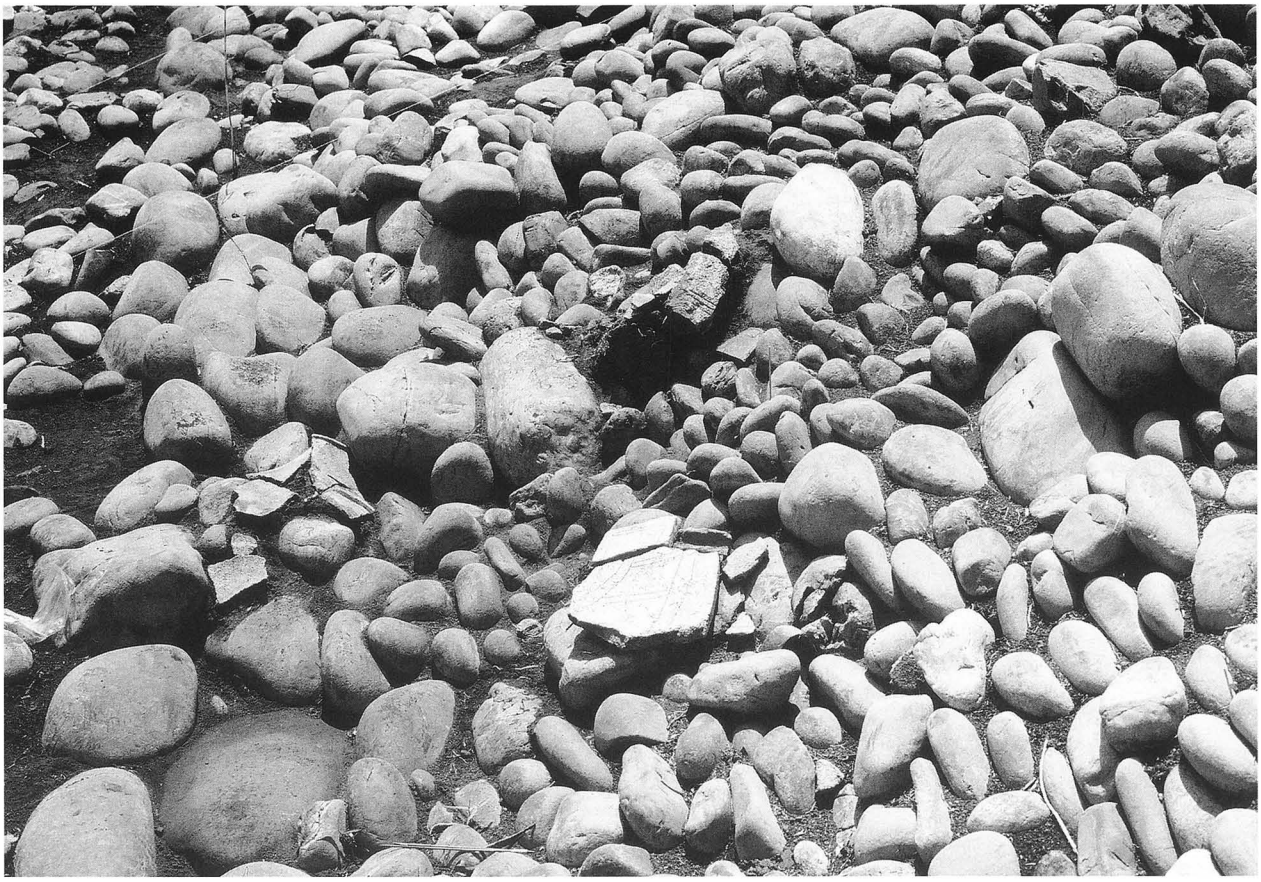
墳頂部円筒埴輪列検出状況③（北東列北半）

墳頂部円筒埴輪列検出状況④（北西列西半）

蓋形埴輪（227）出土状況①

蓋形埴輪（227）出土状況②

図版10



蓋形埴輪（238）出土状況①

蓋形埴輪（238）出土状況②

壺形埴輪（260）出土状況①

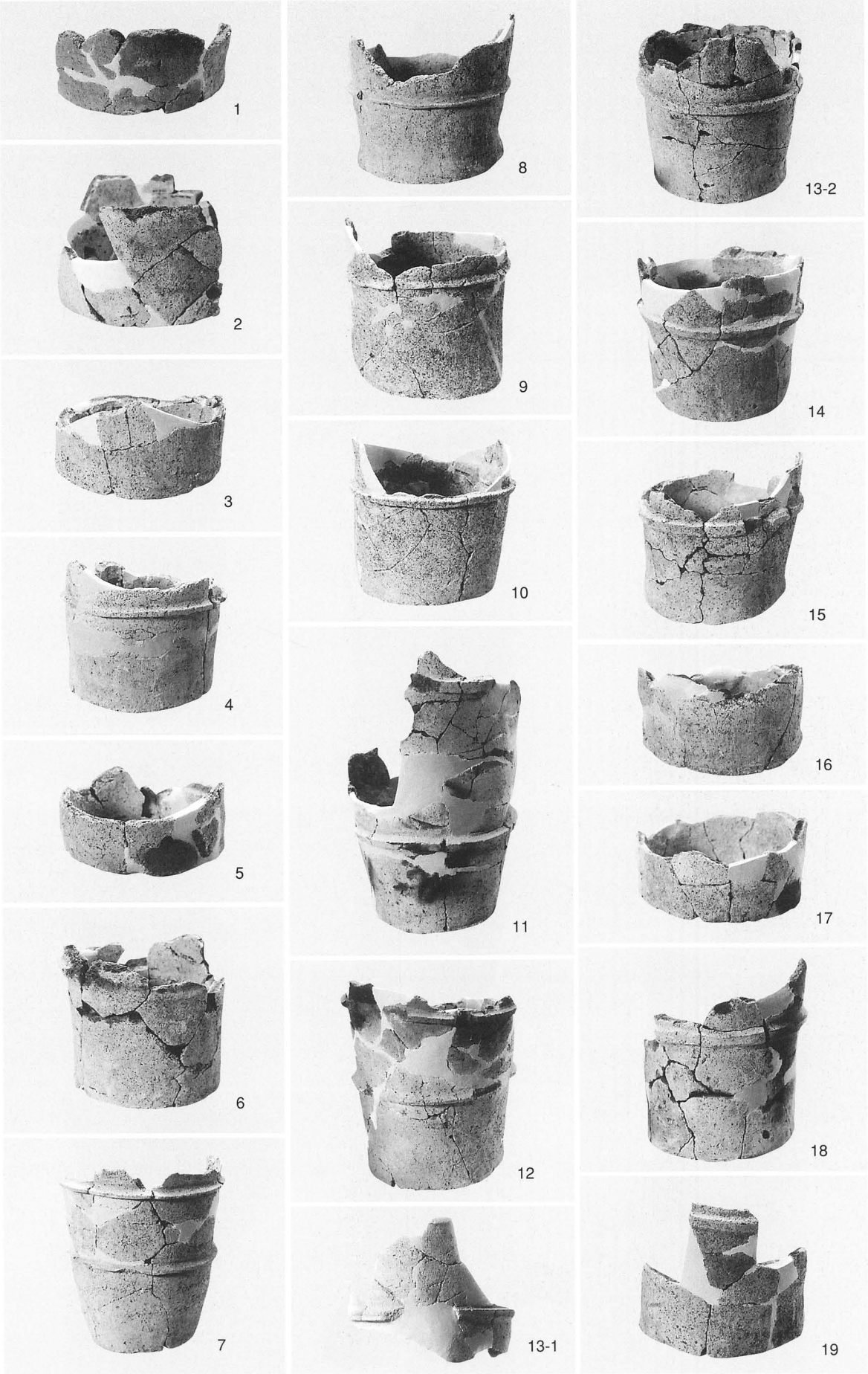
壺形埴輪（260）出土状況②

図版12

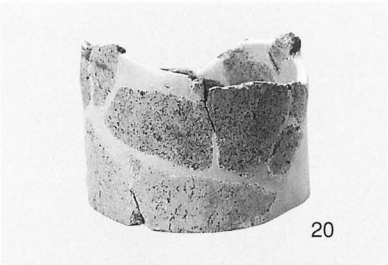
壺形埴輪（262）出土状況①（北東から）

壺形埴輪（262）出土状況②（上から）

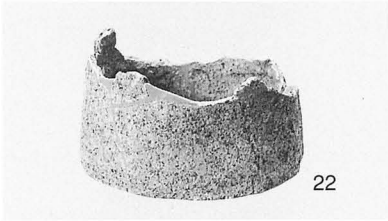
図版13



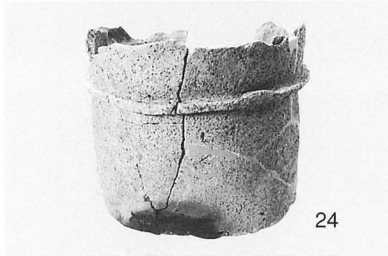
図版14

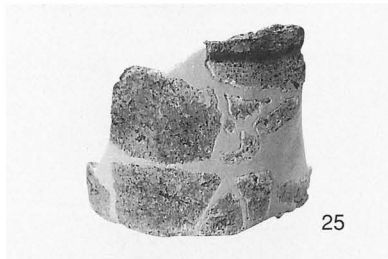

20

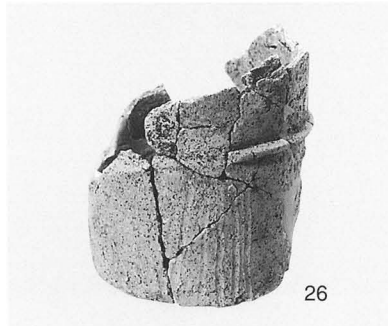
21


22

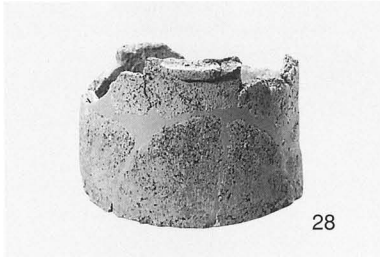
23

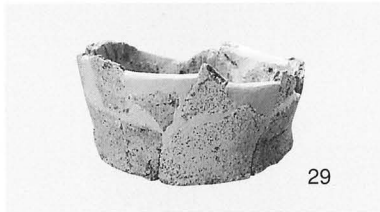

24

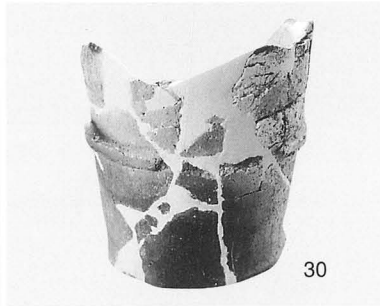

25


26

27

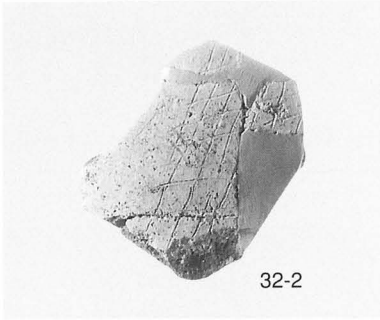

28


29

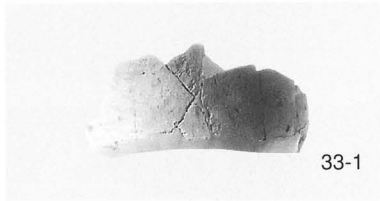

30

31

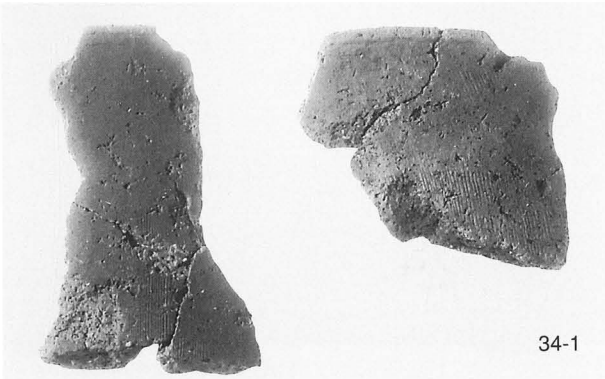
32-1

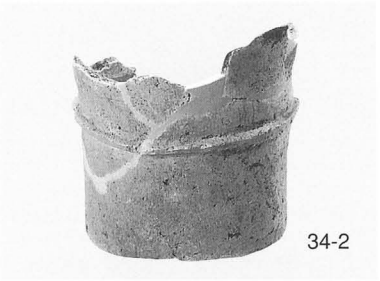

32-2

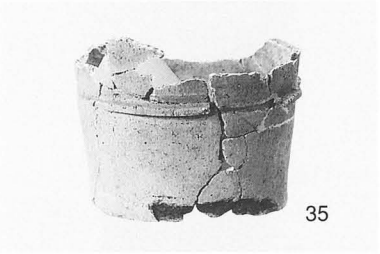
32-3


33-1

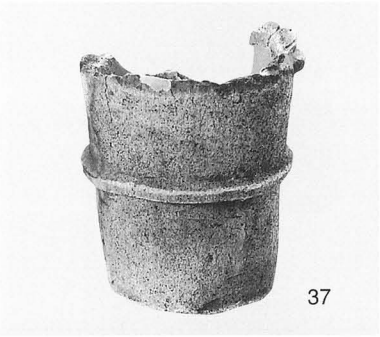
33-2

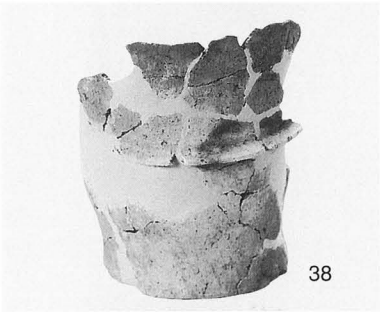

34-1

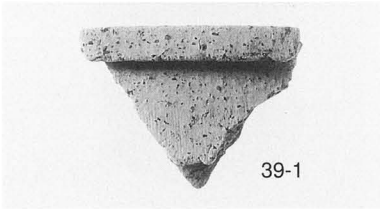

34-2


35

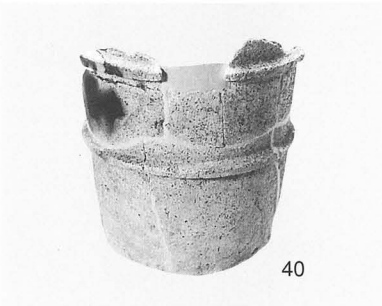
36


37


38


39-1

39-2

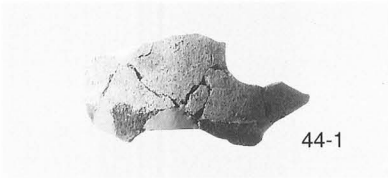

40

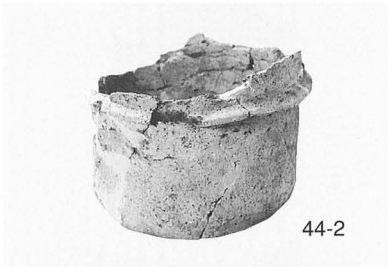
41-1

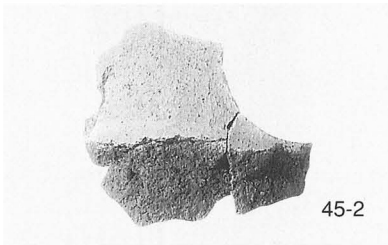
41-2

42

43

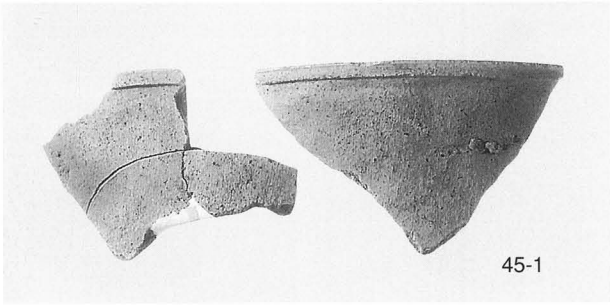

44-1


44-2


45-2

45-3

46


45-1